は凡て獨逸的の自負的孤立に陥つた。カントがさうである。ヘーゲルがさうである。

ヘーゲルは「實在意志は、獨逸の自律的絶對決心により代表的に現はれ、全世界は精神物質共に神卽ち絶對精神の具體化として、獨逸意志により統御管理さる」といふた。而してトライチケはその精神を煽動し「戰爭は論理也」といふた。

獨逸は世界の改造を自らの手によつて爲し遂げようとした。ランケは、獨逸のその傾向を不滅也といふた。

獨逸的なるこの精神は、世界大戰の精神となつた。左にブラスコ・イバニエズの「默示錄の四騎手」の中から、歐洲大戰を決意した當時の獨逸氣分を摘錄しよう。

「一の國家は根本的に獨逸民族たる事に依つてのみ、偉大なる運命に向つて熱望することが出來る より少く獨逸人たる事は、より少く其の文明に價値少い事である。我等は皇帝ウヰリアム二世の神勅の如く、人類の貴族にして地の鹽たらむ事を期す。

基督敎の神は一つ、獨逸の神は一つ、偉大なる味方は只一つの眞理である。誰がこの獨逸に反抗する事が出來よう。唯一つなる基督敎の神は、獨逸の敵卽ち外國人に對して、その强大なる妬みの

神性を發揮し給ひつゝある。

獨逸文化は世界の精神的組織である。必要に應じては敢て殺戮流血も辭さない。文化は人間の裏に潜んでゐる惡魔を犧牲にするものであつて、且つ道德であり、理性であり、科學である。我等は大砲力に訴へて文化を傳布する。優秀なる精神は、劍に依つてのみ全うせらるゝ偉大な進步の自覺に入る。而して戰爭は、トライチケがいふたやうに、最も高い進步の形式である。

死に瀕した古羅馬人は、死の墓を堀つてやつた獨逸人を野蠻だといふた。今日の世界にも死の嗅ひがしてゐるから、世界は我等を野蠻人といふだらう。言ふ者をして言はしめよ。遲疑逡巡も馬鹿議論もあつたものでない。力だ！ 素敵もない。明白に眞理を語るものは力！」

嘗てビスマークもいふた。「議論には下手でも、兵力さへ大ならば人は常に正當也」と。

獨逸哲學を編み出した實在は、獨逸人の憎惡心と突擊的所有本能の中に醱酵して、獨逸文化を生み出し、力によつて獨逸民族を統一する原動力となつたが、それはまた世界君臨の狂信となつた。ランケがいふたやうに、獨逸文化の形而上學的原動力が永遠に續くものなら、今日のファッショは

如何なる世界觀へと發展の可能性があるだらうか？　吾人は後章に於てこれを吟味しなければならぬ。

七、哲人フヰヒテと教育家ペスタロッチ

ナポレオン一世に蹂躙された後の獨逸を刺激して、夜の闇路に匐ばう獨逸國民を光の中に投げ出した卓拔な人物は、哲人フヰヒテと教育家ペスタロッチの精神である。フヰヒテはナポレオンが侵入して來ると、大學の教壇から飛びおり、銃を握つて出征した程の愛國者である。ペスタロッチは赤貧を物ともせず、チューリッヒを中心として貧民の兒や、乞食の兒を集めて、初等教育に一生を捧げた田舍漢であるが、歐洲の諸帝王に會つて、その非凡なる實際教育を談じ、多大な感動を與へた豪傑である。

フヰヒテは、その田舍漢を引つぱり出して、獨逸唯一の偉人なりとし、その精神、その方法により獨逸の教育を革新するより外に、獨逸を救ふ道は絶對的にないと獅子吼した。その獅子吼に曰く

「不朽なるものを植えつけむとする獨逸人全體の努力、また獨逸人によつて全人類をその永性に結びつけようとする觀念、この二つが獨逸人の國家に對する愛である。

獨逸國民の本然性に則して、哲學的科學的宗教的なる獨立自主の愛國者を養成するには、如何なる教育法を採用すべきか、それにはペスタロッチが創造主張して已に效果をあげつゝある教育法によらなくてはならぬ。

ペスタロッチは、辛勞多きその生涯を通して、一方に於ては自己の不完全より生ずる一切の障碍即ち自己の頭腦の不明瞭、才能の不充分、學問の不足等、是等の困難と戰ひ、一方に於ては、貧苦に迫られ、外部からの斷へざる誤解誹謗を受けながら、直覺的目的を見事に追及して來た。彼が不屈不撓の精神を以て、絶へず自らを鼓舞激勵しながら、發揮して來たところのものは、全く本來獨逸的な衝動憫れむべき獨逸國民に對する熱愛であつた。この本然愛は、ルーテルを起たしめし如く異つた時代に一層適切に彼をして眞の生命を發揮せしめた。ペスタロッチの教育にして始めて明確なる認識と獨立自尊の生活が可能となる。

そも〳〵人工的に造り上げられた歐洲列國均勢てふ國防策は、不徹底なる基督教が造り出した安

想である。若し獨逸一國なりとも、獨立自主の統一を有して居たならば、獨逸は太陽が天體の中心に輝く如く、歐洲の中心に立つて、平和を保つ事が出來る筈である。これによつてのみ、獨逸は自然的存在の必然性により、列國に眞の均勢を與ゆるであらう。

外國人は詭謀老獪にして吾人を欺いた。今や吾人は一切のものを奪はれ盡したのである。この時に當つて吾人を動かすものは、財力に非ず、兵力に非ずして全く精神力である。吾人は今や眞理を見、吾人を救ふべき唯一の手段を發見した」と。

フヰヒテに現はれた烈火の如き精神は、ナポレオン一世の歐洲征服と對等で、しかも意義反對である。

八、ヘーゲルの國家哲學

最後にヘーゲルの國家觀につき、その要領を得る必要がある。「歴史に於ける理性」てふ彼の講演から左に摘錄しよう。

一、主觀的意思と、一般的なるものゝ統一は倫理的全體であり、而してその具體的內容を國家といふ。

二、國家に於てのみ、人類は理性的生存を有するものである。

三、人類は國家に於てのみ、自己の本質を有する。人類は一切の價値、一切の精神的具體的事實を只國家によつてのみ有す。

四、國家は現實であり、倫理的生活を可能ならしむる唯一の事實である。

五、國家の目的は、道德的行爲と道德的論理とを實行し思索するの尊嚴を維持することである。

六、倫理的全體の存在とは理性の絕對的要求の發現したる姿である。理性の絕對的發現力にこそ建國に對する英雄の威權と功績がある。

七、國家は公民の爲に存在するのではない。國家はそれ自身の爲に存在する。國家の存在は卽ち神の存在である。

八、國家の本質は倫理的活力、卽ち地上に權化する神の力である。それは一般的意思と、主觀的意思との合致に存する。この本質はまた主、卽ち自然と精神の主なりと思惟するを得。他に對する主に非ず、自己自身の絕對主である。

九、偉人は孤獨の中に修養し來つた者であらうとも、蓋し國家の理性をわが裏に完成した者に過ぎない。

一〇、一切の觀念は國家に於て顯象し來る。力と顯象との區別を明かにしなければならぬ。力とは本質で、顯象は客觀的事實である。

一一、國家とは、それ自身に於て、一般的な現實性を公民の間に有する一の抽象的概念である。

一二、最良の國家とは最大自由の支配する國家である。

九、汎獨主義の失敗と大戰

獨逸は急激な勢を以て發展した。その產業、貿易、銀行の活動は、金權國英國の一大脅威となるに至つた。獨逸皇帝は、世界大帝國の實現を企圖して、先づバルカン半島の諸邦を其の勢力圏內に收め、英國の富を讓り受くべく、進んで近東の最大富源地メソポタミヤを開發し、波斯灣に出で、印度洋上の全權を掴むべく進出し、一九〇三年には、バグダッド鐵道の布設權を收め得た。それに

老大國露西亞のシベリヤ線を管理すれば、全世界の覇權は獨逸のものである。

獨逸のあらゆる學者は盛んに汎獨主義を讃美して戰爭を鼓舞した。その代表的人物として、ベルンハルヂーあり、チャムバーレンあり、大學教授のオストワルド、同じくトライチケが世界的に知られてゐる。その他大學教授、思想家、小說家、宗教家に至るまで、口と筆を揃へて戰爭を謳歌した。

戰爭の謳歌者は悉く、獨逸國民を以て神の選民なりと宣明し、世界の國々は悉く獨逸使命の下に平伏し、以て皇帝の王澤に浴すべしと論ずるに至つた。

この時英國は、倉皇てゝ近東に於ける獨逸の勢力を碎かむが爲、波斯灣頭なるバグダッド線の終點を占領し、同線に沿ふて波斯橫斷線の布設に着手した。

獨英の敵視が益々高まつた際、獨逸を盟主とする中歐同盟國は、時の不利を一掃すべく開戰の急を希望した。同時に獨逸內に於て一刻も早く宣戰の必要ありてふ輿論が沸騰した。それには二つの理由があつた。一つは兼々露國との條約によつて、農產地たる東部獨逸が年々の大好景氣を續け、莫大な富をなして居たのに、あと數年で滿期が來る。その憂ひを一掃しなければならなかつた。もう一つは、獨逸の鐵鑛が間もなく採掘し盡されるといふ專門家の聲であつた。

その矢先、一九一四年六月二十八日、ボスニヤの首都で、墺國皇太子夫婦が、露國を後援とする大セルビヤ黨の一青年に暗殺された。墺國怒つて翌月廿八日セルビヤに宣戰した。これより先露國と墺國はセルビヤ問題で互ひに動員して居つた。俄然獨逸は同盟國のためとあつて露國に宣戰した同時に獨佛の國境に交戰開始され、英國は起つて獨逸に向つた。これ世界大戰の發端である。

獨逸は東西兩部戰線に分れ、西部戰線は巴里を脅したが目的を達し得なかつた。東部戰線では波蘭を占領し、露軍を追つて、司令官ヒンデンブルグは國民から偶像的崇拜を受けた。バルカン半島は概ね獨墺軍の手に歸した。

獨軍は更に英國の封鎖政策を憤り、一九一七年二月無制限潛航艇宣戰をなして慘害を與へた。間もなく露西亞に革命起り、獨墺に對して媾和を結んだので、獨逸は二百師團の武力を以て巴里を陷れむとした。然るに聯合軍に米兵參加し、爾來獨軍奮はず、獨墺兩國に過激派社會黨蜂起し、國民の窮乏甚だしく、一九一八年十一月獨墺皇帝位を退き、兩國共に民主國となり、同月十一日大戰の終局を見るに至つた。

汎獨主義は水泡に歸してしまつた。ヘーゲルの所謂神は、炬火を棄てゝ姿をくらました。トライチケの思想は一片の煙と消えてしまつた。

第二篇　大戰後の世界

第一章　歐洲大戰の思想的意義

羅馬帝國の虚墟の上に、近代歐洲諸國が現はれた。「世界統一の神聖なる觀念を宿する不滅の帝國」と、自負してゐた羅馬が、骨格と神經を有せざる大軀の如く斃れた後、羅馬に反抗して起つた近代諸邦は歐洲に平和を齎らすべき原理を失つてしまつた。近代國家の召命を意味した文藝復興と宗教革命は、個人を刺戟する力とはなつたが、歐洲の平和實現とは反對の道を走つた。而してその道程が世界大戰の慘禍を激發したのである。

歐洲大戰を外部から觀れば、利權を爭つた列國の搭闘であるが、內面的に觀ずれば、判然として思想精神の絶望的闘爭である。而して大戰の慘禍と、大戰後の絶望狀態は、從來の歐洲思想精神が

最早破産した證據を暴露するものである。その思想精神戰とは左の意味を有する。

一、世界大戰は、演繹法論理と歸納法論理の合戰であつた。前者は獨逸が代表して理想主義の旗下に、歐洲の統一、ひいて世界の管理を目標とし、後者は英國が代表して、實利的なる功利主義哲學の世界的勝利を目標とし、共に失敗に歸した。換言すれば神祕に酩酊した狂信理論と、物慾に酩酊した理論の衝突である。

二、世界大戰は、論理的に手製された贋神（にせがみ）（物慾）と、個人主義的にでつち上げられたる贋神（物慾）とが搏闘した合戰である。その結果、贋神たる歐洲的な基督教の神を阿片として棄て去り、共産主義に赴くやうになつた。

三、世界大戰は、生産と分配の道德的秩序を實行し能はざる歐洲人の自己破壞力を意味したものである。

斯くて世界大戰は、從來の基督教的理想主義も反基督教主義も、從つて夫等の造つた法律も論理も、人類に平和を齎らすものでないことを證明した。

同時に、世界の統一は勿論、歐洲の統一も、歐洲人の思想精神を以てしては、全く空想に過ぎないものなる事を證明した。

吾人はまた世界大戰の文明史上に於ける形而上學的根本義を發見しなければならぬ。その根本義とは左に述ぶるが如くである。

世界大戰は、近代歐洲文明の結論であつて、人類歷史の過去に於ける祕義と、未來に起るべき祕義とを暗示するものである。

即ち、人類の歷史は、古代に於ける神政の光が消えて以來、白人が物質的に東洋を侵略し、物質的富を以て自己優越權を自負しつゝ東洋人を卑（いや）しめて來た歷史である。然るに東洋は成吉思汗（チンギスカン）及び匈奴、また回々教徒でさへも、歐洲人に東洋の血汐と、東洋的なる精神的衝動を與へた。彼等東洋人の血汐は、ロシア人及び獨逸人の血汐に混じて、彼等の間に歐洲的ならざる本能を祕かに育てたのである。即ちロシアに於ける文豪トルストイや、ドフトエフスキーの如きは、アングロサクソンや、ラテン民族には見出すことの出來ない神聖にして不思議なる本能の持主である。往時蒙古人が

歐洲にキプチャプ王國を建設した時、露寒き天幕の都モスコウや、ノブゴロッドの天幕のかげで、蒙古英雄が殘した裔は、後世歐洲的ならざる不思議な熱情の人物としてロシアに現はれたのである。ニコンのやうな東西兩洋の特質を持つた僧侶や、ドフトエフスキーのやうな深い神祕的觀照力の持主や、トルストイの如き神聖なる煩悶と道德的衝動の持主は、成吉思汗や、拔都等が持つて居た東洋的なる本能を移し植えられた者の血統を引いて居る證據である。

また獨逸人が、東洋的なるルーナの直觀を持つてゐたのは、遠い昔、遙々とパミール高原を越へて、朝日の登る亞細亞大陸の彼方から移住して行つた者の生理的影響を受けた證據である。

歐洲人が常に東洋の物質を掠めやうとしたのに反し、東洋人は常に精神的に歐洲に侵入して、歐洲人の本能に、神祕的統一的なる原則を植へつけようとした。基督に現はれた東洋精神は、羅馬帝國に流れ込んで行つて、彼等に世界統一の聖望觀を目ざましてやり、羅馬亡びて、統一の本能は羅馬の傳統的本能を宿した佛蘭西の英雄ナポレオン一世の潜在意識に働きかけた。次に東洋的なるルーナの本能を有つた獨逸人の精神に、統一の幻が宿つて、神祕的根元を有つ理想主義哲學や、神祕的ロマンチシヂムの文學を盛り上げた。

然るに凡て東洋的精神による歐洲統一の試みは、歐洲人の物慾に壓倒されて、其の目的を失して

しまつた。歐洲の物質的侵略に對するに、精神的統一を以てせむとする東洋の潜在的精神的活動力は悉く拒否されてしまつたのである。その爲に歐洲には平和の希望をつなぐべき資質が根本的に消え去つてしまつた。哲學は貧困となり、資本主義經濟思想に代る社會主義經濟思想も、彼等の救ひとはなり得ない。

歐洲文化のこの黄昏の中に、共産主義とファッショが起つたが、前者は馬車が馬を曳くやうに物質的形式が、人類の精神を引きずつて行く誤謬思想であり、後者は世界的救濟には盲目で、國家的利己主義を再建せむとする歐洲最後の試みである。

世界大戰は、東洋の潜在意識が、白人の物質的本能によつて全く拒否されたことである。これによつて歐洲は平和の祕密、即ち普遍的なる救ひの原則に破産してしまつた。

大戰は實に、西洋の實利本能と東洋の形而上學的本能との合戰を意味したものである。然しながら、拒否された本能は、出口を變へて、異れる水路に激し、俄然その迸湧口を發見するものである迸湧すれば、客觀的なる史的活動として表面化する。而して今や、東洋の潜在意識は粹然として日本に鍾つてゐる。日本がやがて、潜在的活動力を意識的に摑み出す時が即ち、全人類の上に、史的劃時代の統一的原則を具體莊嚴すべくスタートを切る時である。我等は今や、その嚴肅なる內祕的

因果法の逼迫を痛感する。

第二章　今後のロシア

ロシアに革命が起つたのは偶然でなかつた。苛酷なる專制々度と、地主貴族の搾取とに苦んで居たロシアには早、一八七〇年、南露勞働同盟、北露勞働同盟が組織されて、革命への準備が着々と行はれてゐた。當時の悲慘な農奴の生活に就ては、ロシアの詩人小說家が幾多これを描いてゐる。無政府主義は、當時に於ける代表的青年等が熱心に抱懷するところの思想であつた。幾多の有爲な青年が、ラドガ湖上のうら寒きブラツセルブルグの城砦なる牢獄に打込まれて居たのは、遠き以前からの事であつた。當時、シベリヤ總督のムラビヨフ伯は、有爲の士官や、流刑に處せられた無政府主義の青年を召ーて、シベリヤ共和國建設の計劃を立てゝ居た程である。

日露戰役で旅順が陷つた時、ロシアは革命の危機に迫られた。引きつゞきロシアが大軍を極東に送つたならば、旅順陷落後に於て、早くもロシア革命の火の手が擧つたらうといはれる。斯くして

俄然帝政ロシアが、ボルセビキーによつて轉滅したのは一九一七年の事である。

一體共產主義とは、どんなものか？　生物の中には、ロシア人よりも、もつと理想的な共產生活を營んでゐる白蟻が居る。メーテルリンクの白蟻の研究はよくその事實を說明してゐる。

白蟻の共產生活に於ても、ロシアのレニンやスターリンと對等なモロックが居る。モロックとは昔カルデヤで子供を犧牲に喰つた神々である。その生活法則は、誠に巧妙な共產的論理法によつて作られて居るが、結局、その社會に於て一般の白蟻は犧牲となり、　時にモロックは、翼が脫け、眼が見えなくなり、性能が盡き果てゝ往生してしまう。結局共產主義の生活は、一の例外もなく全體を亡ぼすものである事を白蟻が證明する。

ソヴイエト・ユニオンは今、大仕掛けの武裝國家資本主義への努力をなしつゝある。二三千哩乃至五千哩に亙る廣茫たる地域が、軍隊組織で耕やされてゐる。その小麥はカナダの小麥を征服し、その大豆は滿洲の大豆を窒息せしめつゝある。その石炭採掘量は、戰前の二千五百萬噸から年一億噸にのぼり、鐵は五百萬噸から一千七百萬噸に、油が一千三百萬噸から四千五百萬噸にのぼり、三

十馬力乃至四十馬力のトラクターを百五十萬臺造り出さうとしてゐる。かうなれば、ロシアの集産的農業は完成に成功するだらうといふ事である。重輕工業は何處まで發展するか、大きな鐵工所がいくらも設置されて居り、その原料は無限である。水力電氣はシラベ革のやうに全國に行きわたらむとし、新化學研究所、肥料製造所、セメント工場、新炭坑採掘、米國式石油業、パルプ、製材所新式冷藏庫製造所、製粉所、製肉所が各地におこり、舊都會も活用され、新都會も興るといふ勢で獨逸、アメリカから一萬三千の外國技手を雇ひ込んで居るといふことである。

斯くして巨大な建設にかゝつて居るロシアの內狀はどうであるか。グペウの多いことは、不平の徒を片つぱしから引致して腹切りを命ずる印であり、工場勞働者は、十四の部門から印を貰はねばならぬといふ嚴格さで、いさゝかでも不平な言のいひ振りをしたら早速打頸である。食物は割當てで、材木も薪も石鹼も煙草も同樣。ミルク、卵、バターは子供だけにしか分配されない。兒童の就學も　病人の入院も割當てだから、學びたくても學ばれず、病氣になつても入院が出來ず、入院しても施藥と診察が間に合はず、モスコウを中心として住むに家無き者が何百人居つたといふことは四、五年前の話であつたが、今はどうなつて居るか知らない。國家としては偉いことをしてゐるが人民は社會主義の將來に望みを持つて居ない。ロシア人は英國人の四分の一しかパンを食つて居ら

ず、砂糖の消費量は英國の六分の一で、靴を穿いてゐる者は、四人の中に一人、それもボロ〳〵になつてゐる。赤きロシヤは黑いロシアであるといはれてゐる。白蟻の王は多くを貪ぼるが、一般の勞蟻は犧牲になつてしまうと同樣である。勞蟻が辛抱のよいやうに、ロシア人は少しでも希望があれば安心するといふ性格である。一ロシヤ人は「一億六千萬の人民が夢を喰つて生きてゐる」といふた。

そのソヴイエト・ユニオンはいふ。「世界の產業的均衡は、ロシアが再び世界の市場にのり出さない限り、決して回復するものぢやない」

然しロシアが產業に成功したならば、滿洲の農業は痞塞し、獨逸の東部農業地帶は立往生し、カナダの小麥は征服され、そのダンピングは世界の市場を荒らすことゝなる。ロシアは精神的にも、經濟的にも、世界の良心を破壞する以外に、何等の貢獻もなし得ない。

極端なる統制經濟から來るソヴイエト政府と人民との矛盾、プロレタリアトと農民との矛盾は、ロシアの內部に橫る困難である。ゲペウを怖れ沈默を守つてゐる農民も勞働者も決して希望を持つて居ない。怠惰で、無秩序で、窃盜、淫惡、飲酒はロシア人をその內部から蟲ばみつゝある。

外には獨逸も、英國も、米國も、また波蘭、エストニヤの近接諸邦も悉くロシアを憎んでゐる。內には沈默せる不平が深まつて行く。バビロニヤ帝國の如く、政府は富を有しても、人民疲弊するに至つては、將來の健康を期待することが出來ない。

若しロシアが白蟻の最後を演じなかつたとするならば、どうなるであらうか？　露國文豪ドフトエフスキーの描いた或る聖者は豫言して左の如く語つた。

「若し私が、孤獨の祈りに憧れてゐる弱い行者の間から、再びロシア全國を救ひ出す人が現れるといつたら、人々は喫驚するでせう。夫等の人々は、その日その時、その年その月の爲、靜かに祈つて居ます。彼等は寂しい孤獨の中に在りながら、眞理の中に在つて、純然たる基督の心を持つて居ます。時が來れば、彼等は世間の法規が毀れかゝつた時、その眞價を現はします。」

ドフトエフスキーの描いた聖者は假設的人物ではなくして、眞の人物を配したのだといふ。聖者は再びロシアを救ふ者が、シベリヤに流刑となつて居た者の子孫の中から出て來ると豫言した。或る時がめぐつて來たならば、ニコンのやうな政治的宗教的天才が、機會に乘じて、どんな偉業への宣告に成功しないとも限らない。人類はその潜在意識に旋風的な天才を潜めて居る。人類は機械的

統制の奴隷たることも、貴族僧侶の奴隷となることも等しく耐へ難きものである事を知つてゐる。

寧ろロシアは、人類世界に於ける思想精神的の大低氣壓圈を造り出してゐる。暴風雨は低氣壓圈內を目がけて、四方八方から轟き打寄する。ロシアはその運命を脫することが出來ない。

第三章　伊太利とファッショ

伊太利は古來幾多の國家的危機に惱んで來た。ファッショでなければ收りのつかない國である。

世界で一番犯罪率の多いのは伊太利である。伊太利の殺人犯は英國に十六倍乃至二十倍し、佛蘭西に五倍する。これは最もファッショ以前の統計である。伊太利國內に於てのみならず、世界の最大犯罪人は伊太利人である。米國のシカゴ市を破產の憂目に陷らせたのは伊太利人カポネであつた

氣候溫和、風光明媚な伊太利は、世界的國土といはれ、昔からあらゆる人種の集會所となつて居

た上に、あらゆる商隊の通過するところとなつて居た。故に伊太利は歐洲各國の人種混合を來らした。

實利的に集つて來た混合人種が、思索よりも本能、瞑想よりも鬪爭に走つたのは當然である。基督教も伊太利に入つて來ると變質して、超越的から實利的となり、獨逸に於けるが如く、理想主義の哲學にはならないで、美術と儀式を重んずるの傾向をとつた。ところで儀式といふ事はつまらない事のやうだけれど、決してさうでない。複雜なる人種からなる伊太利國民を統一するところの政治的一大作用を演出した。

伊太利にも神祕主義者が出て一世を動かした。聖ベネヂクト、アシシの聖フランシス、詩人ダンテこれである。ベネヂクトは五世紀から六世紀にかけての人で、斷崖の下なる洞窟の中で三ケ年苦行生活をつゞけ、奇蹟的な行爲を以て世を驚かした人物であるが、政治教育上の實際事業にたづさはり、修道院の開祖として、中世紀に於ける歐洲教育の濫腸となつた。皇帝グレゴリ一世は、彼に感激して初代羅馬法王となつた。

アシシの聖フランシスは、人間及び自然物に神の普ねき愛を見て、人々に親しみ、雀や鳩の類に至るまで愛を傾けた。彼は空想に耽つたが、その空想には羅馬人の實利觀念と、政治的觀念が現は

れた。

詩人ダンテは、その神曲に現はれて居るやうに、幽界、靈界をさまよう神祕家であつたが、他界に存在せる死者が天罰を受けて居る事を說いて、一切を道德的に批判し、以て政治的の熱情を發揮した。

伊太利の神祕家は、印度や支那の神祕家と異つて、凡て政治的色彩を有つてゐる。

伊太利の文藝復興は、カトリックに反抗する痛烈な叫びをあげたが、少數の天才の間に止まつて民衆的に擴がらなかつた。伊太利は天才と凡人との差異甚だしいところである。凡人に天才は解せられず、彼等を動かすものは天才よりも暴力である。然し伊太利の暴力は凡人の中から現はれ出ない。天才が暴力を揮ふに至つて、熱情的な民衆は、どつとこれに追從する。

文藝復興は暴力を發揮しなかつたが故に、流石の天才も天下に感化を與ゆること能はず、その結果は政治的に一層惡くなり、司法もなく警察もなく、自己を防禦するには腕力に訴ゆるといふ狀態になつた。特に幾多の小國に分立して居た事とて、その紊亂の狀は言語に絕した。文藝復興は多數者にとつて、宗教的道德的の死滅だつたとさへいはれる。

その紊亂せる中にマキヤベリーの思想が生れて來た。彼が獅子と狐の精神を以て、祖國の統一を實現すべしと說いた帝王論は、哲學といふよりは寧ろ欺かざる現實主義であつた。

その後伊太利は、ナポレオン一世によつて征服され、小邦亡んで却て國家統一の氣運が起つて來た。ナポレオン三世當時、伊太利は佛國と結び、墺國を討つて國家の統一を計らうとしたが失敗に歸した。

一八六〇年志士ガルバルヂーが出でゝ、伊太利の大部分を統一し、一八七一年羅馬を陷れて全國統一に成功し、エマニエルが國王となつた。ガルバルヂーが天下を統一するまで、文藝復興當時眼をさました統一の精神は實現されなかつたのである。その間實に數百年、絕えざる內患と外憂に苦しまなければならなかつた。學者、思想家、志士はその間、羅馬法廷に於て訊問され、多くの天才が苛酷な刑に處せられた。コロムブスの如きは、祖國に信ぜられず、外國の女王に助けられて、アメリカ發見の天運にめぐり會つた。

伊太利には幾多の祕密結社があつて、犯罪人を養成しつゝあつた。「伊太利で人間の生命は無價

値である」といはるゝ程、殺人行爲は頻々たるものであつた。だから伊太利はファッショでなくては收まりがつかないのである。

統一後に於て伊太利はまた經濟上の危機と共に社會上の危機に陷つた。伊太利の社會主義はマルクス派經濟學者もいふて居るやうに、一種の變態で、他國に類例がない。卽ち伊太利　會黨は、勞働者ではなくして中流階級である。しかも學校敎師が其の多數を占めてゐる。醫師、辯護士、工業家、建築師等高等の敎育を受けた失業者が頗る多いので、彼等は社會黨になる。但し、「この國民は本來諸種の社會主義的空想の實驗者なるには餘りに銳敏なり。彼等は革命に對しては恐怖を懷き、これを免れむが爲には凡てのものに耐へ、初めには堪ゆべからざるものをも忍ぶに至る」と、佛蘭西哲學者フイーユのいふた事は適評である。

祕密團體、殺人、社會黨、是等の破壞的現象と絕對反對に、彼等が規律を尊ぶ精神と、驚くべき結合力を有つてゐることは奇蹟的である。寧ろこれは、羅馬法典治下の永き感化である。

如上の伊太利精神が今日のファッショ國家をつくり出したのである。大戰に於て八十萬の青年を殺し、莫大な負債を呑負つた上、殆んど得るものゝなかつた伊太利は、慘憺たる財的紊亂と共に社會的危機に陷つた。戰前の社會主義者は忽ち一變して共産黨となり、あはや伊太利が渾沌たる恐慌時代に入らうとした時、スタンダルが豫言した通り、眞の伊太利精神の權化が出現した。それは往時のガルバヂーに比敵するムッソリーニである。

ムッソリーニは一般にその存在を知られなかつた一新聞記者で、大戰に際し、愛國者の先見力を以て大戰不參加論を排擊し、積極的參加を主張し、自ら出征して、四十二ヶ所の生傷を受けた。戰後祖國が斷魔末の危機に陷つた時、彼は忽然彗星の如く出現した。

時は一九一九年、大戰後第一年目の事、ロシアの共産主義は速早くも伊太利に類燒し、共産黨本部の命令により、伊太利共産黨は、工場を占領し、雇主や技師を放逐し、南部に於てはソヴィエトの名の下に大土地を貧民に分配した。然しながら經營運用法を心得ぬ勞働者は、占領した工場に手を燒き、忽ち恐慌襲來して、擧國的にどん詰つてしまつた。勞働者はそれをブルヂョアの罪に歸し正に大虐殺が始らうとした。當時の政府は勞働黨の勢力におびえて、失業者に對し、年々食料の無

料配給を續けて居た爲に、赤字が四年間續き、爲に伊太利の豫算は缺損年三十億に達してゐた。

國家破滅の危機に臨み、ムッソリーニは出征軍人に向つて總動員の號令を發した。血眼になつて超人的號令を待ちあぐんでゐた熱血の在鄕軍人は、ムッソリーニが誰であらうと構はない、時來たとばり潮の如く集り、一大號令の下に凛として天下の秩序は確保された。一九二二年十月、ムッソリーニは羅馬に進軍してファッショ政府を押立て、斷乎としてその政策を實行した。食料の無料配給は直ちに廢止され、赤字は忽ち消えて、剩餘金まで出て來た。

抑々ファッショ精神とは如何なるものなるか？　一九二八年五月六日、ムッソリーニはローマに於て、法の精神を講演していふた。

「常に精神は大事件の挺である。道德的熱狂と、理性と、忠誠なくんば何事も成功出來ない。大計劃、大草案、法律なるものは、嵐の如き理想によつて吹き起されるでなければ一の死文字に終るものである」

ムッソリーニは此の熱情を以て、從來權利本位によつて動搖して居た國家を、義務本位の精神によつて造り代へた。その精神を表はすファッショの三綱領とは卽ちこれである。

一、我等の精神は祖國、本分、規律。
二、我等には義務在つて權利無し。唯自己の義務を遂行することを主張し得る權利あるのみ。
三、我等には實行あつて議論無し。

ムッソリーニはこの精神によつて、個人企業の奬勵、刺戟、保護監督を土臺として、勞資の協働體を作り、以て伊太利を經濟の危機から救ひ出したばかりでなく、農業の奬勵によつて、全國面積の八パーセントに相當する新耕地を開拓し、爲めに伊太利は完全に外國品を驅逐し、國產小麥だけで生活することが出來るようになつた。又工業の進出は著しいもので、その比率は英米獨佛をしのいでゐる。ムッソリーニはまた完全に、勞働者の魂を祖國に呼び戻して愛國者となした。苦勞人なる彼はよく人情を辨へ「勞働後」といふ制度を生み出し、以て勞働者の慰安娛樂の設計をなし、又自由勤學の便宜を與へ、日曜日はクリスマスに似た樂しい集會を喜ばせて居る。

さて、伊太利がファッショ化したことは、英雄ガリバルヂーが伊太利を統一したことの必然であつたと同じく當然のことである。然るに何故、ファッショは、伊太利の元老からもカトリックの法

王からも、また將軍からも現はれ出ないで、新聞記者上りの一兵士によつて出現したか？

一體伊太利は、熱情と暴力と臆病の三つが混合された國である。そして熱情と暴力を代表した知識階級は、無產中流階級である。共產黨も、熱情と暴力とを持つて居るが、二つの缺點をも有つて居る。一つは愛國的秩序の基礎がないことで、一つは知識がないことである。ムッソリーニは、共產黨のこの缺點を滿して、伊太利の眞の要求に應へた。

無產知識階級は、共產黨から見れば、やがて滅亡すべきものである。然るに精神力に於ては、各國ともこの亡びむとする階級に最も大なるものが燃えつゝある。それは斷末魔の悶絕から出て來る最後の焰ではなくて、因果合法性による新時代の精神的發芽を意味したものである。共產黨は精神を無視するが、人類歷史の因果合法性から見れば、現代は最も偉大なる精神力を要求されて居る時代である。

マルクス黨が見るところの階級鬪爭としての人類歷史は、時代を追ふて復雜且つ廣範になり、それに伴ふて精神的內容が益々淺薄になつて來た。この傾向は階級對立を超越する中間物を造り出した。それが無產知識階級である。無產知識階級は、對立せる淺薄狹隘な精神の持主なる支配階級及び勞働者と異つて、歷史的因果合法性による全體主義の精神內容を植えつけられた。この精神內容

の先驅者として、ファッショが現はれたのである。

然し、歴史的因果合法性は、ファッショ以上の偉大なる精神的要求を、無産知識階級に迫つてゐる。蓋し精神的に出發して、全體を掩ふ明日の現象はいかなるものであるか？　この確實なる精神世界の出現は、唯物主義の共産黨を根抵から覆へす人類的奇蹟である。

いかにして何處から其の代表的な力が出現するか？　これ偉大なる豫言者の豫言に待たなければならぬ。

伊太利は近年再び赤字を出すに至つた。ファッショ伊太利は更に精進奮起しなければならぬ。人口增殖の奬勵と共に、伊太利は國境を越へて發展せざるべからざる運命を持つ。その運命がいかなる歴史を造つて行くか？　吾人は伊太利の安全を希ふと共に、靜かに達觀して、ファッショの精神內容は國境を越へてまで、普遍的眞理を有たないことを痛感する。

第四章　ナチスとその將來

ムッソリーニが伊太利に現はれたやうに、獨逸にはヒットラーが現はれた。等しく史的因果合法性の然らしむるところである。

ヒトラーは無名の一勞働者であつたが、會々深く感ずるところあり、マルキシズムとユダヤ人の研究をして斯う思ふた。

一、マルキシズムは、人類の上に投ぜられた毒瓦斯である。

二、マルキシズムはユダヤ人の復讐哲學である。

三、ユダヤ人は、嘘吐きの名人で、掴みどころのない水母見たいな奴である。掴んで見ると、キョロリと指の間から逃げ出して、何時のまにか毒を注射してゐる。ユダヤ人が獨逸に居る間獨逸は救はれる道理がない」

蓋し獨逸人は昔からユダヤ人を憎惡する本能を有つて居た。

墺國生れのヒツトラーは、大戰に際し、バイエルン軍隊に參加して出征した。決死隊の編成さる毎に志願し、戰後拔擢されて士官となり、下士卒の教育を托された。

當時獨逸には幾多の革命黨が鎬を削つて居た。會々新政黨の獨逸勞働黨がミユンヘンで政談演說を試みた。ヒツトラーはそれを傍聽して、一大學教授が「バイエルン州は獨逸から分離して墺國と合併すべし」と論ずるを聞き、これ獨逸を陷れる佛蘭西的な惡智であるとし、憤然痛烈な駁擊を加へた。僅か六名から成つて居た黨員達は、ヒトラーの雄辯と論旨に感激して彼に入黨を勸めた。これがヒトラーの爲に備へられて居た飛躍の天門と誰が知らう。

ヒトラーは、建築技師にならうと思つて居た素志を飜へして、決然政治運動に身を投じた。彼がルーデンドルフと共に活動を始めると、時の社會民主黨政府は頻りに彼を警戒した。一九二三年十一月八日の事、會々バイエルン總督のドクトル・カールがミユンヘンのビーヤホールで訓示演說をして居た際、ヒトラーは一群の青年を指揮して會場に闖入し、中央に機關銃を備へつけ、自分は二挺のピストルを手にして演壇目がけて濶步した。飛つく警官を跳ね飛ばし、喫驚仰天してゐる總督

と、軍司令官及び警視總督の三名を別室に拉致し、卓上に四挺のピストルを差し向けていふた。

「この三發は諸君の爲、この一發は仕損じた場合のわが爲、諸君これから予と共にクーデターをやらないか？」

三人ともこの威光に捲き込まれて否應なしに贊成した。そこでヒトラーは壇上に現はれ、群衆に向つて「諸君、今より獨逸の宰相はわが輩であり、獨逸の軍司令官はルーデンドルフである」と叫んだ。聽衆は驚き入つたといふよりは大喜びであつたといふ。それも其の筈、當時獨逸は大インフレーションの結果、物價騰貴して大富豪階級を除き、殆んど全部破產して、ベルリン建築物の半ばは和蘭人の所有になつて居た程の折だつたから。

暴力的に出現した彼は投獄の止むなき運命に陷つたが、九ケ月にして出獄し、議會運動に訴へて輿論を喚起し、一九三三年には、三千七百萬の投票を集め、不可抗的な勢力で其の目的を到達し、以て獨逸精神の中に、右翼をも左翼をも捲き込んだ。プロシヤ王室も、貴族も、農民も悉く捲き込んだ。學生の八割も捲き込んでしまつた。商工就業員は擧げて彼の味方となつた。工場勞働者は共產黨が多數で、社會民主黨これに次いで居たが、共產黨の一部はヒトラーに走せ參じた

こゝに於てワイマール内閣（社會民主黨と中央黨の聯立内閣）は倒れて、一九三三年一月三十日、ヒトラーが政權を掌握するに至つた。その夜彼が全國に放送した施政演說を左に抄錄しよう。

「一九一八年十一月革命により社會民主黨が政權を握つた……彼の呪はれし日より十四年の歲月が流れた。その不幸の日より今日に至るまで天は獨逸國民を祝福することを止めた。凋落の悲運は容赦なく其の進行を進めた。恐るべき欲望と嵐の如き暴虐とを以て、共產主義のカラクリは、疾風怒濤の中に在る國民を絕滅せしめむとした。ボルセビズムが若しこゝに一年繼續されたらむには、祖國は遂に滅亡し去つたのである。こゝに國民政府は、獨逸國民を窮乏のどん底より救ひ出さむが爲に、四ヶ年の歲月を約する。四ヶ年によつて十四ヶ年の罪惡を悉く根絕する。獨逸國民よ、我等に精すに四ヶ年を以てせよ。然る後、我等を批判し、我等を審刑せよ」

ヒトラーは、英傑ビスマーク以來七十年間、實現されなかつた聯邦廢止、國家統一を一夕にして實現した。十七聯邦よりなる確執の癌は忽ち治療された。政府確立と共に彼はユダヤ人放逐を斷行した。大戰に參加せし者と、その因緣ある者を除き、官公吏は辭職せしめられ、藝術家、醫師、辯

護士等にして國外に逃れ去つた者が二十萬に達した。

更に彼はマルクスやレニンの著書その他ソヴイエトの著書を、伯林大學や圖書館から引き出し、フレデリック大王の彫像の面前なる廣場で燒き捨てゝしまつた。

「これによつて、眞の優秀な獨逸文明が生れる」と、愛國者は叫んだ。

夫れに續き、國權黨は自己解體となり、カトリック黨たる中央黨及びバイエルン國民黨は引き退いた。引續きヒトラーは、軍備平等權の爲、國際聯盟から脫退した。

社會民主黨政治の結果、獨逸には六百萬の失業者が出來たが、ヒトラーの英斷により、一文の現金無しに、間も無く四百萬人の失業者に職を與へた。

ヒトラーの政治は、左右兩翼の渾然たる祖國化であつて、政治はそのまゝ祖國精神運動である。

一九三三年四月二十五日、ゲーベルス大臣は、ヒトラーのナチス政府を代表し、全國に左の檄を發した。

「勞働を尊べ。

勞働者を重んぜよ。
額と拳とは相離るべからず。
鍬とる農夫、工場勞働者、推進機を操る工夫、研究室の學者、臨床の醫者、設計する技師！　凡て諸君は五月一日の國民勞働祭に際して自覺せよ！
國民の現存と將來とは、何ものにも優つて緊要なるもの、各自その立場に在つて、祖國及び一般社會に最善の貢獻を爲すべき腰あるを自覺せよ」

獨逸は百五十年間に、二回の偉業を爲し遂げた。最初二百六十六の群小國より成る渾沌の獨逸から、滅亡の妖魔を掃ひのけて、無學頑迷なる國民をして、祖國愛に燃え上らしめつゝ、近世最高の文化へと奇蹟的發展を促がしたのは、文藝復興、宗教革命、ペスタロッチ主義教育の力によるのであつた。その力には全世界をゆすぶるに足る力が滿ち滿ちてゐた。
再び渾沌の獨逸はヒトラーによつて統一され、祖國愛の精神が燃え上つた。然しながら昔日の文學と教育が齎らした普遍的內容に比すべき眞理を、新獨逸は生み出すことが出來ようか？　ヒトラーは獨逸を死の妖魔から救ひ出した。然しながら世界に匐ばう妖魔を退治することは出來ない。己

の鐵鎖は斷ち切つても、世界の鐵鎖を斷ち切る事は出來ない。
若し獨逸が父祖讓りの强敵ソヴイエト・ロシアを征服し、彼と聯結せむとして屢々反意に出づる墺國、波蘭を合せ、更にメーメル、エストニヤ、フヰンランドを合して、惠むに物質を以てし、而して「人類の秩序は、偉大なる精神によつてのみ可能である事」を立證するの大氣慨が出て來なかつたならば、斷じて往時の勢力へと還元することは出來ない。獨逸東部の大農業地帶は荒廢し、獨逸の鐵は間も無く掘り果される。のみならず、ナチスに反する六百萬の共產黨、八百萬の社會民主黨(前者と結合する)があり、七百萬のカトリックが羅馬法王配下にあつて、全歐カトリックと結合し、新トーマス主義の下にその勢力を結束しつゝある。ヒトラー失脚せば獨逸はまた渾沌の闇に入る。

第五章　英國の將來

今後英國はどんな運命の道を辿るであらうか？

大戰後、英國は二百五十萬の失業者に、月五拾圓づゝの失業手當金を拂つた。年總額十五億圓である。產業貿易不振の中に、この莫大なる失業手當は、さながら英國の頸にぶら下つた石臼見たやうなものであつた。米國のハーストはこれを嚙つていふた。

「英國は今後斷じて救はれない。救はれむが爲には、失業保險を全廢するより外にないが、英國の爲政家にこれを斷行し得る者は一人もない。今日、國家を脊負つて起つ者が一人もないのみならず又、後嗣者を得ることも出來ない。せめて將來の國民的精神力に俟つより外に道はないが、歐米に於て最も保守的にして活氣無きは英國の教育である。英國の教育は將來の大英國を擔つて起つ國民をつくる事が出來ない」

失業手當の爲、英國は赤字豫算を繰返へし、借金までして支拂つて居たが、それにもとう〳〵行

き詰り、最早借金の道が途絶へた。英國の信用は危機一髪の間に懸つた。和蘭はうろたへて、英蘭銀行から預金を引き出した。デンマーク、スウエデン、ノルウエー相ついで之に倣つた。斯うなつては金の輸出禁止も間に合つたものでない。

この危機に起つて、爲す事なしと思はれて居たマクドナルド首相は、祖國を亡國の危機から救ひ出さなければならんと意思した。決然彼は反對黨なる保守、自由の兩黨を口說き落して擧國一致內閣を組織した。この內閣が執るべき重大行爲は、勞働者の賃銀引下げ、失業手當の漸次消滅を斷行して、勞働黨の讓步を求むる事であつた。

當時の諸大臣は事の行はるべきものに非ざる事を主張して辭職することゝなつた。如何となれば其の政策は國民の九割二分に相當する大衆の納得すべき性質のものでなかつたからである。然しマクドナルド首相は自己の識見の正邪を試さむとして、一九三一年十月議會を解散し以て國民の輿論に問ふた。選擧の結果は意外であつた。マクドナルド內閣は未曾有の大多數を以て成功したのである。

この現象は、英國にとつて豫想外なる大出來であつた。ハーストは英國が到底この結果を收むる

事の出來ないものとして米國の新聞で罵倒したが、その罵倒は適中しなかつた。凡夫のやうで、存外の力量を發揮するのは英國の特長である。直覺的ならず、理想的ならざる英國は、事物を天才的に先見して見事に敏腕を揮ふことを知らない。然し實際的功利的で、細心の注意と、全體の集注力とに永き訓練を經て來た英國人は、事に臨んでその膽汁性を發揮し、いざとなるに及んでは、全力的に一致團結する。

英國のこの現象は、ファッショ化への傾向とも見らるゝ。英國も遂にはファッショ化しなければならぬであらうか？

大多數の爲には、英國人は擧國一致の意志を結束する特質を有つてゐる。功利主義の哲學はその性質を示すものである。故にファッショ的傾向が、常に大多數を率ゐて行けば、再びクロムウェルの昔に戻るであらう。

然し英國の將來は、さう簡單には行かない。內には二百年の歷史を有つ勞働組合があり、世界に於て比類なき消費組合の發達せるがある。消費組合が一八四四年、ロッチデールの町で、二十八名の勞働者により、祖師ロバート・オウエンの思想信仰を汲んで產聲をあげてから、其の發展は驚嘆

的である。マルキストは、これを嘲つて夢想的といつたが、夢想どころではない。今や英國唯一の不滅な有機體として健全に發展しつゝある。

英國消費組合の將來は、內閣を左右する實力を握り得る。大戰中にも政府を左右してパンの暴騰をおさへた。のみならず、歐洲に於て死滅した基督敎の精神は、只消費組合の組織體の中にのみ眞實の發展を爲し得る。紀元一世紀よりこの方、眞實な基督の魂は宿るべき所がなかつた。羅馬帝國の行政權の中にも、カトリック敎會の中にも、プロテスタントの世界にも、眞實な基督は宿らなかつた。永遠の基督は、生產と消費の自治體たる消費組合以外に迎へらるゝ場所がない。

消費組合が、自らの生產機關によつて、自らの消費を完全に維持しつゝ發展することがいよ〳〵確實となり、再びウエスレーのやうな宗敎的天才が現はれて英國を動かしたならば、一百年の歷史を持つ英國消費組合は英國の產業と內閣を、己の手に握り得ないと限つたものではない。

其の時が來なければ、基督敎の精神は歐洲に再現する事が出來ない。若しその時が來たならば、獅子と狐の外交侵略によつて、その大を築き上げた英國は、古るい歷史を脫ぎ棄てゝ、基督と共に世界を眺め、謙遜と友愛の情を以て、ニューギニアの委任統治を日本に托し、また濠洲を日本の爲解放すべきであらう。これは一百年前、二十八人の勞働者がロッチデールで消費組合を起した時の

夢よりも、遙かに確實なことである。

英國は理想を持たないが、英國消費組合は理想を有つてゐる。英國の精神は古き衣となつて綻びかけたが、英國消費組合の衣は新らしい。破れた錦の衣を脱いで、新らしい木綿の衣に戻る雅量と謙遜がなかつたならば、英國の將來は永久の苦しみに深まつて行かなければならぬ。再び過去の奪略を繰返へすことは許されず、再びその市場を取り戻すことも望まれず、植民地は獨立を計り、その領土は叛旗を飜へす。

若し英國にして、そのまゝの狀態を持續せむか、彼女の唯一の救ひは、再び獅子と狐の本性を現はす以外に道はない。如何にして、獅子と狐の天才は酬ゐられるか？　それは日本と米國との戰爭破裂を誘致するより外に道がない。而して當然英國は日本の敗戰を希望して、東洋に有史以來の發展地磐を再建せむとするであらう。

天これを許して英國を救ふか？　天これを拒んで正義を地上に實現するか？　人類の行方は神の手の祕密の中に在る。

第六章　米國の明日

「合衆國の救はるべき道は只一つ。市民諸君よ、吾に服從せよ！」。往年大統領が宣言した言葉は稍間が脱けて響く。

これは大戰當時澎湃として流れ込んで來た黃金の浪も一夜の夢、幾度ニラを試みても更に効果なき苦しみの中に、米國大統領が叫んだ一語である。

一體米國人は騷ぐ事の上手な國民である。哲人エマソンは米國人を評して「北風の吹いて來るやをすると、世の中がひつくり返るのかと思つて騷ぎ出す」といつたが暴評ではない。日滿事變が起ると、散々日本を罵倒して居たが、飛行家リンドバークの幼兒が掻きさらはれた記事が新聞に出ると、日滿の事は忘れて、リンドバークの噂で、天下持ちきつたといふ市民の住む世界である。だから大統領にもその米國癖があつて、景氣がよければ、一千年は大丈夫だといひ、ニラが巧く行かなければ、フラッショの眞似をして「吾に從ふより外に救ひの道はない」といふ。

廣大な土地、無限の原料、大ぶ無くなつたとはいふものゝまだまだ澤山にある黃金を抱き込んで世界に跨る大會社を幾つも持つて居る米國は、圖體の太さと智慧囊が釣り合はないやうな點を見る。エヂソンや、フォードのやうな、世界類例なき智者が居るといふことは、必ずしも其の國の智力とはならない。

アメリカが發展したのは、原料が豐かで、機械が發達したからである。然しそれが爲に生產過剩から來る米國の痛手は大したものであつた。歷史は原料の豐富、機械の發達を超越したものを、人類に發見せしめむとしてゐる。それは精神的なもので、智慧と力量の問題である。アメリカがエヂソンの科學的天才から轉じて、その智慧と力量とを發揮し得たならば、どんなにでも面白くなつて行く。

英國のエチ・ジー・ウエルズは、歐洲と米國を比較して、歐洲は枯れ廢れて行くばかりだが、米國は世界國家の最高模型であるといつた。ウエルズはいふ「歐洲は產業の發達と政治の發達とが一致しなかつた。その結果、歐洲列國に盛り込まれたものは、先祖讓りの腐れ切つた怨恨の情である。

斯る歐洲を倫敦から、モスコウまで旅行する事は並大抵のことではない。第一各地で言葉が違ふ。兩替をしなければならぬ。稅關で檢査される。旅行券の面倒がある。國境で空しく宿らなければならぬ。爲替相場の變化で、始終計算ばかりして居なければならぬ。斯ういふ風で、歐洲に跨つて旅行する人々は未だ少い。これに反し大アメリカは何處へ行くにも交通は便利で、何の面倒もない」

それだけ、米國は活動が仕易い。統一が行はれ易い。それに古るい傳統的ないがみ根性がないので、運動が功を奏し易い。米國ではどんな偉らい事でも出來る可能性がある。只それには偉大な精神が一つなくてはならぬ。

米國の廣大なる原野、重疊たる大山脈、原始的の大森林は、偉大な性格を育つる天與の賜物である。ホイットマンや、エマソンのやうな大さと明敏性を有つた人物が米國から、どし〳〵出て來なければならぬ筈である。

米國には全世界の人種が入り込み、何百萬のユダヤ人が居り、二千萬の黑人が居り、樣々なる混血兒がゐて、それ〴〵言語習慣、歷史を異にしてゐる。夫等がバラ〳〵に固つて仕舞はない內に、一億の大市民を精神的に統一しておかなければならぬ。その爲には敎育が大切である。米國の學校

教育は、日本の學校教育よりも、實際的で、官憲の骨折も徹底してゐる。然し學校教育には、インスピレーションが無い。基督教時代が、唯物主義の時代に變つた米國には、全國民を提げて起つ偉大なインスピレーションが無くてはならぬ。今、全米を掩ふ精神的な運動は、クリスチャン・サイエンスである。米國の將來はクリスチャン・サイエンスによつて支配されるやうになるだらうと評した米國の評論家が居るが、クリスチャン・サイエンスの病氣治療が將來を指導する力となる程、人類は幼稚なものでない。米國の大精神はエマソンやホイットマンを祖として發展しなければならぬ。エマソンとホイットマンに東洋神祕體驗の神髓が加へられるに至つて、米國には一大センセーションが起る。この意味に於て、米國の精神指導は、日本人と米國人との合致によつてのみ其の大使命を發揮することが出來る。日本は未だ曾て、白人に一人のミッションを派遣したことがない。只一人の傑出した人物にして心靈體驗の人が現はれ、米國人と結んだならば、米國社會がこれを迎ゆるの可能性は十分である。嘗ては日本に、切支丹が、近くば明治の中葉、日本一流の知識階級をプロテスタントが風靡したのは、外國宣教師の努力に由るのであつた。今や人類精神の轉化期に當つて、一人の日本人が米國に氣を吐くのは當然である。日米親善は米國に現はるゝ偉大な日本人によつて一層の美を爲し得る。

米國は共和政とはいふものゝ、その實は政治を以て商業となす者の寡頭政治である。これをあやつるものは、「フリー・マッソン」と、「ミスチク・シュライナー」である。故に民主黨の天下にならうとも、共和黨の天下にならうとも、商業政治から偉大な思想精神は生れない。「現大統領は、ユダヤ人と結托し合衆國を轉覆する者也」とは民間無產のウヰアム・ベリーが大膽に警告して居るところである。

フリー・マッソンは三十三の階位から成る祕密團體で、元來はユダヤ人の指導によるものだが、今や米國に於ては社會生存上必須缺くべからざる勢力となつて居る。第三十三階位を越ゆれば、シュライナーの會員になる。シュライナーは同々敎の祕密團體で、フリー・マッソンの上に在る。この會員になる者は犯罪行爲も、無罪放免となるとの事であるから、推してその伏在勢力を察することが出來る。

然し米國の斯る祕密團體から、將來の市民を指導する偉大な思想精神は生れて來ない。夫等は唯物主義の社會的祕密用具に過ぎない。最後に人類を動かすものは偉大なる道德的のインスピレーションである。

大アメリカは、消え去つた清教徒（ピューリタン）の感化以外、本來の何ものもない。米國が眞に要するものは、心靈の偉大性であり、そこから溢れ出る大道德の權威である。

光は東から！

この豫言は滿されなくてはならぬ。西洋から來た光は、東方古代の光による返照に過ぎなかつた精神日本は大光を掲げて、米國に活動すべき召命を有つ。

第三篇　天才日本

第一章　日本人の無意識的內在生命

宋代の譬へ話にこんなのがある。題は「三人の酢を味ふ者」といふので、釋迦と孔子と老子の三人が、人生を象徴した酢甕（すがめ）の前に立つて居る。

「不思議な甕（かめ）がある。何か入（はい）つて居る。謎のやうなものだ。一つ試して見よう」と三人が斯う相談した。

「先づ釋迦が甕の中に指を浸（つ）けて味つて見て、

「これやー、人生の味ぢや。苦々（にがゝ）しい味がする」といつて、顏をしかめた。

「どれ」といつて次に老子が嘗めて見た。「は、こりや結構、甘い味ぢや」

「どれ〳〵」三番目に孔子が嘗めて、二三遍舌をピチャリ〳〵鳴らしながらいふた。「こりや酸（すっぱ）

ゆいわい」

宋の人が三聖の人生觀を善くこの短い物語に象徴してゐる。同じ甕の中の同じ酢の味が、人によつてこんなに違ふのは、舌の味覺がそれ〳〵異つて居るからではない。めい〳〵の氣持が違ふからである。その理由は分らない。三人とも夫々自分には分らぬ無意識的傾向を持つて居るからである。

釋迦は人生を苦界火宅と思ふた。何故さう思つたか？　それは釋迦の潜在意識の問題である。釋迦はその苦界火宅から逃れる工夫をした。そして發見したのが解脱の道である。解脱はしても、實際世界は其の儘で少しも變つて居らぬ。只彼の觀念が變つて、苦界を苦界と思はなくなつた迄の事である。

老子の潜在意識は、釋迦のと大ぶん變つてゐる。老子は世間や人生が何であらうと、苦しいとも厭とも思はず、只虚つぽになつて居ればよいと思ふた。虚つぽになつて居れば、何でも入つて來る自己を虚にして、他を自由に入らして勝手にさせて置けば、あらゆる者に觸れ、あらゆる者を知つて、これに親しみ、これと調和して樂しむ事が出來る。だから何事があつても結構と思ふて居た。

孔子は現實主義者であるから、古來の道德を尊び、仁政を說いて、悲しいことは悲しいとして、苦しい事は苦しいとして味ひつゝ考へた。

斯ういふやうに、同じ苦しい現實に生きて居ても、其の人の無意識的傾向によつて、物の味ひ方も考へ方も變つて來るのである。

右は物語であるが、實際的に我々は毎日さういふ經驗をして居る。だから好き嫌ひの感情を異にし、行動思惟の判斷を異にする。

さういふ樣に、我等の意識的活動といふものは、凡て無意識的原因によつて定まるものである。これは心理學上の定理である。

そして見ると、純粹意識活動といふものは無いぢやないかといふ事になる。純粹意識活動といふものは容易に有り得ないから、哲學、倫理を初め社會科學上に樣々なイズムが現はれ、同一の眞理に對して、百や二百の宗教で收まりのつかぬ狀態になる。

ところが又善く考へて見る人は「そんな事はない。赤い花を見て、白い花とか、紫の花とかいふ者はない。色盲でない限り、凡て赤い花といふ。またH_2Oは水になるといふ事に對して、さうでな

いと云ふ者は教育ある人に一人だつてあるものぢやない。すると、純粋意識といふものは在るぢやないか？」といふ。

然しながら斯る場合には、誰だつて無意識的傾向を以て觀念したり、選擇しては居らないのである。そして見ると、意識的活動には、無意識的要求がなくて、普遍的に判斷が一致するとも多々ある。これは自然科學上の明白な事實や、數學的計算、幾何學的、物理的の定つた事實に對した時等である。人生や國家や宗教の如く、自然科學や、數學、幾何學、物理學の方法で說明し得ないものになれば、意識的活動が、無意識的傾向によつて、規定されるものである。そんな場合、無意識的傾向が純粋であつたならば、意識の判斷も純粋になるといふ事になる。

無意識的傾向は、どんな場合に純粋で、どんな場合に間違つてゐるか？　誤つて居れば行きづまり、純粋であれば永久性と力がある。そこで、先づ無意識の性質に就て考へなくてはならぬ。

無意識的活動力には、様々な種類があるが、根本的なものを大別すれば、個人的なもの、團體的なもの、民族的なもの、宇宙的なもの〻四つがある。この内最も大なるものは宇宙的なもので、これは神祕不可思議な内容を有ち、現はれては宗教となる。

然し是等のものは、一々獨立して居るのではない。個人的のものを離れて團體的なものはなく、民族的、宇宙的なものもない。この四つが一元的に調和して純粋であれば、それが健全なる機能を現はすといふ事になる。

ところが事實、この内の大切なものが缺げて居る場合がある。その最も著しい現象は、民族的國家的なものが缺げて、個人的のものと、宇宙的なものが著しく活動して居る場合である。斯ういふ場合には、盲目が視覺を持たぬ代りに耳が著しく發達してゐるやうな具合に、精神機能に一種の變則的贖罪現象が起つて來る。精神機能が内面的に傾き過ぎて、外的には現實的でなくなつて來る。右の譬へ話に酢を酸ぱゆいと思はなかつた類がこれで、その最も著しい代表者は、釋迦と基督である。この偉大なる二人の人物は、凡人の有たない智慧や通力を有つて居た。然〻ながら、その思想信仰は、個人的宇宙主義である。彼等には民族的觀念が薄く、國家的觀念が全然無い。故に彼等は政治的にいふと、無政府主義者乃至虛無主義者である。換言すれば彼等は超越主義者であり、世界主義者である。彼等は一切の歷史的價値が、精神的にも具體的にも國家てふ有機的實在を通してのみ發現する事を認識する能力に缺げてゐる。

古來偉大な超越主義者は、深奥なる精神力を有つて居たが、それ等は皆、唯我獨尊主義者で、亡國的偉人であつた事に間違ひはない。基督が亡國ユダヤに現はれ、釋迦が獨立性を失ふに至つた印度の史的因緣の產なることを思へば解る。

そこで玆に至極大切な定理を發見することが出來る。卽ち「史的最大の價値、精神的具體的なる不朽普遍の事實を生み出す者は、宇宙的本能と民族的國家的本能とを一元的に有する激刺たる力の國民である」といふ事である。

何故かとなれば、斯る國民は、釋迦や基督の如き精神力を、具體的なる史的最大の價値創造へと客觀化する因果律を有するからである。この場合その文化的現象には、宇宙的內容が盛り込まれ、その國家には統治權主體としての神性が現はれる。斯る無意識的伏在力を基礎とする民族は、內部的靈的向上と、外部的現實的發展とを、本來の一元的必然性によつて然らしむる形而上學的原理を有つてゐる。この原理は「上古の聖神、天に繼ぎて極を立てしより、道統の傳自りて來る」に現はされし本質的なもの、換言すればアブリオリによつてのみ把握されるものである。而して斯の如き原理を有する國民は、天壤無窮の神勅を精神的にも、具體的にも有する國民のみである。

この原理は卽ち、堯が舜に向つて「咨、爾、舜、天の曆數爾が躬に在り、允に厥の中を執れ、四

海困窮せば、天祿永く終へん」といつた言葉に含まれて居るが、堯舜の道は、これを直覺的に認めただけで、具體的に道統の傳を有たなかつた。故に四海困窮して、天祿が盡きたのである。換言すれば、堯舜の聖を以てしても、宇宙的本能と、民族的國家的本能とを一元的に傳ゆることが出來なかつた。

一體、アブリオリを以て、極を把握するの機能は東洋的であつて、西洋には本來缺げて居るのである。そこで、歐洲には民族的國家本能はあつても、宇宙的本能によつて、現はれて來る極の文化價値がなかつたので、これを東洋から移殖して、その民族本能に接木したのである。然し接木によつて變質したのみならず、遂には枯れてしまつた。卽ち羅馬帝國は、東洋の宇宙的本能から現はれた基督敎の文化價値を接木して偉大神聖な世界國家の實現を試みようとした。然るに基督敎の精神は、羅馬の專制政治に接木されて變質し、本來のものとは全く異つたものとなり、結むだ實は遂に腐つてしまつた。これが羅馬帝國の滅亡だつたのである。

腐れ落ちた羅馬の果實を棄てた近代の獨逸や英國は、宗敎革命によつて、プロメシウスが天火を盜んで天罰を受けたやうに、極なるものを天位から盜みとつて、個人のものとなした結果、大なる

罰を今受けつゝある。彼等は絶對神聖の觀念を失つて、精神的にも經濟的にも苦しみ悶いてゐる。

佛教も亦、民族本能によつて變質した。初め、釋尊によつて小乘佛教が印度に現はれ、次に地中海沿岸地方の神祕家と、印度波斯アフガニスタンの神祕家が合して、祖國無き大乘密教に作り變へられた。大乘佛教は殿堂伽藍佛教に變化し、支那に渡つて宋、元の王朝を亡ぼし、日本に寄留を求めた。日本に於ても佛教本能は、大和民族の信仰本能と衝突し、遂にこれを克服する事能はずして神佛習合時代を長く保つたが、遂に明治維新に當り、神道の大義が宣揚さるゝに及び、大和民族の宇宙的內容が鬱積し、僧侶は爭つて復飾を乞ひ、神祇に奉仕せむことを奏上した。この明確なる認識力は、更に莊嚴されて、明日の日本を育成しなければならぬ。

宇宙本能が、民族本能と本來同一である時のみ、潑剌たる永遠性を現はし、苦難に遭ふや、啓示に勵まされ、以て國家統治の稜威を顯はし、一切文化發展の衝動を高める。然らざる場合には、信仰は枯れ廢れ、或は理性によつて變化して來る。

佛教と基督教が幾多の變化を來したことは、夫等が現實に適應せむが爲であつた。夫等が政治に

適應しなかつたのは、民族本能と合致し得なかつた爲である。何故かとなれば、夫等は內容に於て非凡なものを有つて居ようとも、本來超國家的なものだからである。「宗教は超國家的也」とはよく佛教基督教の教師が悟り濟したやうに言ふことであるが、それは卽ち「現實的の極を掴めない」といふことの逃れ口上である。佛教と基督教とは、國家の形而上學的皇位となることが出來ない。卽ち國家の關捩子となることが出來ない。「關捩子無くんば學言語の漢なるのみなり」と、道元は道破した。その意義は、どんな法律や憲法學者や、哲學者が出て來て、どんな學理を講じても、關捩子がなかつたら、學問は覇道に陷つて間違つてしまうといふのである。今日の法律哲學者に內外一人も關捩子を直認した者がない。從つて、天皇を統治權主體として哲學し得る法律哲學者が一人も居らぬ。

亡國ユダヤに現はれた基督教と、亡國大月氏國に起つた大乘佛教とは、よし、どんなに個人的體驗の眞を有つて居ようとも、國家的の關捩子とはならない。ルッソウの契約理論によれば、それ等は共和國にも適應しないのである。所詮亡國にしか適應しない事となる。

だから兩教とも、民族及國家的本能を住居とせずして、その寂しき寄留を個人の觀念內若くば個

人の體驗に求めてゐる。

吾人は、以上の説明によつて、純粹なる無意識的活動力なるものは「宇宙的本能と、民族的國家的本能」とを、一元的に本來有つてゐるところの皇國にのみ有るものなる事を知つた。

更に進んで、心理的に、無意識的活動力の純、不純性に就ての考察を徹底しなければならぬ。説明を明かにせむが爲、再び佛教と基督教の心理的解剖を簡單に試みて、神道との比較をして見よう

佛教は小乘と大乘とに分れる。小乘の八聖道は、常識的に見て修身の普遍的教訓である。然しその究竟は、無我無實在である。何の爲の無我無實在か？　結局、個人主義的解脱以外の何ものでもない。

大乘佛教は、內部世界に向つて心理的に大飛躍をおこし、觀念の世界に宇宙的なる大コーラスを始め、大パノラマを現出する。華嚴經はその趣きを細かに説明してゐる。先づ鍛錬工夫の功を積んで三昧に入ると、因果法則にもつれ絡んだ苦界火宅の現實界が、パッと消え失せて、摩訶不可思議の十方淨土に早變りする。そこには唯心の佛が現はれ、佛の四肢五體から、様々な色彩の光明が輝

き出で、十方世界に漲りおし寄する。眼をあぐれば、何億萬里向ふに見えて居た星が直下に在る。次々に開展する大奇蹟の光景は、實に絶讃驚倒的である。然し斯る莊嚴な內部光景は、主觀が觀念した光景であつて、客觀的普遍的の事實とはならない。基督教も亦佛教と等しく、主觀的內觀的であつて、客觀的なる統治原理としての歴史的必然性を有たぬ。

佛基兩教共に主觀に偏執する。主觀偏執は、客觀偏執のマルキシズムと共に、實在の半面に固執する無意識的傾向から現はれて來た。無意識的傾向が斯の如く一方に固執すれば「脈絡貫通し、詳略相因り、巨細畢く擧ぐ」の活動性に缺げ、「發して節に當らず」、以てその無意識力を歪曲、激變し、事に當つて激し過ぎ、或は極端なる無抵抗主義により、現實的價値の中正を失ふ。斯る偏執的無意識力は主觀的の內觀道と、客觀的の具體道との合致を缺き、以て健全なる理性と意志とを誤まり、事實に對し、變則的、側面的の思惟行動に偏執する。これに「其の形全うして神全し」の狀態を求むることが出來ない。

それと異り、豪健なる思想精神及び、奇蹟的なる極の表現は、主觀客觀を本質的に具足する無意識的活動力の基礎の上にのみ行はれる。ヘーゲルの哲學は、この基礎の上に立たずして、理念の基

礎の上に立つたから、智的客觀的には强かつたが、理論の矛盾に陷つて、極を掴むことが出來なかつた。西洋藝術は客觀的無意識力を基礎としたが故に、その美には天地人三才を貫いて、宇宙的なる圓融無碍のすさびを線美や、さびの美に表現することが出來なかつた。また西洋の兵學はマキヤベリズムに見る如く、「獅子と狐」主義に始終して、「物と共に推し移る天地神明」(三略)であり得なかつた。

神道の無意識的活動性、即ち大和民族の純粹持續は、實在を認めて、無實在の觀念界に隱遁せず而してその實在を主觀的にも客觀的も、超越的內在的にも、具體的外部的にも把握する。故に內外表裏に貫通し、詳細相因り、以て內に秀づれば神靈の飛躍となり、同時に外に發して科學的發展、產業貿易の發展、皇軍の武威となり、政治的統一となる。それが神道意識の所謂「生きものを捉へる」ことゝなり、顯幽一貫、物心一本となつて、現實に神明を昭臨せしむる。この力無くんば、一切の思想は誤謬に陷る。

大和民族の無意識的活動力が、主觀、客觀綜合統一の純粹性によつて居ることは、愚管抄の著者慈圓僧正が最もよくこれを言明してゐる。曰く「……大神宮、八幡大菩薩(註。大菩薩は誤謬にして、明治天皇は八幡大明神と呼べと仰せ出された)はこれが爲に君臣の間、相信じて疑ふことなき君臣合體の禮を定め給へり。歷代の治亂は一に擊つて其の成否にあり」と、

君は主で、民は客である。君臣合體の禮は、主客綜合の純粹なる內在律の現はれである。主客綜合の純粹性は、必然的奇蹟を現ずる。この奇蹟とは、極致を掴む事であつて、例へば日本の弓矢の道や、兵法にもよく具體化されてゐる。即ち射手が、威容を正して、的に向つた時、射手の精神は主觀であり、的は客觀である、矢を射放つ刹那、主觀と客觀、心と物とが合致した時、ヒョーと飛ぶ矢は正しく的をうつ。矢が的をうつ事は事實であつて、理論でない。こゝに超論理の事實が現ずる。宮本武藏は、十三の年から二十九歲まで六十回の仕合に一度も負けたことがなかつた理由を考へ、二十年にして、やつと其の理論を發見し、それが主客合一の純粹持續に基因してゐることに氣づき、それを水の心ともいひ、實の道ともいふた。十三歲の子供が、武道の大家と仕合ひしてこれを斃したといふ事は奇蹟である。眞理は奇蹟を現ずる。君臣合體は眞理の奇蹟であるが故に論理を超越し給ふ大神宮と八幡樣が、その禮即ち無意識的潛在律を司どらせ給ふ。

斯くして、神道の無意識的活動力は、神を「隱り身」として內的心靈的に見、また同時に、「牙身」として、外的現實的に見る。嚴のみあらかは、內的超絕のみいつを現はし、瑞のみあらかは客觀的超絕のみいつを現はす。神籬は神性の主觀を示し、磐境は神性の客觀を示す。內に捲き收つて實在すれば、天之御中主神であり、外に創造發現すれば、むすびの神である。古來、眞の日本人は智的機能をヘーゲルの如く客觀的發展の方面にのみ見なかつた。日本の精神機能は、主觀的客觀的內進的外進的の性質を摑んで居たが故に、むすびの神を、高御產靈、神產靈として觀じ、常立の神を、天の常立、國常立の二神に觀じ、次に、豐雲野と狹槌の神に、主客綜合性を示し、また「ウヒヂニと、スヒヂニ」に、「ツノグヒと、イクグヒ」に、「オホトノヂと、オホトノベ」に、「オモタルと、カシコネ」に、「イザナギと、イザナミ」に、神性の主客綜合、內外統一を示した。天地が斯くて創造されたといふ事は、また我等の精神力が斯の如く主客、內外綜合力によつて向上することを意味するものである。

古來、大和民族は、本能の分裂、理性の歪變卽ち、「主觀と客觀」「內在と現實」との矛盾や偏執を禍靈といひ、兩者の本然的合致を直靈といふて來た。直靈は純粹持續より來る超人的奇蹟力であり、極卽ち關捩子の把握力であり、神明の照臨力である。

吾人は、一切の宗敎が史的役割を終へた今日、夜の闇を玻つて豐榮のぼる朝日の如く、神道本能の純粹持續を明かにし、以て人類指導の大責任を發揮し、史的劃時代への神々の創造へと奮ひ起たなくてはならぬ。これが日本人の面目である。これ卽ち全人類が無意識的に待望せる救世主の出現を意味する。

然るに無意識的活動力は如何にして、その潑剌たる力を發揮するか？　理性の以て如何ともなすべからざるは無意識力である。只、靈感と召命によつてのみ、この力は醒め來る。人類の歷史は、その根抵に於て、靈感と召命の歷史である。

"Nothing great and lasting can be done except by inspiration"

「靈感無くして、何ぞ偉大永遠の業を爲すを得め」……これはエマソンの言葉である。ニコラス・ローリックは、「眞理の永遠なる奇蹟」と日本を絕讃した。

歷史が吾人にとつて、一の大なるインスピレーションを意味しなかつたならば、それは吾人が歷

史を誤解したのである。インスピレーション無くして人生は誤られ、國家は誤謬の道を迷ふ。吾人は日本の歴史を再建して、偉大なるインスピレーションを盛つた人類的經典たらしめなくてはならぬ。靈感無き科學的歴史は、誤謬史であり、人類の恥辱を盛つた惡歴史である。誤謬と惡とは人類を破壞するものである。

日本には今ぞ、人類最大の感激史が作られなくてはならぬ。

全人類中、最も物の哀れを感じ、最も悲哀と悲劇の眞を味ひ得る者は日本人である。これ日本人が、更に大なるもの、燦たるものを生み出すべき召命を約束づけられながら、それを明白に把握せざる爲に起り來る潜在意識的鄕愁の故である。日本人は自らの涙を、感傷的な低級のものに墮落させてはならぬ。

同胞よ！　感激新たに、日本神性のために奮ひ起たうではないか？　萬葉の詩聖、柿本人麿は、現實に感激して、現實を直ちに高天原といふた。我等が純粹持續の持主として、偉大な現實的創造を爲し得る時、我等は卽ち高天原の神々である。天の沼矛の如き內觀力と、現實力とを持つ高天原の神々は、今も我等の姿でなくてはならぬ。

第二章　日本の超越性と現實性

「久方の天つ御門を、畏くも定め給ひて、神さぶと磐隱ります」

これは高市皇子の尊が、城上に行宮を定め給うた御有樣を、柿本人麿が謹述した文中の一句である。東國の軍を召し給うて宮居し給うた現實描寫である。斯の如く、現實と超越とを同視するのは日本精神の天性である。地上に天が燃え上るの慨がある。

「高天原に千木高知り、下つ磐根に宮柱太しくたてゝ、皇孫のみことの瑞の御殿仕へまつり……」

超絶崇高な天趣と、現實堅固の不動力とを以て、すめろぎに仕へまつる日本精神が、大祓のこの句に象徴されてゐる。

打建てらゝ御殿の御柱は白木の柱！　一切の虛飾と誇氣とを棄てゝ、正身を打立つる日本精神の象徴、萬古變りなく傳へられる淸明き直截性の日本氣質の象徴！

日本は神代よりこのかた、瑞の世界(現實)と、嚴の世界(超越)とを相離るべからざる一元世界として味ひ感激して來た。現實的精進奮闘に靈感を有し、見神の體驗あるは、即ちそのためである。

源義家が衣川を攻取り、逃げ行く貞任を追つかけた。

「暫くかへせ」と義家が馬上から呼びかくれば、貞任の馬の足並がゆるむ。將に追ひ迫つて義家は一太刀をあびせかけんとするかと思ひの外「衣のたてはほころびにけり」と歌つた。貞任の衣が破れてゐたのか、それとも衣川の館が攻落されたことを寓したのか。

貞任も一槍揮はうともせず、馬上悠然として「年を經し絲の亂れの苦しさに」と歌つた。

最後の組みしき討取り、生血滴るきはどい瞬間、英雄の心魂は、何と超越の崇高さだらう。兩雄の魂はこの連歌につながれ、敵意は消去つて、友情にむすばれた。現實の眞に徹して、超然の天趣をまとひ出したすばらしさではないか。

元就が本全知矩を攻圍した。城中兵糧盡きむとするを知つて、元就は降參をすゝめたが、木全は

父祖傳來の城を、むざ〳〵人手に渡すべからずと心得、仲々降らうとはしない。思案の結果、元就は箭文を城中に射入れた。曰く、

「秋風にかたき木全の落葉かな」

木全、射返し答へて曰く、

「よせ來て沈む浦浪の月」

それを見て、元就は圍を解いて歸つた。

英雄の洒落、超然として、人心の祕義にしみ動き、眞實の涙を催さしめる。立派ともすばらしいとも言ひやうの無い絶讃の心事、行爲ではないか。

天下の榮華を極めた平家一門が屋島さして落行く道すがら、寢られぬ浪の枕、九月十三夜の月が皎々と冴えてゐた。忠度初め月を眺めつゝ、其の夜の限り無き感慨を詠じ合つた。悲愴な最期をひかへて、月を眺めつゝ歌よみ合せた超越の心境には、すめろぎの代の榮えの爲めに、源氏が打つて代るも時の定めなりてふ潜在意識が流れてゐたのである。この美はしき心境は國民を動かして、幾千代かけても平家を讃美する精神となつた。

屋島に破れて壇浦に逃げ、哀れはかなくも海の藻屑となるに先立ち、平家は竿の端に扇を飜して船べりに建て、射よと美人にさし招かせた。源氏の那須與一が選ばれ、金覆輪の鞍置き、くりげの駒を波打ちぎはに進ませ、鏑矢を滿月に引つぱりヒョーと射放てば、扇の要に當つてヒラ〳〵と射落された。歡呼の聲、拍手の響は、味方の源氏よりも敵の平家から起つた。何といふ眞實をこめた超越の趣であらう？　さればこそ、源平盛衰記は、永劫に日本の錦心繡腸をしぼらせる。

天下は麻の如くに亂れた。誰かすめろぎの御爲めに、天下を統一しなければならぬ。通達の人、武田信玄は、信長の不義を憤つて、吾起たざるべからざる召命を自覺した。超人信玄は城を構へず身に寸鐵を帶びず、大小の木太刀を佩いてゐた。川中島の合戰に、慓悍の猛將上杉謙信が、躍進して、一人佇む信玄を目がけ、太刀風をあびせかけた。木太刀の信玄、などて刀を拔くべき。手に持つた軍團扇を以て、太刀を受け止め、難なきを得た。信玄、甲州信州の山地に陣し、鹽無きに苦しむを知つた敵將上杉謙信は、一聯の馬に鹽俵を連ばせて進めまゐらせた。彼我の將軍武に徹し、眞實に徹して、超然天涯脫俗の風格を喜ぶ。眞こゝに徹して神の如しである。まして信玄が猛敵をひかへつゝ、城を構へず、木太刀を佩いて居た現實徹底境は、超然として脫俗してゐる。日本人はか

かる人物に感激する神の如き性質を持つてゐるではないか？　人生、これが尊からずして何が尊からう。

さして行く笠置の山をいでしより
　天か下にはかくれがもなし

至上の御身であらせられながら、隱れさせ給ふ御所もなく、雨風の寒きに任せ給ひし、御痛ましさの中に、超然たる歌心を忘れ給はざりし後醍醐天皇を偲びまつれば、紅涙滂沱として坐ろ勤王の赤誠に感泣する。これぞ日本國民の丹心である。

財を棄て、家族に別れ、權利一切を捧げて湊川に戰死せし忠臣楠正成は、冷かなる墓石の下から幾百年の歳月を超え、日本忠臣の心に燃え上つて鬼神を泣かせる。

正成湊川戰死に先立ち、明極和尙、偈して言つたとかや。「兩頭俱に截斷すれば、一劍天に倚つて寒し」と、明極また正成を見て曰く、「爾徹せり」と、こゝにもまた現實に徹して、超然天に聳ゆるの神々しさがある。

この天性あるが故に、日本人はその智力に、聖なる靈的直觀の機能を結付け、その意志に超人間的なる魅力をまとひ出す。この機能無き者は、大器に與るを得ない。この機能こそ、泰西人が模索してゐる所のアブリオリによつて悟得する日本人の認識力を表はし、對象の必然的內在を把握する日本人の實行力を現はす。日本人が神明照臨の思惟行動を有するのは其の爲である。

日本人の意志と、英國人の意志とは、自づから異なる。

英國人の意志は、常に自己の利得を目的として、集中結束され、些細なる事件をも、針小棒大にし、以て無殘にも他國を奪ふ强壓力となつた。

日本人の意志は、決意せざるべからざるに逢ふ迄は、自然狀態に在るが、一旦決意するや、對象の內在を把握し、忽焉として不可抗力に神懸る。日露戰爭はかくして決意され、かくして勝利を得た。一生失敗に失敗を重ねた素人鑛山師が、會々一鑛山の前に立つて、立去るにも立去られぬ鄕愁の魅惑を感じ、神懸りの魅力を以て、望み無かつた苦の金主を說き伏せ、またも失敗ではないかと危ぶまれた山を堀つて、今度こそは驚くべき成功をしたといふ實例は、日本に幾らもある。これ日

本人の意志が、英國人のそれと異る所以である。

換言すれば、英國人の意志は、獅子と狐の如く働き、日本人の意志は、地上に權化する神々の如くに働く。

日本人の智力は、獨逸人のそれと異る。獨逸人の智的活動力は、全力的で持久性を有つが、獨逸的なる憎惡心によつて、他と調節することを避け、多元的で、渾沌と矛盾に分け入り、神祕直覺的なものを、面倒な論理的概念に構成し、以てその概念世界をぐる〳〵と廻りつゝ、遂に目的を取失つてしまふ。觀念論と辯證論的唯物主義の鬪爭も斯くて共に目的を失して迷路にさまよふ。

日本人の智力は、天啓に始つて夢路を辿り、獨逸的智力よりも銳く現實を掴み、またあらゆるものを利用して直觀的なるものを形式づけ、轉々と迷つて本質に戻り、渾沌から明朗に、矛盾から直截簡明に急轉し、對象の必然的內在を直覺して之を喜び、これを素朴なる論理的實際的形式に現さなければ、全く方向の異つた藝術にこれを現し、以て概念世界に迷ふことを嫌ふ。

換言すれば、獨逸人は、世界一の學者たること誇としつゝ、矛盾に陷り、日本人は、直覺と實際的價値を掴むことを喜んで超然としてゐる。

日本人の斯る智力と意志こそ、訓練と啓發の善き教育によらば、奇蹟を現じて、人類を驚倒せし

める眞理の父母となる。

第三章　日本藝術と統一的純粹持續

一、はしがき

そも〳〵藝術美は、政治經濟その他、一切文化の性質を綜合した無意識的表現である。藝術美の向上は、國民精神の向上を意味し、國民經濟生活の幸福を暗示する。一國の藝術墮落して、決してその國民精神は健全でなく、またその生活は幸福でない。藝術美の觀照される時代は、社會科學や哲學、倫理の盛んに論ぜれる時代よりも、遙かに高尚で、正しい秩序を有する時代である。

美の要素については、ヘーゲルや、ラスキンのやうな特異の哲人及び觀照の天才が樣々と說明を試みた。表現の率直、眞實、卓拔、均整、調和、節約、不可思議等がこれである。

然しあらゆる藝術鑑賞家の見逃してゐる藝術美の至上要素がある。それは卽ち日本藝術美の最高性質を示すもので「輕妙透明にして、衷に千萬無量の曲折を疊み潛めた圓融無碍の純粹統一感そのものゝ現れである」

これ作者の心境が主觀客觀融合の實在に參神した達道の美そのものである。吾人はこのすさびを日本藝術に於てのみ見る。これ皇道の潛在意識が、宇宙的のすさびを藝術上に象徵したもの。我等はこの象徵を日本の線美や、特殊の建築や、雅樂や、謠曲や、俳諧や、さび澁味の美や、劍道、弓矢の技に至るまで見出す。以下夫等の觀照的說明を通して、日本人の偉大性と皇道の神聖につき深き思をめぐらさう。

二、法隆寺の五重の塔觀照

大和民族が自然のまゝの表現時代から、意識的に美の表現をしようとする時代に移つたそも〳〵の初期は奈良朝時代である。その後日本人は白鳳、天平、平安、鎌倉時代へと移つて、それ〳〵日

本的の美を生み出したが、一番初期、卽ち自然と技巧との間に境界線が無かつた瑞々しい時代の作品には、未來永劫模倣の出來ない傑作を建築上に殘した。「初發心時、卽ち正覺をなす」と古の體驗家がいつたが、さういふ心の狀態に於て建築されたからでもあらう。古人また曰く「形を練るの妙は、心を凝すに在り。心凝れば氣集る。氣集れば丹成る。丹成れば形妙に、形妙なれば神全し」と奈良朝時代の建築は形妙に神全き感じがする。

奈良朝の建築で、法隆寺の五重塔は、昔ながらに殘されてゐる。風雨天災兵火を超えて立ち殘ること一千三百年、世界最古の木造建築物である。いや、外國に於ては石造の建築と雖も、斯くの如く完全に年久しく殘つてゐるものが無い。存在の永いだけ、それだけ健康の表象であり、且つまた健康を超えて神祕な意味がつきまとふ。

松林の間を歩いて、法隆寺の山門のほとりに出ると、サァーッとした透明な靜けさの中に身を見出す。その明るさは、銀座の夜の光ではなくて、謹み深い思慕の情にかすめられる未生前的の明るさである。重い現實から、輕ろやかに、なつかしい古へと、變化の思をそゝられる。

山門をくゞつて、五重の塔の側に佇めば、金堂も廻廊も配置よく一つに連つて、坐ろに古人の呼吸がわが身に通ふ。見れば見るほど透明に、何の汚れも心を遮らず、天に羽ばたき登る白鳳の思ひがある。しかもその明るさ輕さの中に、聲をひそめて立ち上つた不滅の力。

その深さ靜けさ、輕き喜び、眞實の崇高さ、それらの感じが、またしてもサッと心をなでる。見れば吾に靈感を惠む天人のやう。斯うした感じを抱いて佇む身は、坐ろに低徊去るに忍びない思ひがある。

永遠の故鄕を偲ぶ思ひか？

初發心時の思ひでか？

丹誠の妙を凝らしたわが若き日の思ひ出か？

さもなければ、吾にいつぞや大なる祕義を敎へてくれた恩師の住居か？

さういふ感じさへそゝられてならない。

聖德太子の建立にかゝるものだといふ其の建築物は、自然の呼吸と技巧の妙とを兼ね具へた設計

者と工人が、智慧と觀照と勞力とを合せて有機的完一體を作上げたのである。あの丸柱は希臘型であるといふ。印度ガンダラの建築方式も見え、支那風の趣も見られる。古人の智力をさげしむは、今の世人の常なれど、聖德太子には日本、印度、支那、希臘の知識に加ふるにイスラエルに就ての知識さへ有つたのである。

嘗て太子は「われ尊佛の像を有す、誰かこの像を得て以て祝ひ拜まんものぞ」といはれた事がある。秦造河勝がこれを京都太秦寺の境内なる太闢神社に祠つた。太闢は漢譯聖書に記されたイスラエルの王ダビデである。同神社にはイスラヰといふ井さへある。小野妹子が隋に遊學してこの尊像を煬帝から貰つて來たといふのだから、漢譯聖書も共に携へ歸つたに違ひない。當時は已に景教の聖書が漢譯されてゐたのだから。然らば太子には基督教の知識があられた段ではない。太子を厩戸皇子と申すのは厩の中に生れし基督にちなまれし御名である。（*第三四世紀頃支那に發展した基督教）

兎も角も、法隆寺の五重の塔は、東西建築の粹を集め、これを本來の天質に訴へ、純粹な統一體に建上げた獨創の藝術……神全きの境に到達せる最高至上の逸品である。

ゴシック、コリント、ビザンチンの莊麗な建築も、この小さな五重塔ほどに、あらゆるものを攝取綜合して、自己本來のすさびにより統一された建築はない。

太子は熱心な佛教徒で、十七條の憲法にも篤く三寶を敬すべき旨を仰せられたが、また上不禮にして下齊しからず、下無禮ならば以て必ず罪あり」と言はれた如く、上生下皇道精神の方であらせられた。三昧に入り給うた太子は、すめろぎの潜在意識によつて、調和統一の藝術美を表現する天性を發揮し給うた。

奈良朝から下つて、白鳳、天平時代にも非凡な建築が現れたが、殿堂伽藍佛教の年經るに從ひ、潜在意識の流露が淡らぎ、從つて美術建築上に絢爛、豪宕の形式美が加はり、それに逆比例して透明輕妙無碍圓融にして和かに眞を訴ふる日本美の趣が消えて行つた。

たとへば白鳳朝の建築なる奈良藥師寺、天平時代の建築なる唐招提寺の塔を比較したならば、藝術觀照の世界に、脈うてる皇道本能の相違を明かに識別することが出來よう。

薬師寺は、三重の屋根が一々裳層をつけて、絢爛たる複雑性の輪廓を花咲かせ、破調を大膽に統一したすばらしさを示してゐる。法隆寺の塔は、氣取らぬ靜けさの中に秘める透明な力の喜びを與へるが、薬師寺の塔は有らん限りの力を凡て其の裝ひに示してゐる。法隆寺を鎭魂の姿とすれば薬師寺は華かな法會の趣である。前者には獨創の純眞さを見、後者には支那風、伽藍信仰の形を見る

唐招提寺の塔は殿堂伽藍佛敎の信者ならずば人に非ずと思はれた時代の建築である。屋根の線のうねりが思ひきりよく雄大な翼をのべ、豪宕そのものゝ力を示す。但し力の緊張は、白髮三千丈とか、不老不死の薬とかいふ言葉にさへも現れた漢民族の特長である。

年久しく經つて、佛敎が全く形式化し、寺院は安逸を貪つて、人心躍動なく、道德の頽廢と共に上下一般の經濟生活甚だ苦しく、皇道の潛在意識殆ど全く感激を與へなくなつた時代に於ける佛者の建築は、薬師寺、唐招提寺の藝術的價値をも悉く失つて、日光の五重塔や、大阪天王寺の五重塔の如く、重ぐるしい姿となり、法隆寺の透明輕妙の趣は微塵もなく、特權階級が下を虐げるの趣、

時代の不安憂鬱を偲ばせる。のみならず建築上に於ける調和の神全き形を失つて危つかしい感じさへ與へる。天王寺の五重塔は、その最も甚だしいものであつたが、先年の暴風に敢なくも倒壞してしまつた。

「形備つて神全し」

絢爛、豪宕の裝ひにあらず、透明にして輕やかに、和かにして不滅の力を藏する調和統一の相こそ、日本藝術美の特長であつて、それは卽ち人格そのものゝ趣である。生むすび、足むすび、玉留むすびの體驗は、和みたま、幸みたま、奇みたまの表現美を藝術にも人格にも現はす。

三、雅樂に就いて

外來のものを取入れて、これを至純なる天性により統一したものは、奈良朝の建築よりも、平安朝に入つて音樂の上に一層その明瞭な度を加へた。平安朝時代の產物なる雅樂は、それが高殿の室

内音樂で貴族的であるとは云へ、その整調、氣品の高さは、日本自らの資質を現し、誇張、阿諛の惡毒しさを渾然離脱して肅然襟を正さしめる。

樂器には遠く埃及、ユダヤ、希臘、バビロニヤ、アッシリヤ、波斯、印度、ビルマ、支那、蒙古渤海國、滿洲、朝鮮等のそれがあり、日本の絲の音、鎭魂の岩笛の單調な調べに、全世界古今の樣々な音色が調和して支配される。かくて凡ては禮讃と欣求とに等しく一致し、悠々として迫らず、時雨る雨かと思へば、星影爛々たる趣に變り、高御座につかせ給ふすめらぎの御呼吸かとばかり、敬虔畏懼の思を催さしめる。すべてをまつろはす皇神の本能なくして斯かる調は出て來ないのである。

こゝでは朝鮮の哀調を帶びたナソリも光の中に輝き、粗野な滿洲樂もみそぎされ、波羅門の音脈も、佛敎のしめやかさも、神ながらなる諧調に歸化隨順する。遠くは古代埃及、ユダヤの神秘と、牧者の角笛が來朝參內する感じをさへそゝり、亡國バビロニヤ、アッシリヤの全盛時代が甦つて、わが大君を讃仰し奉る。

如何なる天才が斯かる諧調を導き出したか分らぬが、時と休止の整然たるさながら、天體運行の瑞樂を、嚴の殿上に移し奉つたやうな感じである。作意あつてなされたものとも思へぬ自然のまゝなるすさびに神さえて、一劍天に倚つて寒き旋律が出て來るのかと期待すれば、豈圖らんや、十六夜の月の調にも似た調と、吹奏樂よりも透る音脈の禮拜が一縷諧調にとろける。深き潛在意識の神の手に非ずしては、誰が斯かる調をかなで得よう。

あらゆる音階の組立に、さながら鳥羽僧正の戯畫に現れた自由な線美にも似た冴えがあつて、透明輕妙に和かくしかも森嚴に日本情緒を訴へる。諧調そのものが、皇道を禮讃するのである。

四、世阿彌の謠曲に就いて

平安朝の貴族政治が、鎌倉の武家政治となるあわたゞしさの中に、藝術も亦大なる變化を來した佛像の面相が鋭敏になつたり、四天王の像が仁王立ちに逞じい姿をもり上げたり、鳥羽僧正の繪

の如く、筆勢が單純にして飛躍的になつた如きは、まさに前代の高雅と哀趣を脱ぎ棄て、武士の氣慨が迫る趣である。

鎌倉の衰運以來、下剋上の權利觀念が世を亂すにつれ、藝術は衰頽して行つたが、室町の最惡時代の苦痛の中から、一條兼良の如き神道家が出て來たことは、一面藝術上にも類例なき試みが完成される時期だつたのである。

能樂の祖師世阿彌は、外來的なものを攝取しながら、古き日本の傳說、英雄の心事を訴へ、以て日本のまことを呼起した。その謠にも舞にも日本そのものが武者振ひつゝ正位體に具るの形で莊嚴する。

能樂の中には、勅使が遣はされて現實の場面がつゞき、最後に靈界の光景を展開するものがある夫等は特に日本精神の異彩を添へる。佛敎と下剋上觀念の全盛時代に、勅使を以て始まる藝術は、勤王精神の止むなきすさびであり、日本精神の自覺行である、この能樂が將軍始め特權階級の敬禮を受け、正位莊嚴寸毫のゆるみなく謠と舞、拍子と音曲のしつくりとした調和を以て舞臺の上に現

はるゝは、藝を通じての皇道獅子吼である。

「夫れ猿樂延年の事態、其の源を尋ねるに……神代より傳はるといへども、時移り、代隔たりぬれば、其の風を學ぶ力及びがたし」とは、世阿彌が花傳書の劈頭にのべてゐるところである。神道家一條兼良の熱烈なる神道思想は、世阿彌の感化によるところあれば、その皇道意識の藝術的表現を偲ぶに足る。

特に祝言音曲の本聲は「久方の神代、天地開けし國の起り」の安全な感音を出すべしといひ、その時の姿を松に喩へて「よろづ代を松にて君を祝ひつる、千年の蔭をすまんと思へば」の聖德太子の歌……衆木枯れて松のみになる趣を現せと敎ふるところ、世阿彌はその表情動作發聲にまでも、日本の正しき趣を神代の昔に求むるものである。

世阿彌はまた、祝言（五音曲條々）は天の命、天命を知つて懸りとなす動作を幽玄といひ、幽玄をなほ深めて感動の言葉を放つを戀慕といひ、戀慕に亡曲の心を附けて哀傷といひ、是等を習道し終つて

安位に到る達得を闌聲といひ、闌聲を以て道といひ「其の本亂れて末治まらず」とし、天地開け、國起りし時の感音を本としてゐるのは、其の藝全く皇道の深淵を行ずることを意味してゐる。斯くて彼は「始の安全音に還るは、一の力なり。是れ習道の能一なる故なり」といつて、天地開發の心を強調する。

其の力は劍を振ふ力にまさり、槍をしごく力にまさる。「これ萬能を一心にてつなぐ感力なり」と彼は言ふ。また當流に萬能一德の句ありとして、彼は「初心忘るべからず。時々初心忘るべからず老後初心忘るべからず、この三句、よく〳〵口傳となすべし」と敎へた。初心とは、天地の動き始めである。

申樂に幽玄あり、花あり、萎れたると申すことといふのがある。

風體も音曲も發聲も、幽玄を以て上果とする世阿彌は、すべての事を美と眞實の行と心得、また人の心に思もよらぬ感を催す手立を花として、「花は弓矢の道の手立にも、名將の案計にて、思の外なる手立に、强敵にも勝つ事」と同じき藝の秘事とし、以て幽玄の行から、靈德の花を咲かせようとする。「能は住する所なきを花と知るべし」で花は私なく模倣なく樣式なくして、說くべからざるものであるが、これなくしては藝に讃嘆の美がない。

幽玄から花が咲き、花よりもなほ優れたものは萎れたると申すことだと世阿彌はいふ。これまた辭に申し難きことで、左の古歌の風體を心にあてゝ公案せよといつてゐる。

うすきりの籬の花の朝しめり
秋はゆふべと誰かいひけむ（花傳書にあり。新古今集藤原清輔の歌）
色見えてうつろふものは世の中の
人の心の花にぞありける（宗節本にはこの一首を加へてある）

幽玄は、訓練を加へて現れ、花は所作風體音聲を心にあてはめて工夫され、萎れたると申すことは神秘幽玄の絕讃境である。斯くて藝道に通ずれば通ずるほど、力は裏に展びて、形は和かに妙となる。謠ひ舞ふ者の心も、これを見これを聞く人の心も、唯一つに融け合ふ境こそ、この神秘幽玄境である。それが何の誇張もなく、されど練り盡された道のすさびとなるに及び、內外呼應して力が天地人を包む。

嘗て世阿彌が將軍義勝の端午の節宴に「うとう」を舞つたことがある。藝は並居る貴人たちを引きつけた。然るにたま〳〵カケリの最中に、二羽の燕が舞臺に翔びこんだ、ために看客の視線が亂れ散つた。看客の視線が亂れると、能に限らず凡ての藝は失敗に終るものである。然し幽玄の手立に鍛ひ上げられた世阿彌は、一絲亂れず、動く心のまゝに花を咲かせ、內外呼應、滿場讃嘆の力を發揮した。丁度其の時、手に持つ棒を打ちぶる所作に入つた途端、一羽の燕が棒の端で、バッタリはたき落された。つゞく謠は「親は空にて血の涙」である。世阿彌は萬能一心の體驗を現した。持つた棒で一羽の燕を狙ふ所作に入つた。謠と舞、シテと燕とはその瞬間神に入つて、滿場唯肅として驚嘆の禮讃に凝つた。

これは世阿彌にとつて偶然の出來事ではなかつた。藝術美の一微塵も偶然に非ずして因果なる事を敎へてゐた世阿彌に取つては、燕が翔びこんで來たことも、燕をハタキ落したことも、すべてが一心に萬能をつないだのであり、幽玄の手立に花が咲いたのであつた。これが萬能一德の義で、天地始めて開けし時の神秘を藝に演出したのである。一心に萬能をつなぐことを心得ぬ者にとつて、二羽の燕が翔びこんで來たことは藝を失敗に終らしめる偶然の不幸だつたに違ひない。それは世阿彌に言はしめると「本亂れて末治らず」である。然しながら「本立つて末治る」道の體得者世阿彌

に取つては、二羽の燕が翔ひこんで來たことは、幽玄の花を咲かしめる神秘の契機だつたのである藝道に限らず、これは人生の最も尊い神秘である。

世阿彌の藝道は、奈良朝の建築よりも、平安朝の雅樂よりも、更に凜然と日本精神を傳へ、皇道の神秘を莊嚴する。しかも其の藝術美が、透明にして和かな趣……萎れたると申すことに及んで極まるの體驗を示して、それが實生活萬般の行と一致する道理を敎へるところは、正にこれ達人の境である。

五、線美の觀照

繪畫に於ける線の歷史は、まことの人類史を默示する。

線美を觀照することの出來ない史家は、まことの歷史を知らない。

まことの歷史は、生產發達の歷史ではなくて、人類純化の歷史である。

作品全體の價値が高まれば高まるほど、その線は美妙に、魅力を加へて純化する人心を偲ばせる

舊石器時代の後期には、生彩ある線美を傳へたところの線畫が畫かれた。新石器時代になつて一旦衰へたものが、アッシリヤや埃及の美術となつて盛んになり、それが希臘に於て高潮し、希臘のものが西歐に赴かないで、亞細亞に移り、ガンダラ美術となつて權化し、老子の感化を受けた書畫の線と合致して、支那の線美となり、日本に渡つて來て、一層の美を發揮するに至つた歴史は、戰爭や、國家の興亡や、生産關係を超えて、隱れたる不思議の歴史を偲ばせる。

希臘の藝術は、また文藝復興によつて、歐洲に再現し、基督敎の信仰と觸れ合つて、天使や、聖母の繪となり、近代の空氣に刺戟されて、リアリズムとなり、樣々なイズムを生み出して低徊してゐる。

東洋の線と西洋の線との間には、全く異つた歴史的過程の物語がひそむ。畫かれたものが、その時代人物を物語るのみならず、畫を構成する所の沈默した線そのものが、一層深い人類の謎を語るのは、一の大なる神秘である。

あらゆる時代の繪畫が、よしや傳說を畫き、空想を畫き、習慣を畫き、現實を畫き、理想憧憬を畫かうとも、線は一切の技巧表現に殆んど超越して、人類の運命に關する一の秘密を語る。こゝに線の歴史哲學が成立ち、線のイデオロギーが成立つ。

西洋の繪畫は、主として客觀世界をまた稀に象徵を、輪廓、色彩、表情によつて現さうとした。東洋はこれに反して、客觀を內觀の雰圍氣に移し、これを主として線によつて表現しようとした。

從つて東洋に於ては、繪畫が書道と接近するに至つた。線の觀照世界が擴大されて、書道に生彩の美を觀賞するに至つた東洋人は、客觀的に擴つて自然と人生の斷片から、方寸の密に隱るゝ內在世界のすさびに視線を投じた。

東洋人に取つて、線美の極まるところは、一點一劃に在る。東洋人は一文字の偏と傍の調和にすら勢の赴く自然美と、更にまた天地人三才を貫くものゝ意義を味つて來た。これが兵法となり、處世術となり、茶となり、花となり、更に極つては、呼吸そのものとなる。呼吸は人物の生成であり天地の運行であり、いと小さき有限の存在が、無限宇宙の妙法に合體せんとする祈願である。こゝ

には微妙なる認識が透徹し、壯絶なる感慨が一切に磅礴する。然しながら、其の微妙なる認識も、磅礴たる力も、遂に透明にして、和かに脈々として限りなく圓融無碍の相に純化しなければならぬ大法の律呂に權化する。これが線美の極致で、皇大神の神勅を宿す大和民族の潜在意識が、純粹表現を求める形式である。

同じ東洋でも、印度、支那、朝鮮の線美と日本の線美には、微妙な相違がある。

ガンダラ美術に於ける線美は、希臘の神秘と、東洋主として波斯、印度の密教とが合致して生れ出たもので、希臘の甕アンフォラや、ヒドリヤや、クレターなどに畫かれた線が、三昧境から再現して來る。

支那に於て線美は更に變化し、雄大、絢爛にして、形式がそれ〴〵の格に入る。

超國家的な禪の公案や、偈に表現された直觀的禪機は、これも超國家的個人主義な道教の幽玄性

と自づから合して、支那の卓越せる線美となつた。ガンダラの線美は、こゝに至つて、もつと生氣を帶びて來たのである。然るに、夏殷周、秦、前後漢、三國、西東晉、古胡十六國、南北、春秋、隋唐、五代、宋、遼、金、夏、元、明、清と混亂覆滅の運命に逢つた支那に於ては、不安と恐慌に對する反動的な感激が、雄大な筆勢となつて表象され、その絢爛たる美は、亡び行く者の最後を飾る裝ひを示した。またその固定美は、無碍の史的展開なき民族的約束の表象である。支那に於ける古來の線美は誠に卓越せるものであるが、吾人はその線美そのものに、支那の偉大なる昔日と、未來に起る衰運とを見る。

次にわが奈良の美術に大なる感化を與へた高麗の最高藝術を觀照しよう。高麗燒の單純高雅にして、和かに緊つた强さは、何といふ尊さであらう。當時の繪畫を吾人は、平安南道、江西遇賢里の壁畫に見出した。この畫は東西を通じての傑作である。然るにその雄大な線は、走つて枯渴しつゝ消え去せる。その筆致は、朝鮮民謠ナソリの哀調に通ふ性質が表象されてゐる。これ朝鮮史最後の約束を偲ばせるもの。

殿堂伽藍佛教に墮落した大乘佛教は、大月氏國を亡ぼし、印度を倒し、唐、宋、元を轉滅して、日本に渡つて來た。殿堂伽藍佛教の大發展は、日本に取つても苛酷な鞭であつた。然るに日本は、その苛酷な鞭によつて、自を訓練し、其の至純な本性を永き試練の後、見事に發揮して、明治維新の大精神となつた。その試練された至純性は、美術上の線美にうねり出て來た。

法隆寺金堂の壁畫を劈頭に、一千幾百年の日本歴史の過程と共に現れた曲線美をしみ〴〵と觀照するがよい。

空海の書畫、惠心僧都の繪、小野道風の書、鳥羽僧正の戯畫、光悅、乾山、宮本武藏の繪、梧竹の書等、その線を味ひ來れば、純然として、日本生得のすさびである。その表現は終始一呼吸の渾然さを思はしめ、透明輕妙にして圓融無碍なるは、格に入つて格を出でたる趣で、一段と高き雰圍氣の世界に參神した者の純粹持續を表示する。

西洋の科學文明には立遲れつゝ、しかも原料には乏しい日本が、短歲月の間に、よくも今日の文明を築き上げた所以のものは、その素質に於て卓越し、その訓練に於て琢磨されたものがあつたか

らである。それが書畫の線美にまで現れた。圓融無碍にして冴え上る線の和光を見すかせば、天壤無窮の神勅を拜する大和民族の至純性が、瑞〻しい不滅の約束を見せてくれる。

西洋人は、日本が、平和な文明を樂しんでゐた時代を見て野蠻國と見做した。然るに滿洲の野に强敵を斃すと、驚異の眼を見張つて、我を文明國と言つた。彼等歐洲人は、わが大和民族が、遠き昔朝鮮を通して渡來した千字文を初めて見た時、文字の曲線美に歴史の秘密と、形妙へにして神全き思を味つて、いかに喜んだかを、一度だつて考へたことはない。彼等に取つては、方寸の密に隱るゝ宇宙的なすさびよりも、二百年に亘る十字軍や、血なまぐさい宗教革命の方が、遙かに偉大な人類の價値を現出したものだとしか考へる能が無いのである。しかもその千字文の曲線美が、彼等歐洲人の以て誇とする、希臘文明のその粹と、東洋神祕の粹とを集めて、滴る天露に混じ、襟を正し、思を虛にして平和の朝畫き出されたものであるのに……

西洋人は日本を模倣國だと評する。エチ・ジー・ウエルズは、此頃でさへ「日本は文化の創造者には非ずして、文化の運搬者なり」といつた。だが、よく考へて見るがよい。希臘文明の覇道を汲む

ととしか知らなかつた歐洲人は、大義の淵源を政治の高座からたゝきおろして、野獸本能を基礎とした。

日本はそれと異る。日本は希臘文明の神泉と東洋文明の淵源に汲んだばかりでない。更に優れた天啓の源泉を自己の裏に體し、國土莊嚴し、道場超絶するの神聖なる秘義を純粹に今日まで持續して來た。只これによつてのみ、遂には全人類が指導されなくてはならぬ。絶對論理は、日本のまことの發展がこれを論明する。

六、寂と澁味

——先づ茶道より——

寂は澁味！

澁味は神道の素朴雄大なる本性を父とし、茶道や俳諧の體驗を母として生れて來た。

「澁味！　何と神秘不可思議な靜謐な深さだらう。目に見ゆる東洋の內部にひそむ魂！　西方のあ

らゆる教養が未だ以て知り得ぬ幾千年の古き經驗を集めた果實。合衆國は匐ひ膝まづいて其の靈を禮拜呼吸し、以てその品性を高め貴くしなくてはならぬ。西方の如何なる天分を以てするも虛謙にして實在を求むる此の寶——日本の澁味に如くものが無い」とは、天才建築家、米人フランク・ロイド・ライトの言うた日本絶讃の言葉である。

茶道は禪及び道教から生れて來た。

禪學徒は、眞如體驗への端的なる直入を旨とし、殿堂伽藍佛教に反し、經文佛像佛教にさへ逆つて現れたのであつた。丹霞和尚は、大寒の日、木佛を摑んで來て爐の中に焚いた。弟子が長入つて「何とまあ、勿體なう御座います」といへば、和尚は平然として答へた。

「わしはなあ、佛像を焚いて、お前達が有り難がつてゐる佛舍利を取るのぢや」

「木像から佛舍利が出て參りましたら大變でございます」

和尚はいつた。「若し出て來なけりや、何で佛像が有り難いもんかよ」

斯の如き禪が、殿堂伽藍佛教と衝突したのは當然である。禪は現世的功利主義の道德を說く儒教

とも相容れなかつた。然るに道教とは呼吸合して、茶道が生れた。

「窈たり瞑たり其の中に道在り」

老子は夢のやうな事をいふ。古來の傳統的道德の孔子とは、とつも無う變つてゐる。然し夢のやうなことをいふ老子の感化は大したものである。錬金術、火藥製造、數學、天文、兵法は彼の感化によつて古の支那に發達した。老子の感化によつて、或る者は、法律家となり、或る者は江上の詩人となつた。或る者は書家となり、或る者は畫家となつた。或る者は風に御して神仙と語り、或る者は、相撲を初めた。茶道はこの不思議な道教が、禪と觸れあつて生み出したのである。

茶道の鼻祖は唐代の道教家陸羽といはれる。その茶經三卷十章は、茶に就いての驚くべき知識と鑑賞を物語つてゐる。虛淡の裡に智慧の泉は驚くべきかな。

宋に入つて、茶は禪と結び、自然了解の一つの方法となつた。禪僧は達磨の像を前に恭しく並び、只一箇の茶碗によつて、順番に茶を味ふことを覺えた。王元之は茶を味つて「直言の如く靈を澄らせ、その爽快な苦味は善言の餘馨を思はす」といひ、蘇東波は「眞に有德の君子の如く汚すこ

と能はず」というた。是等の氣宇は日本人にも味はれて、室町時代に、日本獨有の茶の湯となつた能樂が世阿彌によつて大成され、神道が一條兼良によつて唱道された時と正に時代を同じうする。

初めて茶室が造られたのは、日本で、豐臣秀吉の愛顧の下に、千利休が創作したのである。秀吉はまた、利休に指導さして、辻與次郎に茶室を、陶器屋の長祐に抹茶々碗を造らせた。

「めげ茶碗一つにて事足りぬべし」……豪奢な聚樂第には似もやらず、秀吉が、めげ茶碗一つで、侍ふ者と茶を啜つた心裡には、一掬の間に天下恭敬の思ひと、宇宙的な靜觀の深さが宿つた。秀吉の偉大なる經綸、神聖東洋大帝國の壯圖は斯る瞬間の天啓だつたのである。

愛し尊ばれた利休は、秀吉に死を命ぜられた時「寒熱の地獄に通ふ茶柄杓は、心なければ苦しくもなし」と歌つて自殺した。何といふ超脫の趣であらう。彼にとつて、自殺は茶柄杓を折るやうなものであつた。その樣は、禪的でもあり、老子的でもあり、武士的でもある。何を以て利休の死を形容しようか？　曰く、寂。曰く、澁味。

仁俠の爲めに全財產を投出し、大義の爲めに身を鴻毛の輕きに比す。さればこそ狂瀾怒濤の人生

に事無きさびを粧ふ達得の美となる。

寂、澁味はまた貴賤上下を、汲めども盡きぬ一色の眞實さに包みこむ。

一軒の茅屋に住ひ、雲あれば雲に耕し、月あれば月に釣る。茅屋を出て行く旅に、石あれば石に枕し、流あれば流に嗽ぐ。こゝにも寂と澁味とがある。

七、俳諧と人生

寂を味ふに、茶柄杓も、茶釜も、茶碗もなければ更に輕妙である。その極秘を、芭蕉は、俳諧に現し、人生そのものに味つた。寂は蕉門の正風といはれる。弟子芭蕉を讃して曰く「そも〳〵此の翁貧窮にして其の德行驚かんばかりなり」

雲と隔つ友かや雁の鳴き別れ

一句を友の雨戸に殘して鄕里伊勢を出で江戸で水道工夫までして、難儀苦勞してゐた彼は、やつと深川に庵を結んだ。然るに一夜彼の庵は類燒してしまつた。

深川や芭蕉を富士にあつけ行く

彼に取つて庵は燒けて無くなつたのではなかつた。富士山にあづけ申したのであつた。詩も生活もさびそのものである。超然たるこの芭蕉が、近江商人に偉大な感化を與へたことは、寂と澁味に包まれる超越主義と現實主義の渾然たる眞理を物語るものである。

芭蕉が東北の旅を終へ、加賀から越前へ出て來ると、日頃のわが病に加へ、お伴の弟子も病んだ弟子は養生のため、お別れして一足先に旅立つ。芭蕉嚢中無一文、別れゆく弟子に半錢の餞別も出來ない。只一句餞をおくる。

行き行きて斃れ伏すとも萩の原

何といふ卓越した餞だらう。行路病者が行き斃れゝば、宿るすべもない。しかし萩の原に身を伏すれば、秋風にこぼるゝ花も、そよぐ葉末も病者を勞つて呉れるといふのである。さびが徹して

澁い人生苦に天來の涙がある。

その芭蕉が、無分別の場に句作あることを敎へて、自らも何の分別もなく「見渡せは眺むれば見れば須磨の秋」といつたやうな句をものしながら、左の一句には何遍か改作を試みた。

古池や蛙飛ひ込む水の音

これぞ純然たる澁味の眞髓である。

古池は、東洋の深き靜けさ。また日本の古き歷史的精神。苦しき人生のどん底なる聖地。

蛙は、產も無く家も無く、澁い姿をしてゐる人間の表象。

飛び込むは、一超直入、純粹飛躍の姿。絕壁に手を撒して、絕後に甦る趣。

水の音は、天地人三才を貫き走る大自覺の閃き、また現實世界へ與へる大感化の響。

そこで、古池の句を散文に書き直すと次のやうになる。

蛙のやうな男がゐた。日燒して見すぼらしい其の姿！　誰が見ても蛙のやうな存在としか思はな

んだ。何を考へ何を爲て居るか分からぬ存在。

蛙は地上を這ひ廻つては、時々深い沈默に陷つて、ジット前方を凝視する。閃きが視覺から全身へと閃き渡つた瞬間、哀れな蛙の飛躍ぶり。ヒラリと身をかはして飛びつく。その刹那、誤りなく目的の餌物をパクリと喰へる。閃きは主觀である。餌物は客觀である。斯くて客觀一切が、主觀發動の妥當形式となる。その刹那の莊嚴な神祕を思へ。

丁度其のやうに、蛙に似た存在の男が、深い沈默の行に入つて凝念してゐた。忽焉として天來があつた。天啓の其の瞬間、日本歷史的精神の神域から臨む靈覺の閃光が彼の全存在に應へた。決然生死を堵して彼は苦痛のどん底なる聖地に身を投げた。この神的飛躍の瞬間、彼は天地人三才を貫き唸る大自覺を得た。而して其の力行は、愕然としてどよめく上下一般の間に、絕大なる感動を與へた。

日本の歷史的大人物は、常に斯の如き存在である。惡僧道鏡をその榮華の絕頂から引きずり落した和氣淸麿がさうだつた。多勢に無勢、然れども勤皇の靈感によつて起上つた楠公がさうだつた。德川幕府高壓政策の下に在りながら、純然たる古神道を說いて、皇道を顯揚した國學者達がさうだつた。大國隆正は最も典型的な蛙であつた。

芭蕉は弟子等に「いつ迄も我等世にありと思ひ、ゆめ〳〵他に化せられること勿れ」といましめた。さびに隱るゝ千萬無量の曲折、永遠のまこと、さびの體驗者がもつ微妙纖細な絲すぢと高儀の調、更に三藐三菩提の大丈夫心は、千變萬化して、眞行草の人生を敎ゆること、今も未來も同じといふのである。

見よ！　神籬の神代から傳つた素朴雄大なる日本の至純性が、全東洋の眞を觀照して發したさびの澁味の美！

第四章　上生下

日本と歐米諸國とを比較したならば、學術上、社會生活上、公民道德上、彼等の我に優れたる點決して少くない。敎育上に於ても、實質的に、日本は決して卓越して居るとはいはれない。日本の

文敎は今後、英明なる指導力によつて、改められなくてはならぬ。

日本が西洋に長じてゐるところは、個人的ではなくして、全體的無意識的なところに在る。即ち西洋が下刻上イデオロギーの歷史に終始したのに反し、日本は潛在意識的に上生下イデオロギーを有つてゐる點に在る。

無意識的價値は、意識の世界に煌明されて、意志され、具體化されなくてはならぬ。吾人は二千五百年の日本歷史が、何よりも明らかに、上生下イデオロギーの鍛練史であつたことを認識して、この大生命の新たなる活動を各自の召命なりと、切實に考へなくてはならぬ。然らざれば日本も亦西洋文明と同一の運命を辿らねばならぬ事を知らねばならぬ。

そこで、下刻上とは何か、上生下とは何かの概念を先づ會得しよう。

一、下刻上に就て

大槻文彥著言海には、下刻上を、平安朝以來、支那陰陽道の誘惑によつて起つて來た社會現象と

して解釋してある。然し儒教も、佛教も下刻上の跡屆には興つて大に力がある。太平記や、源平盛衰記を書いた人達や、その愛讀者達は、ひどく下刻上の社會相を憎んでゐた。

言海の下刻上の條には「五行の條を見よ。此語デモクラシーとも解すべし」とある。

そこで又言海の五行の條を見ると、斯う記されてゐる。

「五つの運行るもの。支那の理學に、天地の間に運行して、生々化育し、嘗て止むことなき五種の物。佛說にいふ五大（註。地水火風空）の如し。卽ち木火土金水なり。木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずるとして、これを相生といひ、又木は土に刻ち、土は水に刻ち、水は火に刻ち、火は金に刻ち、金は木に刻つとして、之を相刻といふ。又方角、四季、五色に配當して、木を東春靑に、火を南夏赤に、土を中央四季の土用黃に、金を西白秋に、水を北冬黑に當てなどす……」。この說明は書經洪範篇、拾介抄下、合類節用集から引用されて居る。これと同樣な、地水火風空は印度及び希臘方面の古代理學で用ゐられ、アレキサンダー一世の遠征の如きも、この五大から割り出して行動を決定されたものである。

相刻とは上（國王僧侶及び地位財產に於て優れたる階級）が權利を以て下に臨むから、下も亦權

利を以て上に對抗することである。これを階級鬪爭卽ち下刻上といふ。而して、下刻上の上はかみ卽ち神であるから、人類が神に逆らう意味をも含む。西洋歷史は神に逆らひ、特權階級と被支配階級とが常に反目しなければならぬ宿命史であつた。日本に於ても平安朝以來、階級鬪爭は隨分に行はれたが、然しその根本に於ては、天皇と國民との間に、上生下の精神鍛練史を作つて來た。こゝが日本と西洋の大變に異なるところである。

同胞愛を說き、貧しき者を虐げてならないことを根本的に大切なことゝする基督教は、上生下の內容を有つて居るが、それは個人關係であつて全體的組織的でない。だから基督教が、上生下の美德に徹底せむが爲には、フリー・マッソンの形をとるより外に道はなかつたのである。

然るに羅馬帝國の政治と結びつくに至つて、基督教は變質して、倫理的全體主義の原則たらむとした。その爲には十全の力を盡したが遂に成功せず、それに反する自由主義のプロテスタントが革命を起した。爾來西洋に於ては、神聖の觀念と共に倫理的全體主義は不可能となり、神聖に代るに個人權を以てするに至つた。現代歐洲の苦難は全く、夫れに起因してゐる。歐洲は何かの方法で、再び倫理的全體主義を再現しない限り、決して救はるゝものでない。然しその再現は得て望むべか

らざるものである。歴史はそれを證明した。最近、新トーマス主義による倫理的全體主義の運動が羅馬法王を根元とし、伊太利、獨逸の政黨によつて行はれてゐるが、カトリック教會が、羅馬時代へと復古し、政權を握つて、歐洲を統一しない限り、決して成功するものでない。

二、上生下に就て。

聖トーマスに現はれた神聖な世界王國主義、從つて今日擡頭しつゝある新トーマス主義の運動は倫理的全體主義を標榜してゐる。

その點に於て、トーマス主義は、上生下に類似してゐる。然し前者が人爲的なるに反し、後者は歴史的本質的の起源を有するものである。猶且トーマス主義は、固定せるカトリックの神學と習慣に基づくが、上生下は、何等の固定的思想なく、天地の公道に基づいて、論理的科學的に、いかやうにも開展すべき性質を有つてゐる。而してトーマス派は、カトリックの信仰によつてのみ實現されることであり、上生下は日本の哲學的、歴史的精神の開發と、國民の道德的精神と相俟つて、實現さるべきものである。日本の精神的、經濟的發展は、上生下を世界的に實現するところの過程である。

上生下の上は、神と讀む。

トーマス主義に於ける神は、統治權主體としての神ではあれど、抽象的の神である。抽象的の神はプロテスタントが反抗したやうに、又樣々な哲學者によつて、異つた神學が組織立てられたやうに、時代と人心の如何によつて違つたものになるのは止むを得ない。

然るに、上生下に於ける神は、絶對の神であり、同時に現人神としての天皇であらせらるゝが故に、實際的具體的である。實際的具體的なる神への叛逆は、歸化支那人以外未だ曾て行つたことがない。日本に於ても、下剋上の現象は頗る盛んになつたことはあるが、未だ上生下の至誠と傳統とが失はれたことはない。

日本がいつでも、經濟的に幸福になつた時代は、神道意識と共に、上生下の精神機能が行はれた時だけである。儒教も、佛教も、上生下の政治的機能を有たなかつたが故に、その隆盛は却て、日本を經濟的苦境と、社會的紊亂に陷れた。

上生下とは相生イデオロギーのことであつて、下剋上と根本的に異るのは、權利觀念を基礎とせず、神意を基礎として相生かし合ふことである。天皇の親政は神武天皇以來の歴史が示す如く、決して權利觀念を基とされず、只々天照皇大神の神勅のまに〳〵行はせられた。天皇が權利(利益)を

以て國民に臨ませ給はぬが故に、國民も上御一人に對して、權利を以て對立しないのが日本の國粹である。國粹を破らうとする思想、即ち下剋上が盛んになつても、斷じて上生下の傳統は破れなかつたのである。

羅馬法王に反した西洋の下剋上は、後日國王に對する國民の下剋上となつたが、日本に於ては決してさういふ事はなかつた。

下剋上の結果、渾沌たる狀態に陷つた現代に、統一を與へむとするファッショは、倫理的全體を目標としてゐる。然しファッショは上生下の內容を根柢深く發揮するの性質を有たぬ。

上生下は經濟的なると共に宗教的である。信仰の統一なくして、完全なる上生下國家機構は實現されない。獨逸及び伊太利は、カトリック政黨及び、社會民主黨の不滅な因緣を有するが故に、信仰の統一は永久に實現すべからざるものである。

日本憲法は信仰の自由を許してゐる。さりとてそれは、國民が宗派信仰に固つて思想的、經濟的に對立しても構はぬといふのではない。國民擧つて、上生下の倫理的全體主義實現を目標とする

のが、日本國體の意義であり、日本道德の任務である。

現時の日本にとつて、根本的の大問題は信仰の獨立である。信仰の獨立無くして、道德の獨立は得て望むべからざるものである。佛教渡來この方一千何百年日本が借り物の信仰を有つてゐた間、日本は常に外國老獪の詭謀により、思想惡化、經濟苦難の歷史を造つた。今や日本は一大自覺期に遭遇してゐる。この自覺が單に物質的海外發展に止つたならば大なる誤である。內から盛り上る我自らの信仰を確立し以て、上生下大道德の獨立を實現する自覺たらしめなくてはならぬ。

人類最後の危機が來たならば、上生下の論理的秩序の實現以外、救ひの道はないのである。その時には信仰も亦、人類普遍のみいづを發光する。

日本は往時、印度、支那、波斯、希臘の哲人を磁力的に引き寄せた。「東方に一小國在り、大乘の機のみあり」、「光は東より」は夫等哲人の精神をそゝつた言葉である。大乘佛教を盛り上げた波斯、印度の哲人等は、東を慕うて支那に來り、支那はその國に非ざるを知つて日本に來た。奈良の大佛建立の先導者、波羅門菩薩は、彌勒菩薩の住む國として、日本に憧れ來つたのである。昔日の

偉大なる神秘日本は沈默して、只その殘骸を、山上の神籬にとゞむる。日本は再び雄大なる發動期に入らねばならぬ。日進月歩の機械の響の中から、神の聲は叫び出ない。人間の內部生命からのみ神の聲は叫び出る。

第四篇　皇民意識と日本經濟史

第一章　神代を偲ぶ

吾人の感覺的基底を搖り動かして、伏在せる本來の生命を喚び起す非凡な方法は、詩である。詩亡びて國民性なく、歷史的大精神は無い。

詩は、人類を地上から天上に翔け登らしめ、天上から神々を地上に呼び招く至純な魅力である。

吾人は科學の手が屆かず、科學の眼光が到達しない境に、詩手を伸ばし、詩眼を開いて、讃嘆すべき眞理を掴み、これを觀照して、科學的に瘦せ衰へた人生に、無窮の天を盛り込む。

科學的な歷史が到達することを得ぬ遠き過去の領域には、詩想の翼をかはして初めて敬虔に訪ね入ることが出來る。

神は「詩翼を打ちかはし得る者のみ來れ」と、神代の故郷を、歴史の彼方に秘して吾人を待つ。

詩は靈魂の事實である。靈魂意識は、有限の世界から、無限の世界へとわけ入る。有限の世界に無限を齎らし、現實の鐵鎖を斷じて妙法を現ずるものは、靈魂意識である。

我等は詩的懐郷の念と、靈魂意識の直觀によつて、天孫降臨の光景を偲ぶ。

嚴の千分に千分き、天の八重雲をおしわけつゝ天下り給うた天孫の稜威、その壯觀！　高天原に千木高知り、下つ磐根に宮柱太しく、奇ぶる高千穗峯に、瑞の御殿を打建て給ひし嚴かさを遙かにもをろがみまつる。

仰ぎ見る我等の眼は、靈眼であり、詩眼である。我等は進化論の知識に超越して、我等に國家と法の精神を授け給ひし神の故郷を見る。

古を慕ひて、高千穗峯に登れば、山腹を匐ふ雲は天の八重雲、天下り給ひし神々の跡を慕ひて、故郷に戻り行く心地ぞする。絶頂に至れば、天の沼矛の傳説を傳ふる矛あり、皇孫が齋き奉られた

る神籬、磐境を拜む。顧みすれば、見よ眼界に擴ごる十重二十重の山脈、滑り開けし平野、島々を浮べた南方の海洋！

そのかみの神々の生活が坐ろに回想される。詩的想像か、靈的事實か、そのかみ全世界の中心はわが奇ぶる高千穗の峯であつた。神籬磐境が目のあたり吾人にそのかみの光景を物語る。

神籬は西洋の人類學者が、メンヒルと稱へるもの、磐境は彼等の所謂、サークルストーンで、神籬の前に置かれし百取の石机は、彼等のいふドルメンである。

西洋學者は、是等の巨石建造文化が、遠く一萬三千年前のものであつたといふ。これ新石器時代で、これをまた日石文化時代ともいふ。日石文化は、歐洲、亞細亞、南洋、南米へと海岸地帶を縫うて全世界に擴がつた統一的の不思議な文化である。世人往々にしてこの時代を原始時代と言ふが精神的には遙かに現代を超絶する雄大眞善にして神秘不可思議なものであつた。當時の遺石に、太陽を刻せるのは、全世界悉く、日の大神、天照皇大神を奉じてゐた證據であると言つても、誰がこの靈覺的新説を破壞し得よう。その當時全世界の王者たちは、聖者達を伴ひ、日嗣の神に大なる靈訓を仰がんと、日向の高千穗峯さして、今の日向小林の港に船をよせた。その折霧島山とは、海上に點々たる火山の島々であつて、港灣の有樣が全く今と違つてゐた。

彼等神々は、偉大なる直覺力の持主で、やがて來るべき天變地異を豫覺した。この天變地異を超え、不死の信仰を以て建てられたものは、埃及のピラミッドであり、スフヰンクスである。太平洋の眞中に在つた大陸ムー國は、この天變地異によつて海底に沈んでしまつた。廣大なる盆地であつた地帶が今日の地中海となつた。その明かなる證據には、數十年前ブラバキーの證明があり、最近英國の人類學者チャーチ・ウッドの大著、及び其の他の人類學者による證明がある。この天變地妖を、日本書紀の記者は記して斯ういうた。

「是時、運鴻荒に屬ひ、時草昧に鐘れり。故蒙くして以て正を養ひ、此の西の偏を治す。皇祖皇考の神の聖にして、慶を積み、踵を重ねて多に年所を經たり」と。

この鴻荒によつて全世界の國々が日本に來貢することは止まり、交通絶えはてゝ、各地に殘る文化が、古代埃及、バビロニヤ、波斯、希臘の文明となつたのである。この時まで變態的にも是等の古國は、天孫の傳へなる、祭政一致の教法を守つてゐた。吾人はこれをハムラビの法典や、マヌの法典に照らして、上生下の精神を傳へんとしてゐたその證據を知る。

この天變地妖に先立つて、三四萬年前は、舊石器時代である。舊石器時代が、日石文化よりも遙かに卓越せる文化を有してゐたことは、其の時代の遺物なる繪畫によつて知ることが出來る。線の

美も色彩の美も、不朽の傑作として傳へられてゐる。吾人はその遠き古、連綿として神籬磐境文明が燦爛たる華を咲かした黄金時代を想見するに難くない。彼等祖先は、近代人類が持たない、內部世界への滲透力を有して、偉大な能力を發揮してゐたればこそ、天の浮橋の觀念を殘してゐる。天の浮橋とは、三次元世界の自然界より、四次元、五次元、六次元の靈界に出入する境界である。彼等祖先は、四次元を幽界とし、五次元を靈界とし、六次元を神界として驚嘆的なエソテリックの大叡智を有つて居たのである。

我等の祖先は、その神靈的經驗を三つに區別した。卽ち生むすび、足むすび、玉留むすびがこれである。心靈機能を失つた近代人には何のことか分るまい。驚く勿れ、彼等祖先が、高次元の世界に飛翔するや、天の鳥船に打乘るといひ、忽ち姿を搔き消しては、尸解狀態に移つたと云ふ。尸解とは、物質的形骸を自然界に殘さずして、靈界に消失することである。

彼等祖先は、現實的なる意識狀態を、荒みたまと呼び、次元の高まるにつれ、和みたま、幸みたま、奇みたまと呼ぶ。現實生活の社會的規矩にまさる美妙の上生下法則を觀じたが故にこれをむすびと言つた。むすびとは、人類結合の法則である。

彼等は向上するにつれて、敬虔の念を高めた。彼等は、敬虔そのものによつて、叡智と意力との機能を一層高め得られたのである。

遠き神代の事實は漂渺として神秘不可思議な境に隱れる。吾人が、遠き過去に於ける祖先の靈智(エンテリック)生活(クライフ)を偲び、そこから古神道の偉大なる秘義を探り來ることは、自らの叡智を偉大ならしめ、未來經綸の雄志を抱き、世界を眞理に還元せしめる能力(ちから)を發揮することとなる。

吾人の偉大なる發展は、對象の必然的內在を把握することによつて起り來る。吾人の理性と意志とは心靈と自然と相照すことによつて、本來の偉大性を發揮するのである。

神ながらは、神代の故鄕から、今日に傳はつた。吾人は神代日本を、心靈能力と科學に訴へて探明しよう。且つ詩的情緒に訴へて、神ながらの絕叫を偉大ならしめなくてはならぬ。

第二章　神武天皇の創業

世は荒れすさみ、時代は暗黑であつた。(日本書記)

神籬(ひもろぎ)文化は世界に亡び去つて、支那は春秋の世の中であつた。當時世界の中心ともいふべき文明國はアッシリヤであつた。アッシリヤ王エサルハットンの勢力は其の絕頂に達して、バビロニヤ、フェニキヤ、サイプラス、ユダヤ、アラビヤ、埃及を征服し、ニネヴェ城が再建され、世界的の大圖書館が建てられ、文藝の發達また驚くべきものが有つた。其の他の國々は衰れ凋落の陰影につゝまれてゐたのである。

その時分から日本に移住して來た開拓者が大ぶん有つたらう。古代の移住は今日のやうに旅券も旅費もいらなかつた。人類はその頃近代人よりも移住に惠まれてゐた。

日石文化(ヘリオリシックカルチュア)、所謂海岸文化の續きものが變化して、祭壇や、契約(けいやく)の箱(はこ)(みこし)や、黃金の神像が神籬(メンヒル)と入れ代り、神代日本の感化が變形してアッシリヤが燦然たる文化を生み出して

ゐた時、天運は循環して地上に多くの異象が相前後して現れた。イスラエルは國が亡んだ後も、偉大な人物ダニエルや、その他不思議な力の持主が居た。亡國の豫言者ヨエルは聲を新たに、信仰によつて再び俘囚のイスラエル人が祖國を再建して、惠を受くべきことを豫言し「その日來らん前に日は暗く月は血に變らん」と叫んで居たが果してさうだつた。バビロニヤは果然としてアッシリヤに征服された。波斯は再びたゝき伏せられた。その頃のことである。天運は漸くめぐり來つて、希臘にはソクラテスが現れた。印度には釋尊が現れた。支那には老子、孔子が生れた。

夫等の人物が史上に燦たる光を投げた時分のことである。「東方に一小國あり、大乘の機のみあり」といはれた日本に、神武天皇が出現ましました。永き荒廢期の中にも、光を重ね德を積み給ひし神武天皇の雄大なる創業は、けだしバビロニヤにもイスラエルにも、印度にも、支那にも、類例なき、神靈たちの統一を皇大神の御靈のまゝに行はせられた事であつた。

當時九州の北部には、卑彌呼(日靈子)なる者がゐて人民を治めてゐた。卑彌呼の社會生活光景は魏の記錄に記されてゐるが、神武天皇當時とその狀態はほゞ同じであつたらう。彼等の團體生活は卑彌呼に現はるゝ氏神を中心として行はれてゐた。卑彌呼に神威が高まれば高まるほど、氏の民衆は力を得て幸福を感謝してゐた。夫等の氏團體が何百と全國に有つたか知れないが、夫々神靈中心

の生活を營み、支那の記錄が傳へるやうに、彼等は忠孝の美[illegible]を有つた團體で、清淨を愛し、菜食をなし、平和な生活を營んでゐた。

"Wealth was the gift of God, and men were but stewards." 「富は神の惠みにして、人類は只その家令に過ぎず」と、ターチュリアンやアレキサンドリアのクレメントや、クリソストムや、オーガスチンなど四五世紀の西洋聖者たちは、上生下の世界統一を夢みてゐた時、早くもわが國では皇化に浴せぬ氏族たちが、さういふ生活を營んでゐた。斯うした氏族の間に、神武天皇が統一の行幸を進め給ふと、氏の神は直ちに平伏して禮拜服從し、難なく九州北部を統一し給うて東へと赴き給うた。斯くて人民がことむけすることは、その氏の神が天照皇大神の神威に從ひ奉つたことであつた。

然るに當時已に外來の下剋上精神もあつて、夫等は、神意に從はず、鬼神を奉じて權利を氏の民どもに揮つてゐた。從つて氏の間には、皇軍に向つて反抗を挑みかけた者がある。那賀須泥毘古はその一例であつた。それは那賀須泥毘古の氏族が武器を取つて刄むかうたばかりでない。彼等の氏神なる鬼神は超人間的の力で、人間を使役してゐたのである。

天皇熊野に於て昏睡したまひ、皇軍も悉く氣絶して倒れ伏した。それは熊野の鬼神が極めて有力であつたことを示す。然し靈覺者、高倉下が天照皇大神の神靈に感じ、燃えさかる靈の焰を體驗して、天皇の御前に伺ふとその靈威によつて、天皇は眼ざめ給ひ皇軍も奇蹟的に起ち上つた。

天皇と天つ大神が神皇一體にてましまし、神と人とのけぢめが明瞭でなかつたやうに、善かれ惡しかれ、卑彌呼も、那賀須泥毘古も、熊野の氏の上も、神靈若くは鬼神と、はつきりした區別がなかつたので、今日の科學では不可解な出來事が多くあつたのである。

神武天皇の御東征の根本的目的は、氏たちの奉ずる神靈や鬼神を歸順させ給ふことで、今日の言葉で言へば宗教統一を意味してゐた。

天下の神々、鬼神たちが天壤無窮の神勅を奉じ給ふ神皇に歸順してしまうと、天皇は橿原に都を定め給うた。神殿と皇居とは同一で、宮中に齋藏を建て給ふた。これを共殿同床といふ。神皇一體であらせ給ふたからである。「妖氣一掃、些の風塵もなく、天位の尊さを覩ぜしめ給うた」と古語拾遺の菩者齋部氏は、その折の有様を述べてゐる。

都を奠め給ひし天皇は、神勅のまに〳〵、神籬磐境を建て、高皇產靈、神皇產靈、生むすび、足むすび、玉留むすび、事代主、大宮女、大食津の八神を祀らせ給ふた。八神は皇室及び全世界御主

護の神であらせられ、天皇が高御座につかせ給ふた事は、全地上を上生下の神意のまに〳〵まつろはせ給ふことだつたのである。

神武天皇が、皇室の物質的利權擴張の思召にて御東征なされたので無いことは、古語拾遺に記された當時の御様子で明らかである。即ち御東征の結果、皇室の御歳入を擴大されたのではない。且また租稅を御徵收にもならなかつた。

天孫降臨の時から五部神たち、即ち五の部の祖神がお伴をして居たが、神武天皇の折に大ぶん其の人數が殖えて、來目部の人々は日臣命に指導され、內の物部の人々は、饒速日命に指導され齋部の人々は天の富命に率ゐられて、それ〳〵の職業を持つてゐた。朝廷への調物は只一ヶ所、出雲から奉られてゐた。これは神代からの定めで、櫛明玉命がお定めになつたことである。その他皇室の御費用は、皇室御躬ら耕作なさつてゐた。たとへば、かぢと麻は、天日鷲命の子孫が阿波國で耕作して居つた如きで、其所は今の麻植郡で狹い土地である。また同じ物を天富命が齋部の人々を率ゐて上總下總で耕作してゐた。次に、矛と竿は手置帆負命が讃岐で造つてゐた。

古代に於て私有の土地を有つてゐたのは、部曲(民部)ばかりであつた。部曲は大臣、大連の如き中央に用ゐられた諸氏や、國造、縣主の如きもので、その輩下から租調を收めさしてゐた。蘇我氏

や平群氏の如きは、部曲に屬するもので、私有財産の爲めに惡を爲し、後世大化改新前亡ぼされた

第三章　崇神天皇

神武天皇の御代より開化天皇の御代に至るまで、國史の殆ど記すところがないのは、その時代がいかに幸福平和であつたかを示すものである。歴史的記述の多い時代は決して幸福安泰の時代ではない。當時、支那は秦亡びて漢の時代になつてゐた。これに先立ち、秦の始皇帝は、不老長生の藥を日本に求め、日本も亦五帝三王の遺書を彼に求めたところが、始皇は悉くこれに應じたといふ

當時の支那は屢々匈奴に苦しめられながら、内には鬪爭、殺戮が盛んに行はれてゐた。支那の史的事件は多く記されてゐる。然るにわが國に於てそれがないのは、何よりも平和幸福なりし事を物語るものである。のみならず日本に史記がものされたのは、下剋上の支那人が多く渡來してからの事である。彼等は利權主義者で、日本古來の上生下主義の徹底を喜ばなかつた。如何に彼等が利權に憧れて成功したかは、應神天皇以後の史實に徴して明かである。古事記、日本書紀の著者は、歸

化支那人の助力を求め、また自らも支那思想の感化を受けてゐたのである。從つて古事記の解釋も下生上の精神には氣づかれないやうな記述の方法を取らなくてはならなかつた。神代史が史實として捕捉し難き、昔噺の形式になつたのは、その爲めでもあらう。特に日本書記に、古來日本に全然なき支那風の習慣が書き入れられたのは、其の著者が支那の影響を被ることの少からざりしを示すものである。

日本に漸く事繁くなつたのは、崇神天皇の御代からである。

いつとはなしに下生上精神が、全國に頭をもたげ、人民と財産とを私してゐる者が多く有つた事は、命たちをして四道將軍たらしめ給ひし事で明かである。皇化に浴せぬものは、和平らぎ、屈强に反抗した丹波の御笠は殺された。垂仁天皇の御代に歸化した新羅王子の海檜槍が、但馬に葬られたところを見ると、丹波但馬地方には、歸化朝鮮人の王族が、土地財産を私有して、すめろぎの則に反抗したと見える。

神武天皇は、神靈的に天下を統治し給うたが、崇神天皇は、進んで政治的に天下を統治し給うた「天下太平、人民富み榮えき」と古事記にある如く、天皇親政の日本は平和と富とを謳歌し、擴

大された天下統治の爲め、弓端の調、手末の調が獻ぜられるやうになつた。

天皇の親政によつて、天照皇太神の大御心のまゝに、日嗣と穗嗣が合體して、天下に行はれるやうになつた。

穗嗣の意義は、天つ神籬磐境と共に、天孫降臨の際、皇大神によつて宣らせ給うた。神籬磐境は天照皇大神の神靈を天壤と共に窮りなく傳へさせ給ふことであり、穗嗣とは齋庭の穗を永久に傳へて民の生活を安かならしめ給ふことである。齋庭とは「天下の土地凡て神聖にして神のものである神器は犯すべからず、私すべからず」との意で、穗とは稻の穗に限らず一切の生産をいふ。

すめろぎの道は、日嗣の道であり、穗嗣の道である。この二者合致してまことの政治がある。日嗣は形而上學的原則を意味し、穗嗣は現實生活の原則を示す。前者は天に於て一なるもの〻顯現、後者は地に於て一なるもの〻實在である。天に於て一なるものなくして天は暗く、地に於て一なるものなくして地は動くといはれた如く、この兩者の合體せるすめろぎの道なくして、天は暗く地は動亂する。この合體莊嚴によつてのみ、靈肉合致、物心一本、顯幽一如の神ながらが在る。羅馬帝國に於ては、必死の努力を注ぎながら、日嗣と穗嗣の眞なる道が實現出來なかつた。近代歐洲文明諸國は、日嗣の觀念を有たず、齋庭の精神に叛逆し、穗嗣の嗣の觀念をも有たず、只穗即ち實利だ

けを求める唯物的個人主義となつた。現代文明の苦難はその結果である。

崇神天皇は實に人類史上に、絶對の眞理、不滅の眞を實證遊ばされた。これ靈肉合致し、顯幽合體してのみ有り得る上生下の組織を氏族の各小團體から、全國的に秩序づけ給うたことである。山城の一人の乙女は、これを喜び祝して「こはや、御眞木」と歌ひつゝ、叛逆者のあることを諷刺した。御眞木のみは靈であり日嗣である。木は現實であり穗嗣である。靈肉合致のすめろぎの道が實現されたことを御眞木といふ。

天皇はこの諷刺の意義を直覺したまひ、太毘古命をして、下刻上精神の建波邇安王を山城に討たしめ給ふた。果して彼は軍を起して皇軍に逆らつた。皇軍はこれを討つて平け終へた。一體山城は下刻上主義の歸化人が住むところであつた。

天皇が共殿同床を止め給ひ、神鏡、寶劍をやまとの笠縫の邑に遷させ給うた事は、神威をかしこみ給ふ結果であつたと古語拾遺に記されてゐる。それには樣々な意味があつた。第一、天下の統治事繁く、從來の如く、天皇が毎日神鏡の前に侍して、禊祓、鎭魂をなされて、神と語り神と共に在

らせられる事が出來なくなつたことである。だから天皇は皇女豐鍬入姫をして、神鏡寶劍を齋きまつらしめ給うた。第二には、神器は、地上に於て伊勢の五十鈴川上に齋きまつらるべき幽契が、天孫降臨の時に定められてゐた。天孫降臨の折、衢に立つてゐた猿田彦大神は、神意を感得して已に早くから五十鈴川上に準備をして居られたのである。第三に、斯くなるは、天皇も國民も共に、皇大神を慕ひ奉つて、御德に化せられんが爲めであつた。だから次の垂仁天皇の御代、皇大神の啓示があつて、神宮は伊勢に遷された。

さて、下刻上の精神が甚だしくなると、日本には疾病や天災が起る。崇神天皇の御代もさうであつた。其の折の疫病は猛烈を極めて人民は死に盡さんばかりであつた。天皇は愁嘆ひ給ひて、一夜神床にましした時、大物主の大神が現はれ給うて「おほたゝぬこをして、われを祭らしめば、神氣起らず、國平らぎなむ」と仰せられた。

「おほたゝぬこ」とは隱れたる一大人物で、卓越せる神通力の持主であつた。天皇はこの人物を探し求め給うて「おほたゝぬこ」の奏上のまに〳〵天神地祇の社を定めたまひ、また山々の上には、大三輪の大神をいつき奉られた。神々の息吹が、國家の現實的活動の源であることはこれで明かである。天神地祇呼びこたへて、日本の政治はまつらふ。崇神天皇の御代は實に信仰復古の時代であつた。

神武天皇の創業によつて、全國的となつた上生下の御精神は、こゝに於て明瞭なる祭政一致として全國的に徹底した。

この大精神は更に全世界に發展しなければならぬ神意だから、日本はこれから全世界をむすび、これを修めつくり固めなさなくてはならないのである。その因緣のために儒教佛教が先づ日本に流れ込む。

第四章　上生下の豐けき上古

上生下、祭政一致の天下は、應仁天皇、仁德天皇を經て、繼體天皇の御代には、燦爛として殷富の盛時に達した。繼體天皇の詔は當時の樣を物語る。天皇の七年、勾大江皇子に賜はつた詔に次の

御言葉がある。

「天下安ク　靜カニ
海內清ク　平カニ
吾風ヲ萬國ニ光ラス
日本ヤハラギテ　名天下ニ擅ナリ
秋津カゞヤキテ　譽アメガシタニ重シ
聖化ココニ憑リテ遠ク扇ゲバ玄ナル功トナル……」

また同二年の詔の中にこの御言葉がある。

「仁風ハ宇宙ニ暢ビ
美聲ハ乾坤ニミナギル
內外清ミ通リ　國家殷富ナリ
朕甚ダ欣ブ　大ニ醻スルコト五日天下ノ歡ヲ爲セ」

また元年の詔に

「食フ者ハ天下ノ本ナリ、黃金萬貫アリトモ飢ヲ癒スベカラズ　白玉千箱アリトモ何ゾ能ク冷ヲ救

ハン　夫レ筑紫國ハ　遐邇ノ所　朝屆クル所ノ去來ノ關門トスル所　是ヲ以テ海表ノ國ハ海水ヲ候ヒテ以テ來賓リ　天雲ヲ望ミテ貢を奉リ　胎中之帝ヨリ朕ガ身ニ泊ブマデ穀稼を收藏ヘテ儲粮ヲ蓄積タリ　遙に凶年ニ設ヘテ厚ク良客ヲ饗フ　國ヲ安ズルノ方　更ニ此ニ過グルハナシ……」

以て如何にわが國が豐かに幸福であつたかを知る。五日の宴をして喜べとの詔は古今當代を以て只一回である。＊註（應神天皇）

第五章　歸化人の發展時代

上生下の美風によつて天下平らぎ、富豐であつた日本に、喜んで外國人が歸化したのは當然である。當時、春秋時代の戰亂に苦しんだ支那人が多數朝鮮に移住してゐた。戰國の時代過ぎ、秦、漢三國、西晉東晉、五胡十六國、南北朝の變轉の浪にもまれ、陸續として支那人は朝鮮人と共に來朝歸化した。應神天皇の御代に、百濟王が博士王仁を朝貢せしめた。秦公の祖弓月なる者が、百二十

縣から群衆を率ゐて歸化した。漢の直の祖、阿知使主が十七縣の人民を率ゐて移住して來た。秦漢及び百濟から來た歸化人は、その數實に萬を以て數ふるに至つた。夫等の歸化人は、それ〳〵氏神を奉齋することによつて、歸化の證據とされた。神靈的に合致すれば、大和民族と共に同樣に統治さるゝことが可能であるとの寛大な思召に浴したのである。「然し夫等の歸化人は朝廷の公祭には與つてゐなかつた」と、古典に記されてゐるから、上生下祭政一致の遵奉者ではなかつたのである。卽ち權利(利益)を目的とするのは、彼等の特質であつた。彼等は夫々、知識技能の持主で、巧みに朝廷の恩寵を蒙ることに成功し、その目的とする利益と地位をかち得た。

三韓征伐以後は、殊更に國家が富强となり、三韓からの貢獻も莫大なものであつたから、履中天皇の御代に、神物のために齋藏の外に、官物を收め給ふ內藏を建て給ひ、雄略天皇の時代には更に大藏を設け給うて、玆に三藏の財政局が備つた。斯くて內藏は皇室の財政を司り、大藏は國家の財物を司る事となつた。當時大藏がいかに重要の官職であつたかは、星川皇子の御母君が「天下の位に登らむには先づ大藏の官を取れ」と仰せられたことを以ても察しられる。是等三藏の中齋藏は齋部氏が司つてゐたけれども、その外は皆歸化外國人の司るところとなつた。卽ち內藏は阿知使主と

王仁が司り、大藏は秦氏が司ることになつた。三藏の檢校を司つた者は蘇我氏であつたから、自然蘇我氏は歸化人と結托して自家の權勢を張るやうになつた。歸化人と共に來朝した儒書は、天照皇大神の信仰と矛盾する思想を有つ。儒學思想には祭政一致、上生下の精神がない。上生下祭政一致は單なる道德とは其の意味が違ふ。

當時內藏と大藏とが別々にされたことは、神武天皇以來の御精神が必要に應じて具體化したことであつて、天皇が天下の富を私し給はぬことを示さるゝ證據である。この事は世界財政史上の奇蹟であるとさへ專門の經濟史家がいつてゐるところである。

儒敎についで佛敎が渡來し、兩者相俟つて、日本の思想信仰及び經濟上に多大の變化が起り、上生下の美風が段々とすたれて行つた。儒敎には民主々義の內容がある。佛敎には祖神がなく、その信仰は祭政一致の上下全體主義と異り個人的信仰であるから、從つて彼等は、個人主義の發展を促がすに至つた。儒佛兩敎はむすびの觀念を驅逐して、綜合統一の美風を個人的思想と入れ代へ、同時に氏族的國體生活の美風をも打破するに至つた。あまつさへ、歸化人の最高欲求は、思想宣傳よりも寧ろ日本に於て富と地位を得ることであつた。思想信仰は自づから其の目的到達のための宣傳に利用されたのである。斯くてかち得た富と他位とは、何を招來したらう。これ歸化人の性的慾望

を滿さんとする惡風となつて現るゝに至つた。當時上流社會が、一婦人を中心に鬪爭慘鼻の狀を呈するに至つたのは、歸化支那人の惡感化に由るものである。

それに加へ、佛敎の發達は我國の財政に大なる影響を及ぼし、寺院、貴族、富豪が次第々々に土地を兼有し、私有財産が增加し、他方豪族の中には、擅に調貢を徵發して、その財力朝廷に劣らざる勢を呈する者があつた。これ、日本に取つては大なる危險であつた。

儒佛兩敎は決して我が國の經濟生活を健全ならしめなかつた。佛敎の興隆は我が國の財政を一年々々と窮乏に陷らせ、歸化支那人の大勢力に擁せられし蘇我家の榮華と共に、下剋上の權利觀念は絕頂に達して正に累卵の危き極みとなるに至つた。

第六章　大化改新に至る

儒佛兩敎の渡來と共に、支那陰陽道が輸入されて、日本古來の精神を抑壓したことは多大なるものであつた。特に敎すべからざるは、陰陽道が陵墓を穢土と觀ぜしめたゝめ、年を追うて陵墓が荒

れ廢れさせ給うたことである。陵墓の荒廢は、祭祀の荒廢となつて、益々萬事支那化し、祖神の大御心を忘れて祭政一致、上生下の精神が段々と忘られて行つた。從つて下剋上の精神が非常な勢で發展して行つた。下剋上の精神は、蘇我家の威勢と歸化支那人の富の爲には都合がよかつたが、朝廷の御歲入は減じ、一般人民の生活は段々苦しくなつて來た。推古朝以後、佛敎は欝然として盛大となり「上は群公鄕士より下は諸國の黎民に至るまで、寺院を建つることなくんば人間の數に入らず」といはれ、資産を傾盡して浮圖を興造し、競つて田畑を捨てゝ佛地となし、多くの良民を買うて寺の奴隷となすやうになつた。下つて天平時代になると、いよ〳〵形式的佛事が尊重され、遂に田園を傾けて多くの大寺を建て、其の堂宇の宏壯なる佛像の大なる、技巧の妙に奇なる、鬼神の製作したる如き觀あつて人力の爲すところとも思へず。又七道諸國をして國分二寺を建て、造作の費用は各其の國の正稅を用ゐた。是に於て「天下の費十分而五なり」といはれた程で、出家するものの數亦陸續として增加するに至つた。

佛敎擁立の蘇我氏が、神道派の物部氏を亡ぼして以來、蘇我氏の下剋上精神は其の極に達した。蘇我馬子は自家權勢の爲、東漢直駒をして崇峻天皇を弑し奉らせた。ついで東漢直駒の一族は、

皇極天皇の朝に山背大兄皇子を滅ぼし、天智天皇が蘇我入鹿を誅し給うた折、蘇我蝦夷を助けて皇軍に叛旗を翻し、また自ら大化元年には叛逆を企てた。

佛教の漸盛と共に神籬は顧みられなくなり、從つて神勅の大精神は、佛典伽藍佛像と入れ代り、陵墓は穢土と呼ばれ、日本史實は縮少され、日本神代の古文書は抹殺された。蘇我蝦夷は多大なる日本經典や史書を藏してゐたが自邸に火をつけて自殺した時、惜しくも燒けてしまつた。その折、船史惠尺が燃ゆる火焔の中に飛込んで取出して來たといふ史書ですら、其の後何所に逸散したか分らない。

佛教儒教の渡來が、下刻上の精神を刺激して、日本古來の功績と遺物とを抹殺したことは誠に言語道斷といふ程殘間しい。彼等外國模倣の下刻上精神家等は、日本の文字をすら全く無いものとしてしまつた。一體どんな國民でも、凡そ精神的に發達せるものならば、それ自らの言語と共に文字を有つて居るものである。然るに我が國で片假名の製作されたのは吉備眞備の手になると傳へられてゐる。然らば靈龜天平以前には、文字は無かつたかといふことになる。そしたら奈良朝以前の和歌や歴史はどうして傳つたのであらうか？　漢音によつて萬葉假名として傳へられたといふが、

應神天皇以前には、さういふ術は無かつたのである。語部が語り傳へたのだといふ說があるが、語部と雖も全然諳誦してゐたのではない。神代文字によつて記されたものを誦んじてゐたのである。神代文字は、大凡二十種內外今日まで傳へられてゐる。古語拾遺に神代文字がなかつたといふ事を記されてゐる只其の一つを楯に、これを否定するのは早計である。神代文字は今日の家傳、古文書に傳へられてゐるばかりでなく、神籬磐境の地域に多く埋沒してゐる岩石に記され、大和に傳へた神代文字は、吉備眞備が製作したといふ片假名と同じものである。片假名とは、奈良朝以後に呼ばれた言葉で、それ以前に於ては大和文字といはれてゐた。禊流の敎には大和文字をまた出雲文字というて、天照皇大神から一は皇孫瓊々杵尊に傳はり、一は須佐男命に傳はり、神武天皇大和に都し給ひし折、兩系統の文字を合して大和文字と呼ばれるやうになつたといふ傳へがある。船史惠尺が兵火の中から取出した史書(天皇紀國記)は、大和文字で認められたものに違ひない。

佛教が隆盛に赴いて權利觀念が跋扈したとはいへ、依然日本精神は潛在意識的に活動して、其の出口を求めた。たとへば佛教、儒教、老莊の學より、景教卽ち基督教の學まで究められてゐた聖德太子は、十七條憲法には少しも神道精神を表はされなかつたが、然し推古天皇十五年の春左の如く

詔し給うた事がある。

「朕聞く、曩に我が皇祖の天皇等の世を宰し給へる、天に踏し地に蹐して、敦く神祇を禮し、固く山川を祠り、幽に乾坤に通ず。是を以て、陰陽開け和して、造花共に調ふ。今、朕が世に當りて神祇を祭祀すること、豈に怠りあらんや。故に群臣、爲に心を竭して、宜しく神祇を拜むべし」と。

（太子の御執筆と承はる）

而して太子も大臣百僚を率ゐて神祇を祭り給うた。

また蘇我稲目でさへ、潛在意識的には神祇の畏るべきことを知つてゐた。嘗て百濟王聖明が新羅人に殺されたのを、その子餘自が憤つて、稲目に詰問すると、稲目は左の如く答へた。「昔、天皇大泊瀬の世に、汝の國高麗の爲めに逼られ、危きこと累卵の如し、是に於て、天皇神祇伯に命し給ひて、敬て策を神祇に受け、使者は卽ち神語に託して報じて曰く、邦を建つる神に屈み請ひ行けば將に亡びんとする主を救はん。必ず方に國家鎭まりて、人物また安からん。是に由て、神を請ひ往き、社稷安寧の原とせよ。その國を建つる神は、天地の代に草木言語りせし時に、天より降りまして、國家を造り立てし神なり。頃に聞くに汝の國すてゝ祀らず。方に今前の過を悔いて、神宮を修め理りて神靈を祭り奉らば、國昌に盛へん。汝まさに忘るゝこと勿れ」と。

壓伏された上生下の神道精神は、中臣鎌足に煥然として現出した。鎌足は代々神道の祭祀を司つてゐた中臣家の英才で蘇我氏の横暴をひそかに憤り、その一門を討伐せんとする志を抱いてゐた。彼は太政官の上なる神祇伯を拜命したが、蘇我氏横暴のため、空名無實であつた官職を固辭し、秘かに蘇我討伐の策を案じた。會々中大兄皇子の英明に渡らせらるゝを唯一の頼となし、共に南淵請安の門に儒學を學ぶことゝなり、此の機を捉へて皇子と刎頸の交を結び、共に蘇我討伐の大義を謀つた。歸化人の子孫として請安は、例外の大人物で、十五ヶ年隋に學び、大法の原理は支那に非ずして、日本に在ることを究めてゐた達人である。

皇極天皇四年、三韓入朝の日、謀は實現さるゝことゝなり、石川麻呂が三韓の表文を朗讀してゐる際、皇子決然として入鹿を斬り給うた。入鹿殺され、其の遺骸が蝦夷に送られると、年六十歳の蝦夷今は詮方なく、邸に火を放つて死んだ。

蘇我氏亡ぼされて、大化元年から六十餘年の間を大化改新時代といふ。大化元年には、全國の土地人民の私有が禁ぜられ、御名代、御子代部、品部、御料地たる屯倉の制度を御禁止になり、且つ

諸氏の私有してゐた部曲及びその土地、卽ち田莊を廢止し給うて、上生下の精神を明かにし給うたが斯くて班田收授の法により、國民に一定の田地を給し、氏の上に屬する官職の世襲も同時に廢止となり、氏の末葉に屬する者でも、才能あれば登庸せられて、國務に參與することが出來るやうになつた。大化改新以後、近江令、大寶令が發せられて、官制は一層整ひ、太政官の上には神祇官が置かれた。

第七章　奈良朝の信仰と經濟

大化改新は行はれたが、聖德太子の三寶興隆以來、佛敎は益々盛んになつて、奈良朝の佛敎を華咲かしむるに至つた。奈良朝に先立ち、齋明天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇はそれ〴〵神祇を敬し給ひつゝ、また佛敎の興隆にも力を注がせ給うた。

齋明天皇は、盂蘭盆會を始め給ひ、智通、智達等の僧を玄奘三藏に學ばしむべく、唐に遊學を命じ給うた。佛敎興隆と共に、下刻上の精神が盛んになつた事は、天智天皇の御代、沙門道行が草薙

劍を盜んで新羅に逃げた事で明かである。然し道行は猛烈な風雨におし流されてその目的を達しなかつた。天武天皇は朝臣に弑害され給はんとした。如何に下刻上の精神が朝廷にまで入り込んでゐたかを知る。天皇は、事代主神、生雷神の神託を受け給ひ、また天下に祓禊を仰付けられて天神地祇を祭らしめ給うた事もある。草薙劍を熱田神宮に祀らせ給うたのも同天皇であらせられる。しかしまた天皇は佛敎にも御熱心で、使を天下に遣はして一切經を求めしめ、僧を四方に遣はして金光明經、仁王經を講ぜしめ給ふた。飛鳥寺に於て一切經を讀ましめ、躬ら寺の南門にて三寶を拜せられた。宮中にても經典を說かしめ給ひ、老病の僧を厚く遇すべき詔も下つた。僧尼各自にも恤ませ給ひ、藥師寺を建立して一百の僧を置かせ給ふた。全國の家々に佛舍を作り、佛像及び經を備へて禮拜供養すべしとの詔も下し給うた。僧尼を宮中に安居させ、百の菩薩を宮中に据えて、觀音經二百卷を讀ましめ給うた。各寺及び僧侶に屢々施をなし給ひ、筑紫太宰が獻じた三韓の僧尼六十二人を宮中に入れ給うた。持統天皇も百官を神祇官に集めて天神地祇を宣し給ひ、また公卿に詔して天武天皇の御代に於ける如く「朕が世にもこれを行はむ」と仰せられ、佛法の弘布のために多くの施をなされた。文武天皇卽位の詔は、敬神に一貫し、外國の文物を用ゐるとも、日本敬神の道を最も尊しとされた。しかしまた佛敎もおろそかになされなかつた。

佛教と共に漢思想も亦深く浸潤して、大化改新以來祭祀に支那風が加はつて來た。「呂氏春秋」、「唐禮樂誌」、「禮記」などに見ゆる祭祀の形式が、日本古來の形式と混同するに至つた。日本古傳の天安河と、支那の天の川とが混同し、萬葉集卷十に見ゆるが如き七夕の觀念が起つて來たのも此の頃で、その他に就いても如何に日本が支那化したかを知る。甚だしきは大祓に漢晉の祝詞をあげるに至つた(延喜式に見ゆ)。これは古來、齋藏を司つてゐた齋部氏を羨んで歸化人の子孫が干涉した結果だといはれる。支那思想の中には、陰陽道があつて、其の博士一人と技術官七人が大寶令で宮中に置かれることになつてゐたから、事々に其の影響も甚だしかつた。陵墓嫌忌の思想は全く陰陽道の惡感化で、德川の末まで引きつゞいた。

元明天皇和銅三年奈良に遷都されてより、佛教の隆盛は燦然たるものとなつた。奈良朝の思想精神史は、光明皇后の聖德、大佛の建立、道鏡の出現、萬葉集に見ゆる和歌に表現されてゐる。佛教が隆盛を極めて美術の上に未曾有の特色を發揮したが、さりとて日本精神が萎微したわけではない大佛の建立も幾度か神祇に乞ひ伺つて許しの示顯があつたから行はせられたことである。萬葉集の詩人がいかに、日本精神の純なる持主であつたかも察して餘りがある。奈良の歷朝は神祇を敬し給

うたが、同時に佛教の御歸依厚く、支那僧鑑眞が佛像經論藥物を多く携へて來朝し、戒壇を建つるや、天皇先づ壇に登つて、菩薩戒を享け、皇后、皇太子以下四百四十餘人が戒を享けさせられたと「鑑眞東征傳」に見える。天皇とは聖武上皇、皇后とは光明皇后、太子とは孝謙天皇を申す。

この時代に於ける神道と佛教との對比は、和氣清麿と僧道鏡とに最もよく現はれる。寵遇を受けた道鏡は、僧大臣となり、佛法興隆の新政を布き、本地垂跡の濫觴をなし、諸國の國分寺を修理し僧尼を優遇し、その豪奢度を極め、大臣以下百官これを禮拜するの狀況であつた。會々宇佐八幡の神主阿曾麻呂が道鏡に媚び、八幡大神の神示なりと詐り、道鏡皇位に卽かば天下平かならむといつた。道鏡はこれを信じて、神器を望んだ。勅命により和氣清麿が、宇佐八幡に神意を祈ると、高さ三丈あまり滿月の如き光明を放つて神現れ給ひ「國家君臣の分は定まれり、道鏡が神器を望むとも震怒して聽かず。汝歸りて奏せよ。天津日嗣は必ず皇儲を立て、早々無道の人を掃除すべし」と神託があつた。

清麿は道鏡の怒りに觸れて追はれたが、後召されて本官に復し、道鏡は下野藥師寺に赴き、罪人の身を以て大寺の造營を支配した。清麿と道鏡との對比は、奈良朝に於ける日本精神と、外來思想の狀態を如實に物語る。

淸麿と道鏡との對立に反し、神道と佛教とが習合して來た事は、本地垂跡說のみならず、社寺合一の行はれ出したので分る。

社寺合併で一番早いのは、越前國の氣比神宮寺である。神前讀經は天平十三年宇佐八幡で先づ行はれ、爾來天下に廣く行はれるやうになつた。從つて神號を佛名と結付けて、八幡大神を八幡大菩薩と稱へるやうになり、神明は佛法を擁護し給ふといふ思想が一般に擴がり、平安朝に入ると畏れ多くも、天照皇大神その外三十柱神を、法華經の番神とするに至つた。後年これを憤らせ給うたのは明治天皇にてまします。

神佛習合の思想は、日本を從とし、外來精神を主とする誤謬に陷り、これが下刻上の精神を刺激して、純眞雄大の日本意識を抹殺する根本的作因となつたものである。

奈良朝に入つて、國分寺、東大寺その他の建立、大佛、佛像の鑄造、經典の書寫その他に使用された費用は莫大なものであつた。加ふるに全國各寺の領地は大なるもので、多きは墾田四千町歩、小寺と雖も一百町歩を有し、寺費亦莫大なりし上、一百萬の塔を建てたり、近畿の十六寺に各十萬

づゝの經文を分納したり、其の勞費の過大なりしことを察するに足る。從つて佛教の興隆はおそろしい勢で、國民經濟の苦痛を深刻化し、浮浪の徒は群をなし、天下三分ノ二は僧籍に入つたといふ勢で、權利觀念、下刻上の精神を刺戟したこと、前代未聞である。當時の農民は負擔の過重に惱み寺院の奴隷となる事能はざれば、浮浪の徒となつた。これ一面からいふと、貴族、僧侶、富豪の特權階級が榮華を極めた事實を物語るものであつて、佛教の隆盛とは反對に、官民の間に於ける道德的廢頽と、鬪爭意識は甚だしきものとなつた。其の證據に、金錢を以て官職を賣買する弊風が盛んに行はれ、無學の農民と雖も、財を獻ずれば官位を授けられて租稅を免ぜられる惡態を現出した。

當時僧行基は、時代の傾向を活用してその偉大をなした所の人物である。經濟窮乏の苦しみに堪へなかつた庶民は出家することに於て課稅、課役を逃るゝことが出來たので、私度と稱して一種の出家をなす浮浪の徒が群出した。是等の私度者を利用して、行基は一種の宗教運動を指導した。彼は私度の群と共に乞食生活を營み、又は私墾田を開發し、私道場を建立して、庶民階級の要求に應じ、畿內に四十九ヶ所の寺院を建立した。彼等は時の朝廷に權勢を揮つてゐた階級から異端視され幾度か禁戒されたところを見ると、貴族富豪に對立する鬪爭意識を持つてゐるものと思はれる。然

しその傾向は追々と緩和された結果、行基は天平十七年大僧正に任ぜられた。行基の死後、貴族階級は彼等に再び全滅的禁壓を加へ、その影響は山林修行の僧侶にまで及んだ。以て如何に特權階級が自己の權利、榮華を目的として居たかを察するを得べく、斯る傾向は平安期に入つて一層甚しくなる。從つて天下の經濟狀態もまたいよ〳〵惡化する。

第八章　役行者の日本使命

仲哀天皇の朝に歸化した支那秦氏は、秦の始皇帝の裔、功滿王の子孫なりと自稱して、最初山城國葛城郡に住してゐた時には、一黨一萬八千六百人あつた。彼等は貴族の優遇を受け、秦自らは己を王と自稱してゐた。その王稱を廢止させ給ひ姓を秦となさせ給うたのは仁德天皇にてまします。仁德天皇は應神天皇の第一皇子にまし〳〵たのを、時已に宮中に於て位人臣を極めてゐた秦氏その他の歸化支那人等は、儒學思想に御熱心なる第二皇子を皇太子に推し奉つて、自家の繁榮を益々擴張せんとする程に權勢をかち得てゐた。秦氏は、履仲天皇の御代、內藏の出納(宮中財政)を司り、

雄略天皇の朝には、內藏の外、大藏(天下の財政)を司り、その一族は九十二ヶ所に邑を爲し、彼等の權勢を度外視しては、何人も決して立身相叶はぬ狀態となつてゐた。後世に移るに從ひ、彼等の富は益々莫大となり、桓武天皇、第三回の遷都は全く秦氏の財力によらざれば不可能といふ程にさへなつた。

秦氏の外、歸化人團體にして政權に干與した有力な財閥が幾らもある。應神天皇の朝弓月君は百二十七縣の人夫を率ゐて歸化し、阿知使主はその一家郎黨及び十七縣の群衆を率ゐて歸化した。司馬達の子、鞍部多須奈も宮中に入つて、天皇を惱ませ奉つた。崇峻天皇を弑し奉つた東漢直駒は歸化支那人の子孫である。

彼等有力な歸化支那朝鮮人は、政權に干與し、財政職に當り、其の權を恣にして、累代の財閥となり、其の顧問役だる蘇我氏と結托して、自家の安立發展を圖つたのみならず、權利觀念を以て人心を毒し、皇位繼承に關して爭奪の禍を釀し、最初は儒教を後には佛教を宮中に盛ならしめ、殿堂伽藍の建立に繁忙ならしめ、神道家を誅し、その勢當るべからざる狀態となつた。

佛教の興隆は、全く彼等が自己の地位と財寶を得んが爲であつて、富を得た彼等は、奢侈淫風を以て上流階級を毒し、これに伴つて一般民衆の生活は甚だしく疲弊困憊するに至つた。

斯る天下度すべからざる弊害を一掃し、淫靡、墮弱、豪奢の惡を懲らし、殿堂伽藍佛教を驅逐し以て剛健素樸の神國日本を甦らせ、皇室の尊嚴を煌耀し、上生下の本來日本を莊嚴しようとしたのは、役の行者である。役の行者は舒明天皇の神胤を受け、先天的偉質を以て生れ、前後史上未踏の破天荒な信念と大計劃を打立てた。

彼は一切罪惡の源となつた殿堂伽藍文明を打毀し、以て歸化人の飽くなき暴威を打碎すべく大自然を以て神人勤王家の大陣營とした。南は三千六百の群峯競ひ立つ紀州を前門に、葛城山脈を外壁に、北は吉野山を後門に、神秘不可思議なる日本最古の遺跡を止むる聖地大臺原一帶の地域を中心にして金峰山と金剛山の間に橋を架け、以て本陣を構へようと試みた。

本陣金峯山は、日本全國に亙つて、あらゆる靈山の上に支陣を擴げる。支陣にはそれぞれ超人が中心となつて、一網打盡の神來的クーデターを行はうとした。支陣の超人には、鞍馬山の僧正房、愛宕山の太郎房、比良山の二郎房、飯綱の三郎、富士山の太郎、嚴島三鬼神、上野の妙義房、筑紫山の法印、彦山の豐前房、大山の伯耆房、叡山の法性房、肥後の阿闍梨、高雄の內供奉、白峯の相模房、秋葉の三尺房、高野山の法性房、堺の浦の太郎房、大峯山の金平六、葛城山の高間房その他

百千萬の眷族があつた。彼等は悉く役行者に味方して神國日本の建設家たる勤王の誓ひを結んだ。

彼等は役行者の一號令の下に金峯山へと集つて來た。彼等は超人であるから、四次元空間を馳せて、一瞬の間に來り集つた。彼等の變化出沒によつて修驗の指導を受けてゐる者が山々に居つたことは勿論である。役の行者には、人間義覺、義玄及び、鬼神一言主神及び前鬼、後鬼が附き添ふて、居た。前鬼、後鬼は全日本の超人や鬼神の參謀役をつとめて居た。一言主神は參謀長の役をあてがはれてゐた。

鬼人超人動けば人間も動く。斯くて世界歷史始つて以來、未だ曾て無かつた破天荒の神的大望の下に驚くべき偉業が緒についた。然るに歸化人の子孫、韓國廣足は歸化人全體の危險を知つて謀を讒し、「役の行者は葛城山に籠り、天位を傾け、神國を魔界にせんと企つ。速かに征伐し給はずば天下の亂となるべし」と奏上した。

廣足は、行者征伐を命ぜられたが、行者は神通力を以て飛行自在であつたので、これを捉へる術が無かつた。親孝行であつた行者の母上が捉へられたら、行者も身を現はすであらうといふことで母上が都にひかれて拷問された。母上の嘆を神通によつて知つた行者は、果して宮中に參內した。

行者は母上の放免を奏請して自ら刑に所せられんことを希うた。そこで彼は大島に流罪となつた。行者はその時、自己の信念を奏上し「修行の功により飛行自在なるを得たから、流罪の刑を受くるとも苦しからねど、是の如き讒を信じて、無罪の罰を加へ給はゞ、天下の亂基とならん。伏願くば讒者を退け、賞罰を正し、仁政を施し給へ」と、憚る所なく奏請した。

併し一旦の定めは飜し難く、彼は遠流の身となつた。これ文武天皇三月二十日。その後廣足の讒言なりし事が顯はれ、行者は無罪放免となり、官位を授けられることゝなつたが、行者は之を固辭して、箕面山に隱れた。その後の彼は行方不明となつた。心靈家は傳へていふ。彼はその後唐土に飛翔し、その心靈は今も毎年、護國の爲に歸朝し、三つの峯、箕面、富士、金峯に現れるといふことである。

神祕不可思議な事は省き、現代日本は現代化した役行者により、大自然を殿堂として潑剌雄大な精神指導を起さなければならぬ。

第九章　平安朝より源平時代へ

――權利と榮華の跋扈時代へ――

桓武天皇が平安に都し給ひしより、平清盛が太政大臣に任ぜられるまで、約四百年間は特異の例を除き、佛教による貴族の極樂時代を造つて行つて、遂に神勅にはあらぬ武家政治へと變轉しなければならぬ運命に試みられる。しかもこの時代に入り、支那陰陽道の迷信は益々甚だしくなつて、陵墓が御荒廢になり、古事が忘られ、尊き御祭典が支那化して行き、それが原因となつて、事大思想虚僞が行はれ、上生下の意義がすたれ、年を逐うて下刻上へと走つて行つた。

桓武天皇の奠都が大變に御困難であらせられたのは、全くその時代の精神と經濟狀態を示すものである。新都たるべき平城は、元明天皇和銅二年から工を御始めになつて、七朝七十餘年を經て竣工され、延曆元年に「今は宮室居るに堪へたり」と、仰せられた。然るに同三年には、突如また長岡遷都の仰せ出されがあつた。一體七朝七十餘年もかゝつて立派に竣工された新都が何故急に、居

るに堪へなくなつたのであるか。遷都問題に就て與つて力あつた者は、陰陽師の助船田口と、神祇伯大中臣氏である。こゝに歴史上の一大祕密が伏在する。

これ全く下刻上の支那思想及び、迷信と利慾とに固つた陰陽道に其の時代が感化されてゐた證據である。其の史跡をよく吟味する必要がある。如何となれば、これは德川末に至るまで引續いて日本を誤らしめた永き史的意義が存する故である。この新遷都問題に關してもまた造營に就いても、齋部氏は關係してゐないのである。一體中臣氏がお仕へする所には同時に齋部氏もお仕へするのが神代からの御定めであり、また神武天皇以來御實行遊ばされて來たところである。然るに遷都といふ重大事に際して齋部氏が退け者になつてゐるのは、兼々朝廷に重任されてゐながら、猶其の上にも榮譽と富とを得むと陰謀をめぐらしてゐた歸化支那人の子孫の策動によるのであつた。長岡遷都仰出されの時は、已に全く歸化支那人系統の陰陽師田口が、積年の宿望を達したのである。

この新遷都の爲には、正税の外、庸調一切の全力的な徴税が行はれて、工事が始つたが、造宮使であり且つ遷都の建議に功勞者なりし藤原種繼（田口と結托せしもの）が、延曆四年妙な事で横死した。これ神罰に非ずして何ぞ。種繼が死ぬると、不祥の故を以て、天皇は延曆四年と六年に、皇靈をお祀り遊ばすべきところを、支那式に天神を祀られた。その時の祭文には「敢昭告于昊天上帝」

といふ文字がある。昊天上帝とは、支那人の言ふ天の信仰であつて、日本本來の皇祖神、天つ神のことではない。斯ういふやうに祭祀を間違へることは、眞日本の道が消えてしまふことで、神勅の意義も、上生下の眞髓も分らなくなつて下刻上になつたことである。

さういふわけで、長岡は緣起がわるいといふことになり、延曆十二年正月にはまた平安に遷都の仰出されがあつた。然し多額の税は徴收されるだけ、徴收されて、それも空しくなり、この上人民には、餘力がないところより、秦氏が財政的御援助を申出た。

秦氏は歸化支那人の子孫で、時の一大財閥であつた。

平安は四神相應の地であるといはれた。北畠親房は神皇正統記に四神相應のことを記していふ。

「むかし聖德太子、蜂岡にのぼりて、今の城を見回らして四神相應の地なり。百七十餘年ありて、都を遷されてかはるまじき所なりと宣ひけるとぞ……誠に王氣相應の福地たるにや」と。

この四神相應の地とは、支那の俗信から出て來た言葉である。

これ程重大な事まで支那風に考へられるやうになつたのは、奈良時代から如何に日本が外國崇拜に陷つて、本來の大使命を忘れてゐたかを示す證據である。日本は斯の如く支那化すればする程、上下の禮は亂れ美德はすたれて財政的に窮迫しなければならなかつた。

さて平安遷都につき地相を見たのは東大寺の僧、賢憬であつた。賢憬は才識兼有の人といはれてゐたが、支那鑑眞の弟子で、頗ろ支那崇拜の人間であつた。平安遷都について、齋部氏は勿論、中臣氏も影を沒してしまつたことは、甚だしく日本が支那化した淺間しさを語るものである。

桓武天皇の御生母高野皇太后は、百濟の遠祖河伯が太陽の精を感じて生んだといふ都慕王の血統であらせられるから、自然支那朝鮮の感化が宮廷にまでも及び易かつたでもあらう。

桓武天皇の遷都以後、奈良朝の佛教は眞言、天台の新宗教と殆ど入れ變る。而して奈良朝時代に萠した神佛習合の傾向は一層此の時代に入つて鮮明となり、本地垂跡說が明かに唱へられた。

弘法は高野大明神に、高野山建立の土地を解放して貰つたといひ、天照皇大神を以て大日如來の垂跡なりと說き、ために其の眞言宗は後世兩部神道といはれる。博學でもあり、且つ法力をも有つてゐた彼は篤く朝廷に信ぜられた。

傳教は、大己貴命（おほなむちのみこと）、日枝命（ひえいのみこと）、應神天皇を、山王三聖として天台宗の比叡山に祀る。後世これを山王一實教といふ。山王一實教は、天照皇大神始め三十柱の神々を法華經の番役なりといふ言語道斷な教理を巧妙に誠しやかにでつちあげた。

是等神佛習合の思想は、日本に大なる惡感化を及ぼしたが、然し、神道を無視しては佛教の隆盛を見る能はざる事實を示してゐる。平安朝以來、神ながらの道は、佛教の陰に隱れて、日本は全く佛教思想に彩（いろど）られた。而して佛教の隆盛は貴族僧侶の專横榮華を增長ささせた。これ貴族の極樂世界たる所以である。

一體宗教は佛教にせよ、基督教にせよ、無我と慈愛とを說くことに於て、上生下の內容を有つては居る。しかしそれは個人的美德であつて、組織的政治的でない。個人的に一人や二人法身そのものゝ如き人があつても、それは超國家的であつて、日本を從にし、佛を主とする思想的賣國奴となる。ましてや平安朝佛教の如く、宗教が貴族の遊戲三昧に墮すれば、一の贅澤な花飾にしか過ぎなくなる。平安朝の佛教は現世快樂の器となり、然らざれば現世利益の祈禱に墮落した。熊野詣りや興福寺の仰山な發展ぶりがそれを示してゐる。密教を說いた眞言でも、法華の幽玄な修驗道を說いた天台でも、時代人心の體驗に訴へ、時弊を矯め國家民衆を指導する運動にはなつてゐない。弘法だつて傳教だつて、碩學で法力の體驗者ではあつたが、天下百年の大計を樹て、時代の惡を矯め、時代の悲しみを組織的に救ふ人物ではなかつた。

平安朝の佛教が如何なる感化を與へたかは、當時の文學がよく物語つてゐる。源氏物語に「春のおとゞのお前、とり分けて梅の香もみすの內の匂ひに吹きかひて、生ける佛の御國とおぼゆ」、「大將の御匂ひさへ薫りあひ、めでたく極樂思ひやらるゝ夜のさま」といふ如き、また宇津保物語が戀のために修行するさまを描いた如き、剃髮した道長を拜んで「いみじくなまめかしく見えさせ給ふ藥師」といつた如き、貴族の極樂狀態と、優雅な遊戲以外に何等の感化をも與へては居らんのである。寧ろ佛教は山伏行者の類によつて或る種の力を鼓舞した。彼等は、役行者の系統を踏むものでその出立ちは不動明王にかたどつたもの、握つた杖は天笠神人から受けた靈杖、修驗の道は胎藏金剛を旨として、嶮山惡所を踏開き、難行苦行の功を積み、日月淸明、天下泰平の祈禱を修するものと心得てゐた。是等の者が、おのづから武士と提携して、榮華の夢を覆えす一の原動力となつたものである。

平安朝以來、佛教の隆盛と共に、上生下の日本精神がいかに荒廢して、權利觀念がこれに替つて行つたかは、莊園の發達、賣官の弊風、熊野詣の盛況、興福寺の大げさな發展、聲聞師の續出等の

社會相でよくわかる。

莊園はもと、未墾の原野を貴族重臣に賜はり、また社寺に給せられたものを開墾したもので、皇族、貴族、寺院がこれを領有して居た。特に藤原氏の領有は廣大なものであつた。從つて莊園は治外法權で、納稅の義務がなかつたので、貴族、寺院の富は益々增大したが、これがために皇室費と國費とは益々窮乏するに至つた。農民もまた免稅の利を貪らむとして、勝手に寺を建てゝ自己の領地を寺領に變更した。斯くて莊園は中央權力より遠ざかり、遂に事實上獨立するに至つた。而して各莊園の間には何等これを統一する法がなかつたので、雜然として割據の形勢を呈するに至つた。

藤原氏が、莊園の最大所有者となつたことは、氏族政治が、藤原の一門に移つて行つたことを意味する。彼等は位、人臣を極め、或は攝政となり、外戚となつて政權を擅にするに至つた。自家の權勢を擅にすることを下刻上といふ。藤原氏の異邦精神に伴ひ、莊園を有する大寺では數千の僧兵を養ひその權利擴張は、益々增大するばかりであつた。

當時、下刻上の精神が下層一般人民の間にも、ぐん〳〵喰込んで行つたことは、三善清行の上書によつてよくわかる。三善清行は、佛教の隆盛が一般の貧窮と下刻上精神とを誘發した唯一の原因であることを、宇多天皇に奏請した一大國士である。同上書には、備中國下道郡邇麻郷では、稱德天皇の御代に、戸主の男の數が一千九百餘人あつたのに、清和天皇の御代には七十餘人となり、宇多天皇の御代には九人となり、醍醐天皇の御代には一人もなくなつたというて居る。天下斯る例は幾多もあつたのであるが、これには種々な錯綜した理由が有つたらう。國司が稅を私する爲めに詐つて報告した例もあり、農民が苛稅に堪へかねて逃散し、或は聲聞師になつたり、京都に奉公を求めて行つたりしたものもあらう。しかし京都の戸數もだん〳〵減つて行つたといふから誠に怪しからん。上は苛稅を以て下を苦しめ、下は義務をすてゝ村を去り、天下三分の二が免稅の僧侶になつた（三善清行上書にあり）といふ。これ國家の根本的頽廢で繼體天皇の御代と比較して隔世の感がある。

桓武天皇は、私利を貪る國司等を肅正しようとなされた。宇多天皇また地方政治の振肅につとめ給うた。宇多天皇の御代には諸國の滯納甚だ多く、特に甚しきものは、二十年間も納稅を怠つて居るものが有つた。醍醐天皇もまた莊園の宿弊を矯めようとなされ、花山、後朱雀、後冷泉、御三條

の四天皇も同樣叡慮を惱まし給うたけれど效がなかつた。藤原關白がいかに私曲を行ふ巨魁であつたかを偲ぶに足る。然るに白河天皇は佛法を熱心に信じ給ひし結果、寺領の莊園益々增大し、鳥羽天皇亦莊園濫增の勢を禁じ給ふことが出來なかつた。斯うした時代、寺院がいかに膨脹發展して天下經濟の中心として人心を毒したかは、南都北嶺のみならず、寧ろ熊野權現や興福寺によつてよくわかる。熊野は神社なれど、神佛習合の結果、全く寺院化して、佛教徒によつて、その威勢が築き上げられ、修行應驗の靈場として全國的に喧傳され、公家貴族の尊崇を集めしのみならず、畏れ多くも天皇も屢々行幸なされ、下々人心をも引き寄せるに至つた。

愚管抄の著者慈圓僧正は、熊野詣が、白河法皇から始つたと述べてゐる。法皇は御躬ら八度熊野詣をなされた。絶え間なく參詣する貴族の群が、いかに驚嘆的な大がゝりであつたのかは、その參詣旅行が沿道諸國を悉皆荒廢せしめた事でよくわかる。是等の參詣旅行の多額に上る費用は、莊園農民の負擔によるのであつた。莊園の農夫は、夫等引つきりなしに來る貴族諸團體のため、糧米、傳馬、宿舍の建築、渡船の設備、菓子、酒、味噌等の飲食物、土器、折敷の調度品、薪炭、秣、人夫等の準備を手腹切つてしなければならず、「若し疎略を致す者は定めて後悔あるべし」と、威喝

されるといふ有様だつた故、農民の負擔はいやが上に重なつた。

特にまた佛の尊信殊更なる、後白河法皇は院政を執らせ給ひ、熊野詣をなさること三十三回、後鳥羽法皇は三十一回といふ多數にのぼらせられた。その爲農民は最早その呻吟悲惱に得たへられなくなつたのである。これ實に末法惡世の時代なりと嘆ぜられた。藤原攝政が權を擅にしたことも、佛敎過信の弊害も皇祖の勅に無き院政も、凡てまつりごとの眞意、上生下の精神に乖くことであつて、夫が歴然として天下の經濟生活に甚しい惡結果を齎した。日本は神國である。面足と惶根の國である。日嗣と穗嗣の國である。換言すれば皇靈と經濟の道が合致したる大法の國である。この大法を無視して慘禍無しには濟まない國である。

宗敎的迷信が財を私し、又は意圖を誤つて國を危ふからしむるは東西古今の法則である。羅馬帝國もこのために亡んだ。支那も之に惱み幾度も廢佛毀釋の命が下つた。古代の國々は凡てそれに因て滅亡したのである。然し日本は天照皇大神の照見し給ふ國、八幡大神の御働きある國、八神始め國祖神の護り給ふ國である。惡世の日にも隱れたる人材、大器を求めて、祖神は天壤無窮の眞理の爲、萬世一系の皇道の爲聖なる感激と智慧を發揮させ給ふ。平安朝にも斯かる人材が幾多隱れてゐた。悉く嘆賞すべき人材である。齋部廣成、阿部眞直、出雲廣貞、三善清行、慈圓僧正の如き人々がこれである。

齋部廣成は、平城、嵯峨兩天皇の御代、群出した人材中の一人で「書契有ツテ以來、古ヲ談ズルヲ好マズ。浮華競ヒ起リ、還ツテ舊老ヲ嗤フ。遂ニ人ヲシテ世ヲ歴テイヨ〳〵新ニ、事代ヲ逐ヒテ變改セシム。顧ミテ故實ヲ問フニ根源ヲ識ルナシ」とて時弊を憤慨した人である。これ卽ち奈良朝以來、徒らに外國を模倣して新を競ひ、祖國を忘れた時弊を糾彈した言葉である。廣成は古語拾遺を著して、平城天皇に奉り御下問に奉答した。

阿部眞直も同時代の人で、日本歴史「大同本紀」を書いた人である。その史書は、今日無くなり僅かにその斷片が神宮雜例集及皇字沙汰文等の中に散在してゐるだけである。

出雲廣貞も同代の人で、日本醫學「大同類聚方」を書いた。同書は獨逸ライプチツヒのシヨイベ博士が獨逸に紹介した程の珍本である。

三善清行は宇多天皇の御代に於ける英才で、その經世の思想はいかなる人も舌を捲かざるを得なかつた程の人物、佛敎の興隆と共に天下の經濟疲弊し行く慘狀を論じ天皇に改革の書を奉つた。

慈圓僧正は公武錯綜時代、即ち源平時代の人で、日本歴史哲學「愚管抄」の著者。僧侶でありながら、神ながらの大道を獅子吼して、下刻上の精神を膺懲し、天下經濟の無道を責めて、肅正を論じた大人物である。

才幹逸出し玉ふ嵯峨天皇は、平安朝の英明なる天皇にまし〳〵て、故事に深く思をひそめたまひ皇子源清をして歴史を研究せしめ給うた。文章博士橘廣相が史實に疑問があれば、皇子に教を請うてゐた程で、皇子は隱君子と當時の人々に崇められてゐた。嵯峨天皇はまた詩と書とを善くし給ひ文人に祿を給ひ、萬葉集を完成し給ひ、また後代勅撰集の出づる動機とならせ給うた。皇學と共に顯密兩宗を極め給ひ、儒學にも明かにましました。勸學院を建てさせ給うて公家の子弟を教育なされしも天皇であらせられた。崩御に先立ち「余昔以不德、久忝帝位」と宣ひ、薄葬の遺詔を下し給ひし事は、何と畏れ多くも尊い事であらう。御言葉に宣く「豐財厚葬は古賢ノ諱ムトコロ……朝ニ死ナバタニ葬レ、夕ニ死ナバ朝ニ葬レ、棺ヲ作ルニ厚カラズ、之ヲ覆フニ席ヲ以テシ、……云々」と質素にすべき條々を宣ひ、最後に「忠臣孝子ハ善ク君父ノ志ヲ述ブ、宜シク我情ニ違ハザレ」と仰せられた。

さて、後嵯峨上皇の御代には、前代と異つて、俄然熊野行幸が少なくなり、只二回とならせ給ひ

しは、已に時代が根本的に變化して來た事を物語る。貴族の熊野詣でもそれにつれて不可能になつて來た。これは貴族に反抗する武家の守護地頭が勢力を得て、疲弊した莊園が益々廢れ、藤原氏を始めとして、榮華狂信の貴族が新興の日本精神によつて脅威を受けるに至つたことである。これ愚管抄の著者がいうたやうに、大神官並びに八幡大神が武家を用ゐて善政を試みさせむの御計ひである。

さて奈良朝に於て起つた賣官の不德は平安朝時代に於て益々甚しくなつた。圓融天皇の御代、多武峰堂、圓融寺などが建立され、白河法皇の御代、多くの伽藍堂塔が建立されし折など、特に官爵賣買の弊は激くなつた。國司が賄賂すれば昇任して任期も自由になり、昨日まで農夫であつた者が八百疋七百疋を奉れば、今日は正六位何々と名乘つて貴族を氣取り、課役を免ぜられるといふ有樣で爲に國庫の財源が枯れ盡きんとする狀態に陷つた。こゝに當時賣官の惡風並に世風頽廢の例二三を掲げよう。

一、多武峰略記には、百姓が三百貫文を納めたので、大和國權大椽に任ぜられた事を記してゐる。

一、愚管抄には「治まれる世には官、人を求め、亂れたる世には人、官を求む」といひ、當時大納

言や三位の數が從來の數倍になり、檢非違使などは數も分らぬ程多くなつたと述べてゐる。

一、類聚三代格には、此の國の百姓、過半これ六衞府の舍人（とねり）なりと記してある。これ賣官の結果である。

一、元明天皇和銅元年から、村上天皇天德二年までに、前後十二回の貨幣改鑄が行はれて、物價の暴騰暴落甚だしく信用墜落して政府は非常な難局に立つた。官を買ふ財も無く、納稅の力さへも無き者は續々として聲聞師になつた。

聲聞師の發端は奈良朝時代にあつて、その頃俗法師と呼ばれた乞食坊主が、平安朝になつて聲聞師といはれるやうになつた。最初彼等は托鉢で糊口して居たが、それにも堪へられず、或る者は踊り歌を眞似て千秋萬歲法師となり、或る者は遊藝を演じて傀儡師（くわいらいし）となり、田樂法師となり、或る者は陰陽師となつて世を廻り歩いた。その中でも稍安定を得る者は、東寺の散所法師や、高野山の谷の者となり、興福寺の五ヶ所、十座に使役されて、掃除、警固、雜役に從事した。

是等の傾向が、甚だしくなるにつれ、鎌倉武士の擡頭はその加速度的な勢力を得た。而して彼等

武士の氣運は、平安朝佛敎の華美遊惰なると異り、潑剌として一念無碍の淨土門や、日蓮の壯烈簡潔な題目や、一超直入の禪が現れて來た。

第十章　鎌倉時代

莊園が發達の極に達すると、三つの著しい社會的現象が生ずるに至つた。（一）農民は國司に搾取されて生活苦に沈淪するに至つた。（二）山賊海賊が出現して人民の財產を掠め去るに至つた。（三）莊園の持主には皇族、貴族、僧侶、地方豪族といろ〳〵有つたが就中豪族が一番有力となつて來た。豪族は手づから農業を營んでゐたので、他の莊園主と異り、潑剌たる元氣があつて、山賊、海賊に備へ、私兵を養ひ武術を練つてゐた。夫等の內で最も勢力を有してゐたのは、中央から下つて來た高貴な門地の豪族で、自ら地方の武士を糾合するに至つた。これを武門といふ。武門の中で最も傑出したのが、淸和天皇の後裔源氏と、桓武天皇の後裔平家であつた。平氏は瀨戸內海の海賊を平げて西國に勢を張り、源氏は東國の諸豪族を平げて關東に勢力を實現した。

會々榮華に耽つでゐた藤原氏は、內に糾紜を起し、攝政關白としての威勢衰へ、法皇の院政がこれに替つた。佛法の過信に伴ふ過大な勞費に治りの付かぬ院政と、天皇親政との間に問題の起るべきは當然で、該問題が保元平治の亂となるや、武門の威力、一時に擡頭し、勝を得た平家が先づ政權を掌握した。飛ぶ鳥も落さんばかりの勢を呈した平家が、美しき物語を以て藤原氏の轍を踏み、一時に凋落滅亡した樣は、有爲轉變、盛者必滅、人生の無常を當時の人心に深く感ぜしめた。

平家の滅亡と共に源氏が鎌倉に幕府を開き、清廉剛毅な武家政治を始めた。賴朝は朝廷の御許しを受け、各地方に守護地頭を置き、守護をして軍事に、地頭をして財政に當らしめ、是に於て從來の莊園が初めて統制さるゝに至つた。保元平治の亂の成行は、天下如何に成り行くものか分らぬ程暗澹たるものであつた。北畠親房がいつたやうに、武家が天下の實權を握ることは、許すべからざることなれど、當時の狀態からいふと止むを得ざることであつた。奈良朝以來五百年、重なり重つた天下財政の紊亂を肅正し、榮華の夢を追うて虛勢された貴族を制し、曲りくねつた一般の利慾觀念を一掃するには、果斷剛毅の源氏が起ち上る外、道が無かつたのである。源氏が三代で終り、執權北條氏が其の後を嗣ぎ、承久の亂が起つたことは、下剋上精神の露骨なる爆發とはいへ、これは寧ろ朝廷を取り捲く無爲の貴族と、天下救濟の實力を練り上げた鎌倉武士との間に起つた止むを得

ない運命の戰であつた。但し承久の亂は後日、建武の中興とならなければならぬ因となつた。

幕府は平安朝時代の繁文褥禮を一掃して、萬事に簡潔明朗を旨とした。佛敎は天台、眞言と入れ替つて、題目稱名の端的なるすさびとなり、直入的なる禪宗が迎へられた。法度も亦簡單なる貞永式目となつて、賴朝以來の精神が北條泰時の代に最もよく現れた。是等の宗敎及び法度は、獨創的日本的であつて、奈良朝以來の信佛及び法度に於ける一大變革を意味し、その新信仰は今日に至るまで、日本人の生活に生き、その法度は室町時代にも德川時代にも適應された。

前九、後三の役以來、潑剌として發揮された鎌倉武士の精神は、凜然として一切をその面目に同化育成せずには止まなかつた。「念佛の行者は無碍の一道なり」と、一念無碍の救道を說いた親鸞が、京都に野たれ死にした如き、無私の生涯を送つた日蓮が「吾は日本國の柱なり」と獅子吼して天下の迫害中に孤立しつゝも、題目絕對の確信を失はなかつた氣慨、宋より來つた佛光禪師の直截なる激勵の態度、宋に遊學して曹洞禪を傳へつゝも、陸離として和光を放つた道元の如き、凡て鎌倉武士の氣脈の中に、日本々來の純然無垢なる相を發揮し得た事は、何たる偉大なる創造力であつ

たらう。

北條氏はよく、この氣魄を持し、以て天下の政治を革新した。たとへ下剋上といはれても、その本旨は日本精神であり、天皇の御爲である。時頼は參禪して「業鏡高々懸ル三十七年、一槌打碎大道坦然」と偈を唱へて往生し、時宗は元寇を打碎して行年三十四、電光影裡春風を斬るの慨を以つて死んだ。

幕府の守護地頭は、舊來の惡を一掃した。南都興福寺、北領延暦寺の横暴なる大勢力を打碎いた高野山の武器を燒き棄てた。一切の僧兵を嚴禁した。無私無慾なる泰時の執政は天下を悅服せしめた。荒けづりで緻密で、親愛の情を國民に徹底し、その兵備たるや、事有るの日に急飛脚を關八州に立つれば、立どころに十萬騎の將卒駈け付けるといふ行き屆き方であつた。泰時の政治がいかに嘆賞すべきものであつたかは、伊豆北條の民を救つた一小事件にもよく現れてゐる。北條の民が飢饉に窮した際、泰時はこれに飯米を貸出して秋の收穫時に返還せしむべき約束をした。然るに其の年も風のため返還叶はず、窮乏の民は逃散を企てた。これを聞いた泰時は、直ちに化條に赴き、負債者を集めて其の面前に證文を燒き、彼等を懇ろに饗應した上一人前一斗づゝの米を土產につけ加

へてやつた。父老の感激は一方ならぬものがあつた。平安朝以來類例なき事である。

時宗の代になつた。元軍大擧して來襲すると傳ふる者が有つた。元の使者周福、欒忠の二人が來て博多で斬り殺された。京鎌倉の間には毎日飛脚が走つた。博多筥崎の沿岸には、またゝく間に石垣土堤が築かれた。緊張し切つた西國、四國、山陰、山陽も纖芥ばかりの隱れた者もない程、民心一致して落ついてゐた。逃散亡命の輩は一人も見當らず、家々は戸締せずとも泥棒すらなく、天下淳朴質實、萬民凡て心易く思つてゐたといふ世の中だつた。いざ元寇となると、全國民は上を下へと一つに緊張しきつた。神功皇后の靈、八幡大神の靈、仙人、天狗、行者の靈、さては宗像神社姫神の靈も共に競ひ起ち、神々と人間の共同攻防戰が開かれ、弘安四年八月六日、大暴風雨の中に元軍は全滅した。これ文永三年、元の最初の使が來て以來正に十五年目である。

元軍大敗したにも拘はらず、再び來寇するとの懸念があつて、全國社寺の祈禱行事止まず、爲めに人民の富はこゝに吸收され、あまつさへ關東初め各地の將士絕えず九州に下つて軍事に當り、その財を盡した。北條の同族も九州總督の任に當つて其の財を空乏した。英傑時宗は死んだ。全國の

社寺は執念深く幕府の恩賞に與らんとして權利を主張した。再度の元寇に備ふべき軍費も夥しかつた。幕府の財政はこゝに頓挫を來した。加ふるに守護地頭その他領主の子孫が段々殖えて、財産分配から來た窮乏と、戰後に於ける贅澤と精神弛緩のために、幕府は遂に崩壞の運命に囚はれる。

鎌倉時代の天下經濟は、武家の精神によつて泰平の狀態に盛り上つた。幕府經濟の破綻は、幕府精神の弛緩無能が根本的原因になつてゐる。元軍懲服の後に來つた天下の經濟難を救ふには、頼朝泰時以上の大人物が必要であつたが、最早天命は盡きた。天下は變らざるべからざる法則によつて動く。今やその時機到來した。

第十一章　建武の中興と南北朝

元寇の後、幕府は大政を奉還すべきであつたが、時勢はこれを許さなかつた。然るに時宗死してより、天下は權利主張にざわ立ち、下刻上の精神が新たに擡頭して、世は再び渾沌となつた。引つ

づく北條執權に一人として人材が無く、從つて平安朝以來の公武莊園がまた競ひ出し、僧兵すらも頭を擡げ出した。然し莊園の格闘は單なる利權擴張を意味せず、その中から至純の日本精神が悲痛な鼓動を以て目を醒ました。これを御指導なさたお方が卽ち後醍醐天皇であらせられる。

畏れ多くも御簾の陰にて人民の爲めに短冊をものし給ひし後宇多天皇が崩御遊ばすと、北條執權が擁立した東宮邦良親王が皇位に卽かせられる事となつてゐた。然るに、「神慮に叶はず、祖皇の誡に違つて」偶然薨去された。時しも執權高時暴戾、天下の人心幕府を離れ、その命に背く者さへ有り、剩へ皇室に對して不敬の振舞も多かつたので、その機に乘じ、後醍醐天皇は天つ日嗣をつぎ天下を親政し給はんとの思召で、日野資朝、藤原俊基に密勅を下し、密かに諸國の武士に說かせ給ふた。下刻上の壓力の下から上生下の勤皇精神は忽ち火の如く燃え出した。然し、後伏見天皇第一の皇子、量仁親王が對立されたので、後醍醐天皇は、俄かに都を出でさせ給ひ、奈良に臨幸遊ばされると、東大寺の僧兵來り攻めた。よつて笠置の山に行宮を占め、志ある勤王の士を召し集められた。屢々合戰の後、高時大兵を差向け、事困難になり、六波羅へと移らせ給ひ、集つた志士も大ぶん捕へられ或は忍び隱れた。その折、量仁親王が皇位に卽かせられて光嚴天皇となられた。これ高時の擁立に因るものである。爾來六十一年、後龜山天皇が後小松天皇に讓位されるまで南北朝兩立

して、勤王至誠の血涙史が綴られる。

北朝の光嚴帝卽位の翌年、後醍醐天皇は、隱岐に遷らせられ、皇子達も彼方此方に流れさせ給ふ其の間護良親王が山河を經めぐり國々を訪ねて、義兵を集め給ひし御苦心察し奉るも畏多く、悲痛の涙に咽ばしめられる。楠正成が奮然として義兵を起し金剛山に立て籠つた。名和長年が伯耆の船上山に天皇を迎へ奉り、來り攻むる者を討つた。近畿地方に於て勤王の志ある者が八幡山に陣取つた。東國からも義家の子孫源高氏が馳せ參じた。尊氏の血緣新田義貞が兵を起して、風の草を靡かす如く幕府を倒し、高時始め一族皆自殺した。符契を合せたやうに、西は九州でも菊池武時が勤皇の旗を擧げた。旋風的な勢で、賴朝以來百七十年間打續いた武家政治が覆つて建武の中興となる。

「宗廟の御計らひも時節ありけりと天下こぞりて仰き奉りける」と北畠親房はいうた。

然るに建武二年、足利尊氏、自ら征夷大將軍と稱して反し、破れて九州に走つたが、忽ち大勢を捲き起して來り攻め、正成戰死し、光嚴院を擁立して北朝を奉じた。建武三年十二月後醍醐天皇は吉野に還幸され、爾來北朝の世の中となつた。

吉野は役行者の精神を汲む修驗者等の居るところ、金峯山、大台原に打つゞく。修驗者等が勤皇の誠を捧げたことは、天皇が役行者の思ひ出に、櫻樹を植へ給ひしことで明かである。

第十二章　室町時代

南朝の忠臣は、相次いで斃れた。

勝つたが故に正しいとは、下劣上の人間が言ふことである。英國のクロムウエルにとつては勝つたが故に正しかつた。支那の王道精神に於てもまた、正しきが故に勝つと言ふ。皇道は、一切を統べ治めることである。一時の對立的精神は、皇道の目指す所ではない。皇道は地上に於ける神意の育成である。

忍ばなければならぬ時には、いかなる困難なところにも忍んで、その至純性を更に莊嚴するところに、皇道の永遠なる生命がある。

日本は神國である。神國なる所以は、伊勢貞丈が言うたやうに、神聖鍛錬の道場なるが故である

建武の中興は南北朝の對立によつて更に鍛錬され、つゞいて室町時代の試錬を經、國民の元氣を更

に旺溢せしめ、群雄の叡智と天才とを練り、天下の渾然たる統一を實現して、底力強い皇道の燦爛たる將來を創造すべき幽契が有つたのである。

貧する者も窮するも、業の故であると觀ずる末派信仰の思想は、神道精神に於ては更にない。神道に於ては、貧することも、窮することも、神聖鍛錬の爲めである。

足利尊氏は幕府を京都の室町に置いて北朝を擁護してゐたが故に、南朝の忠臣相次いで斃れるに及び、その子孫が嗣いで以て武家政治を行ふことゝなり、再び足利氏は、藤原氏や平家の轍を踏んで、貴族公卿化し、百數十年の後、遂に武士の蹶起によつて打ち亡ぼされた。

下剋上の言葉は實に室町時代の世相を表す代表語である。室町幕府創立當初から人心は淺ましきまでに權利觀念に支配され、公武の對立甚だしく、常に內部の紛紜繰り返され、幕府はこれを統一する實力を有たなかつた。權利觀念は實力の競爭となり、將軍は管領にその實際を奪はれ、管領の勢力も亦其の仕官に移り、地方亦これと同樣に、守護の實權は、守護代に移り、本官の威力は代官

に移り、代官の勢力はまたその代理者に移るといふ風であつた。

この傾向は上下一般に波及動搖し、寺院に於ても、本寺は末寺に、師匠は弟子に勢力を奪はれ、下層の民が上層の民を凌ぎ、貧民が富者を覆さんとし、商人が自利を目的として、世間は滅んでも自家の繁榮を目的に非道を公然行ふやうになつた。

將軍夫人が賄賂で暴富を積み、米相場に手を出したり、關所の通關稅を捲き上げたりする一方、洛中の米商人が非常手段で暴利を貪つた有樣は、言語道斷であつた。幕府が米の値段を公定して立札を立てゝも商人はその一日だけ之れを守り、更に暴利を貪らんとして翌日より米を賣らず、各地から運送して來る米を途中に擁して京都に入れなかつたといふ有樣である。民主主義的傾向も玆まで來れば無政府狀態である。「天下は破るれば破れてしまへ、世間は滅ぶなら滅んでしまへ。人はどうでも我さへ富貴ならば他より一段瑩輦樣に振舞はんと成行けり」といはれたのは、當時の世態を示すものである。

斯の如き狀態にて、一方に奸惡な富が積まれると、他方は赤貧洗ふが如くになり、上下の對立はその極に達し、天下到る所に土一揆が起るに至つた。

土一揆とは百姓一揆のことである。これをまた徳政一揆ともいつた。徳政は鎌倉時代に始つたがこゝでは大ぶん意味が違つて、農民の負債滯納棒引き要求を意味したものである。土一揆はまた馬借一揆となり、足輕一揆をまき起すに至つた。馬借一揆は世間の不景氣甚だしく、運送すべき貸物がなくなつた事から起つた一揆である。土一揆は又一向一揆、法華一揆ともなつて、信仰による利權攫取のため格闘した。是等の一揆は約百數十年引きつゞき、一たび蜂起するや幾千幾萬の土民が騒ぎ出し、負債抵當の棒引を意味する徳政令の發布を官に要求し、官これを聞かず追手を以て攻め立つれば、詮方盡きた土民は神社に立籠り、社に火を放つて自殺を遂げた。また一向一揆は「敵方へ懸る足は極樂淨土へ交ると思へ。引き退く足は無限地獄の底に沈むと思うて一足も退くな」と勇み立つて戰つて居た。過去に於ては貴族の遊戯的信仰が、今や變つて生活苦に悶絶する決死の信仰となつて來た。天下の道義廢れし苦悶の日に於て天災が來るのは、古今東西の通則である。室町時代にも屢々飢饉疫病が襲來して、一層一揆騒ぎの動機を強めた。

天下斯の如き窮狀に在つた時、幕府は驕奢甚だしく、爲めに多額の税を徵收したのみならず、又臨時費と稱して莫大の資を獻金せしめた。當時京都に於ても地方に於ても、最も繁昌してゐたのは金融機關たる土倉卽ち質屋と酒屋であつた。質屋は重税をまくり上げられると、一層質物の利率を

高めたので、彼等に金融を求めた公家武家はじめ一般士民の貧窮は益々甚だしく、更に融通を賴めば今度は返濟に窮迫して、怨嗟の聲が天下に滿つるに至つた。

土倉や酒屋は一揆の難を逃れんとして、有力な社寺を本所とし、神人なりとして威をふるひ、或は公卿の家人或は、有力な武家の奉公人となつて身を護つてゐた。幕府にとつて土倉は財源であるから之を保護し、土倉はその保護を求めて幕府に賄賂を贈つてゐた。然しながら猛然と湧き起る土一揆を服するの兵力なき時、幕府は徳政令を出して結末をつけた。徳政令が出れば土倉の質物を無償で取戻すことが出來たが、それを請出しに行く者は女でなくてはならぬといふ規定が出來、且つ請出しに行く女が覆面してゐたことは、性の賣買を意味した慘狀を物語る。

土一揆はまた貧窮な公家とも相通じてゐた。「公家武家人々切迫の條痛敷相存」と掲げて土一揆の起つたのは、土民が公家武家の貧しき者と結托した實例である。一揆の中でも最も大なるものは、播磨、山城、北陸地方に起つた者である。播磨の土民は守護赤松滿祐を破つて「國中に侍(さむらひ)をあらしむべからず」といふ勢であつた。山城では文明十七年から十八年にかけて、十五歳より六十歳までの全國民が總動員し、畠山軍隊の撤退、社寺領の還付、新關撤去の三項を强要し、畠山軍は、この國民軍に壓倒されて撤退した。これより全く民主黨獨立の觀を呈し、山城國民議會を召集し、國

内の法律を制定し、税額を決定し、國内の行政を握つた。年明けて伊賀貞宗が守護職となつて來任するまで、山城國は紛亂の中にも自治團を實現してゐたのである。北陸の一向一揆はまた猛烈を極めたものである。加賀國主富樫政親に反抗した一向一揆は、信仰に燃え立つて武器を取り、能登に亂入して同地の一揆を加へて戰つた。一揆も富樫も共に援兵を乞うたが、勝利は遂に一揆に歸して富樫氏は亡び去つた。一向一揆は其の他到る所で蜂起した。彼等は奈良を襲うて興福寺を燒討にし一切經も法事道具も散亂した。春日神社に亂入して神物を奪ひ、反抗する六萬衆を追つて奈良に大なる損害を與へた。一向衆が近畿の到る所に蜂起して世を騒がせる樣を見て、時人は「末世之爲レ體可レ嘆」と嘆ずるに至つた。

一向一揆はまた法華一揆と大衝突を來した。當時本願寺は、日蓮宗よりも優勢であつたが、それでも日蓮宗には京都に二十一寺有つて、其の勢侮るべからざるものがあつた。一向、法華一揆が衝突すると、延暦寺衆徒が法華宗徒に味方し、幾度か激戰を交へた果、本願寺は遂に兵火に燒かれ、寺院皆烏有に歸した。本願寺の富は日蓮衆徒と延暦衆僧によつて悉く分捕されてしまつた。それから夫れへと同一揆は飛火して近畿を騒がせ、京都では革堂と六角堂が鐘を亂打して、來る日も來る日も騒動をつゞけた。同一揆はまた石山寺にまで延びて行き、日蓮宗側に攻めらるゝ一向宗徒は、

稱名を首にかけ口に唱へて血戰した。遂に一向一揆は破れて八百餘人の死者を出したが、それでも本願寺の勢力は衰へず、近畿地方に根を張つた。

猶當時紀州の如きは土民の手に收められて「守護はなく百性持になりたる國」といはれてゐた。

この下剋上の淺ましい時代、上生下皇道意識が起つて來たことは、南北朝時代に於て、北畠親房や忌部正通が現れたのと同意義である。親房の「天祖初めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ我國のみ此の事あり。異朝には其の類無し。此の故に神國といふなり」を更に組織的に説明して、神道神學を建て、以て本地垂跡説を覆した人は、この時代に於ける一條兼良及び吉田兼倶であつた。兼良は、將軍義尚の爲に「文明一統記」を書いて「百官の次第を立つるには、神官を以て第一とすべし」と論じ且つ「國の將に起らんとする時は、神明降りて其德をかゞむ……神怒り民そむかば何をもてか久しからむ」といつた。兼倶は「唯一なる神明の眞傳、一氣開闢の法なり。吾が唯一神道は天地を以て書籍となし、日月を以て證明となす。是れ則ち純一無雜の密意なり。故に儒釋道三教は要すべからず」といつた。

兼良及び兼倶共に、本地垂跡説を覆して、本來の神道に歸つたものゝ、その委細の説明に至ては

多少儒佛の感化を脱する域には行つてゐない。だがしかし下刻上跋扈の折柄、夫等の思想信仰は、天皇親政の天下統一を希ふ上生下精神の著しき功績より出て來つたものたる事は疑ひない。

上生下精神の願求が、下刻上の惱みの下から、强力的に持上つて來ると共に、日本人は海外雄飛の本能に目ざめて來た。足利氏が貴族氣取りの生活から醒めて、この新傾向を指導し得たならば、切支丹宗門の發展に先立ち、日本は海外にどんな發展をしたか分らない。正平年間、日本人は屢々高麗に浸入し、支那の沿岸を掠めて鬱勃の氣慨を發揮した。高麗王も、明の皇帝もこれには手こずつた。元中五年には鎭南浦から光州に侵入した。これ和冦といはるゝもの。約百年に亙る長期間、日本の東洋意識は熾んに活動を始めた。切支丹の渡來及び葡萄牙の商船がやつて來るやうになつたのは、其の後數十年以上經つてからの事である。當時に於ける東洋雄飛意識は、豐臣秀吉時代に至つて澎湃として動き出す。

第十三章　切支丹發生の史的意義

「六波羅や闇に椿の落つる音」

この一句に表象されし運命を以て足利の室町時代は戰國の世に移り、信長秀吉に統一されて、德川の手に委ねられる。その間日本に傳道された切支丹が、九州、京畿地方から、東北へと迅速な勢で大なる力を張つた。上は大名から、下、土農工商に至るまで、どうして斯くも發展するに至つたか、これ亦考へなくてはならぬ大問題である。

奈良朝に源を發した佛教の勢力は、平安朝から室町時代の終りに至るまで、日本思想精神の指導的地位に立つた。その間、歷朝卽位の大禮や、大神宮への奉幣や、天下事ある日に行はせられた天神地祇への祈願を除いたならば、僅か神社の建立や修繕の外、神道意識は國民思想精神の指導力たる能はずして國民の潛在意識に隱れてしまつた。斯くて寺院は國民思想の指導的地位を握つた

ばかりではない。また同時に大なる經濟的な權力を維持し來つたのである。大寺院の領地は領主の領土を遙かに凌ぎ、その組織は堅固不拔にして、多くの僧兵を蓄へた。室町時代となつて、貧窮な農民どもは寺院を唯一の頼りとし、以て領主と幕府に反抗し强烈な勢で一向一揆を起した。近畿地方ではその一揆が細川氏の兵力を打破り、北越に於ては守護富樫氏を擊亡ぼした。三河の一向一揆は家康を屢々危地に陷れ、信長もまたこれには一方ならず惱まされた。信長一生の最大困難は、一向一揆と戰つた石山城の合戰であつたといふ。彼が一揆と戰つたことは數十回、天正三年の合戰には一向僧七百人、一向土民一萬二千有餘の頸を斬つた。

切支丹が日本に傳道されたのは、斯る時代に於てゞあつた。それが急激な勢で發展した理由には斯ういふ意味がある。

一、時代末の焦燥たる人心には、潑剌たる精神的信頼が必要であつた。信頼するに足るものは、第一心の平安と、忍從の教訓が必要であつた。第二に現世的の力と來世の希望が必要であつた。一向一揆によつて已に酬いの無いことを知つてゐた民衆には、切支丹の信仰が時代を導く狼火の如く燃え移つた。信仰による奇蹟は、奇蹟なき佛教よりも遙かに彼等を魅惑した。一揆に反し、無抵抗の美德に徹することは、却て彼等の本心を喜ばせた。

二、切支丹と共にやつて來たポルトガルの商人は、當時の日本よりも進んだ文物を傳へ、彼等と貿易して利益を得たいとの要求が大名を動かし、歐洲文明の背景が彼等を引きつけた。

是等の理由により、先づ九州の大村、大友、有馬の諸大名が切支丹となつて貿易を開始した。長崎は日本の羅馬となると共に、最大の貿易港となつた。切支丹の宣教師は、朝廷將軍の免許と保護とを得んとして京畿地方に上り、布教を始めると、信長はこれに好意を寄せた。秀吉も後には嚴禁したが、最初には好意を示した。

秀吉は天正十五年六月十九日、定を發して曰く、「一、日本は神國たる所、切支丹より邪法を授候儀太以不可然事」と。天下を統一した秀吉が、政治的基礎として思想信仰上の統一を必要と認たのは尤な道理である。彼は諸外國の背景を有する切支丹の勢力を抑へるのは容易ならざることゝ考へたのである。已に早、切支丹は、神社佛閣を破壞しつゝあつたので、秀吉はこれを前代未聞に候と警告した。一たび禁教令によつて切支丹の迫害は始つたが、しかし秀吉は獨占的貿易と海外併呑の雄圖によつて、時に禁教をゆるめ、宣教師等を利用しようとした。

家康は、最初、切支丹に好意をよせるごとくに見せかけ、追々とこれに停止を勸告し、天下統一の日に至つて斷然これを禁止した。切支丹と家康との交渉は已に關原戰役の折に始まり、慶長八年にはオランダ船に妨害されて窮地にあつたゼスス會に金五百兩を寄附し、更に五千兩融通したこともあつた。その後ゼスス會の教師に銀若干を寄附したこともある。慶長十四年には、教師ドン・ロドリゴを優遇してイスパニアとの通商を圖つた。

切支丹大名に對しても直接禁止の命を下さず、いよ／＼秀吉の餘勢を大阪に亡ぼした其の後に於て、禁教は俄然として勵行され、慶長十七年「南蠻切支丹法天下に停止すべし」との布告が出た。急轉直下、その禁止は勵行され、四條五條の河原では、轉向しないものを焚刑に處し、慶長十九年には多くの教師及び信者がルソンに追放された。

秀忠時代には、居殘つてゐた教師や信者は勿論、彼等と交際するものまでも、死刑に處せられ財産は沒收された。教師をかくまつた者あれば五人組全體まで刑に處せられた。

家光の代になつて、禁教の令更に嚴に、合せて鎖國令が徹底された。

前後の禁止令によつて、直ちに改宗したのは大名たちであつた。彼等は、猛惡なる迫害者にまでも早變りした。然し下層の民は、迫害さるればさる〻程、益々信仰に白熱して讓らなかつた。特に農民と貧民の信仰は、嚴として動かすべからざる程莊嚴を極めた。信仰の烈火が貧民の間から燃え出づるのは古今東西を通じて同じことである。信徒は迫害さるればされる程團結し、殉教の決心を以て激勵し合つた。團結した組は樣々で、男女共同組もあり、婦人ばかり、或は子供ばかりの組もあつて、夫等が九州、京畿地方から關東にまで擴がつてゐた。幕府は根こそぎ一人も殘さず搜索して苛酷な拷問の果、これを火刑に處し、穴釣にし、十字架につけ、或は溫泉の熱湯に投げ込んだ。

渡來早々から歡迎されて、支配の地位に時めいた佛教の發展ぶりと何たる相違であらう。

切支丹は無抵抗主義の信條を有つてゐる。其の信仰は美德と共に動かすべからざるものであつた然し止むなく究竟におしこめられた信徒は、爆然破裂せざるを得なかつた。若しこの時代、一大英傑が居つて、彼等信徒を率ゐ、フヰリツピン、布哇、南洋南米に移住してゐたら、何と愉快であつたらうものに。俄然信徒は島原に立籠らねばならぬやうになつた。

島原と天草は、有馬及小西の領地であつた。小西は信徒の故に死刑に處せられ、有馬は轉向して背教者となり迫害につとめたおかげで日向に移され、天草には寺澤、島原には松倉が新領主となり

九州各地からの援助を求めて、信徒掃にとりかゝつた。然るに藩臣は悉く信徒だつたので、彼等は新領主に從ふ事を潔しとせず、去つて浪人となり、農民漁夫と共に島原に立籠つた。茲に至つては、彼等は無抵抗主義から、劍と奇蹟の信仰に高潮しきつた。信仰による一揆の前に代官は殺され藩軍は打破られ、一同四萬その勢當るべからざる狀態であつた。幕府は板倉内膳をして兵十二萬五千を率ゐさせて、幾度か猛襲を試みたが常に失敗した。遂に兵糧攻にあつて島原城が陷落した時、生き殘つてゐた者は殆ど、女子供ばかりで、夫等は悉く虐殺されてしまつた。信徒は更に東北に發展したが、それも撲滅された筈の切支丹が明治元年肥前浦上に、三千餘名團結して殘つてゐた。

秀忠、家光の切支丹迫害は、第三世紀に於けるネロ皇帝の迫害と共の慘狀ほゞ相變らず。ネロ皇帝の迫害は歐洲に於けることゝて、信徒は外國に移住することが出來、波斯、印度、中央支那にまで延びて行つた。日本では逃亡の天地が無かつたゞけ、更に慘たるものが有つたらう。

切支丹は全滅した。武士の精神と西教の精神とが合致して、鐵石を貫くその力は、遂に何等の文化をも創造するの餘裕を與へられずして全滅してしまつた。

第十四章　秀吉より幕末まで

一、秀　吉

下剋上の室町時代は戰國の世となり、天下統一の動向が旋風的に起る。織田信長が足利將軍を幽してから、豐臣、德川の歷史が終りを告ぐるまで三百數十年、皇道意識と天下經濟との因果合法性は一層明かになる。

天下統一後、秀吉の多忙は甚大なるものであつた。家康との和を維持し、四國を平定し、島津氏を平げ、北條氏を討伐し、高野山の法制を定め、僧侶の武器を奪ひ、全國の刀狩を行ひ、天正の立直し、文祿の檢地を行ひ、士農商の階級を嚴にし、遊民を取締り、以て社會機構の健全なる育成に努力しながら、兩回に亙る三韓征伐の大軍を動かさなければならなかつた。その多忙裡にあつて、利久に樂燒の茶碗を作らせ、時雨、唐傘の茶室にさびを味つた秀吉の餘裕、戰勝の賞として、廣大

な領地を賜はるよりも、珍らしい美術品を贈られることを、一層滿足に思つてゐた諸將の心境、いかに當時が、鎌倉の末期や、室町時代と異つて、經濟的に豐富であつたかを偲ばせられる。天下殷富にして物價は安かつたといふから、秀吉時代の經濟は超然たる異彩を放つてゐる。

當時の經濟は全く秀吉の召命と合致する。彼は東洋神聖大帝國實現の召命を有つてゐた。而して都を北京に移すべく、已に後陽成天皇の御許を受けてゐた。神道意識は秀吉に至つて、烈火の如くに燃えた。彼曰く「雞林八道大明四百餘州は勿論、進んで天竺國を平定し道あらば地獄極樂を克服し、青鬼、赤鬼、阿彌陀如來を虜にして神國日本の臣たらしめん」と。神道意識と共に天下の經濟が立直つて殷富となるのは日本の奇蹟である。彼が竹の筒につめ込んでゐた金塊を大根でも切るやうに切つて人に與へたその富は、正に驚倒的であり、奇蹟的である。彼は度はづれの皇道意識に踊躍してゐた。然るに彼の豪膽、彼の大才を超えて、電雷の如く彼を威嚇するものが唯一つあつた。それは九條玖山といふ貧乏公卿の一存在である。

玖山は天下に富こそ持たね、神授の富をその靈性に藏してゐた。事あるを豫感すれば、梟も來て鳴き、道路を歩行すれば渦卷風が先立つて案内するといふ程の玖山である。玖山は秀吉を叱つた。「汝如き一匹夫が攝政關白たらば、天罰立どころである」と。

果してさうだつた。彼は東洋神聖大帝國を實現せんとする雄大な勤皇の精神に燃え輝きながら、大望を後世に殘しつゝ豪然として去つた。

二、家康の皇道意識と經濟

天下の統一は德川家康の手に委ねらるべき運命となつた。

家康は伊豆、石見その他の金鑛を掘つて多くの富を積んだ。開墾を奬勵して、秀吉時代の約二倍に達する耕地を得た。商工業の中心たる大都會はこれを自己の掌中に收めた。一切の政策は天下の統治と、幕府の基礎を固めるために定められた。家康一代天下の富は甚だ豐かであつた。二代三代はその恩澤に浴して、財政には少しの搖ぎもなかつた。然し末代となるに及んで急速力に、幕府も一般も激(ひど)い惡狀態になるばかりだつた。それが幕府の皇道意識との間に存する合法的因果律によることを知らなければならぬ。こゝに德川時代を、初期、中期、晩期に大別して、その因果律を探らう。

（イ）初期（三代將軍家光まで）

家康は若年の頃、三河大樹寺の住持登譽上人の感化を受けた。一度戰に破れて大樹寺に隱れたが再び討つて出た時には、正に一騎當千の奇蹟的勝利を得た。

天下を統一した彼は、天海僧正を宰相とし、元佶、承兌の僧侶をして政治に參與せしめた。然るに彼はまた、卜部兼俱（うらべかねとも）の子孫なる神道家梵舜（豐田神社別當）をも厚く用ゐた。梵舜は家康に仕へて、切支丹宗門鎭壓の考究、社寺の研究、文學の奬勵、庶務に關し功勞少なからず、實際的には天海僧正以上の働きをしてゐる。

家康が死に臨んで「關東の守護職とならん」といつたのは梵舜の感化に由るものである。その葬式も亦唯一神道式に梵舜の敎に由つて行はれることになつてゐたが、天海怒つてこれを暴止させた。

家康は戰國亂離、文敎廢頽の後を受け、從來埋沒してゐた日本古典を多く集め、且つ禁中所藏の書籍を奏請して書寫し、本邦の舊記類、祭祀に關するもの等、世に現れしもの枚擧に遑ない程である。これ家康の皇道意識が然らしむる所、家康は實に文藝復興の大恩人である。

家康は死に先立ち、水戸侯に秘語して曰く「後世幕政非なるに及んでは、水戸率先して錦旗の下に馳せ參じ、勤皇の大精神を發揮せよ。この事は累代世嗣に折、秘傳して決して他に洩るゝことあらしむる勿れ」以て神儒佛習合の外見を取つてゐた家康の衷心が、皇道を畏懼禮拜してゐた事を知る。

家康の皇道精神は、三代將軍まで續いて、二代秀忠の代には、早速萬葉集の研究が起つて來た。その第一人者は下河邊長流である。その學を受け繼いだ人に僧契沖が居り、遂に長年月の間秘められた萬葉集を讀み解いた。彼が古詞を明かにして初めて萬葉集を近代人に讀ませる事により、日本古代の思想精神が光明の中に躍り出で、奈良平安以來の神儒佛習合の陋弊から渾然脫離した純眞皇道の復興を見るに至つた。更に萬葉集の研究で、復古神道への大なる刺戟を與へた者に荷田東麿が出た。「萬葉集童蒙抄」八十卷は東麿の勞作である。

徳川光圀も萬葉集の研究に意を注いだ。この時一方には山崎闇齊が朱子學派から轉向して、垂加神道を唱へ警鐘の如き威權を發揮した。また一方に於て居酒屋兼質屋の哲人中江藤樹の直覺體驗の流れを汲む熊澤蕃山が實際價値指導批判の立場から、佛敎を排擊して寧ろ基督敎をまされりとし、基督敎よりも神道の眞なることを論斷した。

更にまた重大の秘事がある。政權久しく武門の手に歸して以來長れ多くも皇室におかせられては經費不如意にましました爲め、祭祀も政務に關係なき分を行はせ給ひしに過ぎなかつた。抑々皇道

は純粋祭祀を離れては有り得べからざるものである。然るに最も重要なる神祇官は廢れしまゝ御再興の運に至らせ給はず、吉田家の齋場に式を移させ給ひ、同所の行事を以て其の代理となされてゐた。神祇官の沈衰は皇運の沈衰である。

國學の復興は大義名分を明かにして、後水尾天皇、後光明天皇の英明相嗣ぎ給ふや、幕府も聖旨を體し、神事祭事も御復興に向ひ、特に後光明天皇の正保四年には、久しくも中絶し給ひし伊勢の例幣を御再興になつた。これ家光の時代である。

幕府は初期に於て、朱子學派の儒教を官學とし頑固なる儒道精神の持主、林羅山が官學の祖となつた。以來朱子學は天下統治上益々其の强剛の威を逞ふするやうになつたが、家康の餘德が家光までは活躍して、神道のために誠意を表してゐた。その間幕府及び一般の經濟狀態は頗る豐かであつた。

家康は慶長十一年駿府に移つた時、江戸の西城に貯へて居た黃金三萬枚、銀一萬三千貫を、秀忠に與へ、且つ戒めて曰く「これは自身の奉養に用ゐず、天下の物と思ひて此の上にも蓄積せよ」と駿府に退いた後も、家康は右の外に二百萬兩の遺金があつた。（或は三億圓とも云ふ）

秀忠は大器でなかつたが、家光は大量と彈力性を有つてゐた。彼は大膽に財を散じ、知行の增加

を行ひ、且又島原亂に巨額の軍費を投じたが財政には少しの搖ぎもなかつた。

（ロ）中期（四代より八代まで）

四代將軍家綱は皇道の精神に暗かつた。彼一代に幕府の經濟は最早凋落を告げ、綱吉繼いで豪奢な元祿時代となる。家綱に嗣子無く、京都から流浪して來た旅流浪の女に一兒を生ませた。その一兒豪瞻に育つて望をかけられたが將軍綱吉となるに及んで華奢を好み、猿樂に狂し、迷信によつて十萬匹の犬を飼ひ、犬の食糧だけでも加州藩の祿米に優ること百二十萬石といふ沒常識な經費を投じ、上野に中堂と其の他に諸寺を建築して多大の費用を空しうし、三の丸に桂昌院、五の丸、北の丸に妾等を蓄へ、無秩序のもとに土木事業を起し、累代の蓄財を失つたばかりでなく、金銀の採掘量が激減し、正貨が海外に流出し、財政の局に當る者が私曲を行つて國費を空費した。

綱吉は自ら儒書を講じて、幕臣の甘言を喜び、家康の精神を全く失ひ、皇室に對し奉る至誠を缺いた。その精神が一切の知慮判斷を誤らして、幕府の財政を危機に陷れたばかりではない。地震大火まで來つて痛棒を與へ、天下の道義亂れて立行かなくなつた。彼は日光參詣に際し國費缺乏の爲め、行を中止しなければならなかつた。惡錢の鑄造を繰返して危機から逃れるよりは外に道がなか

つた。

六代家宣、七代家繼共に凡庸無爲で、財政は益々急迫した。落合郷八の日記に右三代當時の經濟狀態を記して曰く「御三代の内、殊の外御物入多くして、御金は不殘御遣ひ、權現樣御軍用に御貯蓄被成候分銅金迄御遣ひ、其上大小名共武器を失ひ、馬に乘り弓を射る御旗下も無之樣に相成候」大名初め武士等が貧に窮して武器を賣り或は質入して居た狀態を偲ぶに足る。

八代吉宗は前三代の弊を受け、日本精神の持主、新井白石を用ゐ、鋭意財政の立直しを行つた結果、十年間平均年に米四萬八千五百七十五石、金三十七萬四千五百十九兩を殘した。吾人の意志が如何に經濟を左右するかは誠に以て明かである。

(八) 末期(九代より幕末まで)

九代家重より一瀉千里下り坂を走る頽廢運命の幕府は、國學思想に益々彈壓の手を嚴しくする。然し其の彈壓と共に天下の經濟は益々惡くなるばかりである。

幕府の彈壓加はるにつれ、正覺者は、益々盛に出で、國家の眼醒めはいよ〳〵潑剌となる。元祿十年綱吉の代に生れ、明和五年家治の時代に死んだ賀茂眞淵は、神道を儒佛習合の舊弊から純然脫却せしめて、奈良朝以後の大義名分を明かにした純粹皇學の第一人者である。彼は契沖の學を嗣いで、萬葉集の研究を大成し、進んで祝詞の研究によりて古道を闡明した。其の著、祝詞解六卷、祝詞考三卷、祝詞式數十篇は實に古代神道の寶庫である。特に其の國意考は日本歷史哲學の寶典と仰ぐべきものである。彼は明確なる理論を以て、儒佛兩敎を批判し、夫等が日本の歷史的道義精神及び天下經濟の實際上に及ぼした惡を指摘した。彼は亂臣賊子にして人を害した者が大名旗本となり、正しい者は平民の地位におし落された事を手嚴しく說いて、佛敎の矛盾を駁擊した。

眞淵の門人には國學の學徒が輩出した。前田春海、栗田土滿、前田夏蔭、小山田與淸、本居宣長等が其の優なるもので、宣長の門人に平田篤胤が出た。

本居宣長は享保十五年吉宗の代に生れ、享和元年家齋の代に歿し、大著古事記傳四十四卷によつて、初めて古事記の偉大なる價値を發揮した。眞淵の萬葉集、祝詞と共に皇道日本の大義を宣した最大の人物である。宣長は儒書渡來してより、亂世となつた事を慨し、また聖德太子及び空海の兩部神道を痛烈にはたき毀し、以て天照皇大神の神光を永へに曇ることなく萬世の道なりと力說した

是等の代表的な國學者の出現は、幕府を覆す神意の霹靂であつた。國學者の出現と共に、中江藤

樹を祖とする直覺體驗派の人々が現れたことを記憶しなければならぬ。熊澤蕃山を劈頭に大鹽中齋、佐々木象山、山鹿素行、佐藤一齋、富永仲基、吉田松陰、西郷隆盛のやうな至純な偉材がこれである。

その他文人に頼山陽、經濟に佐藤信淵、二宮尊德の如き偉材が出現したことも、皇道日本の面目を活如たらしむる。然るに眞理日本が光を放てば放つほど、幕府の彈壓は甚だしく、從つて天下の財政は、いよ〳〵望みなきに至つた。

九代家重は吉宗の後を繼いだが、一轉して財政は紊亂し、十代家治の代には田沼父子が私曲を逞うして、士氣の頽廢極地に墜ち、俄然再び大火飢饉その他の天變地妖によつてこらしめられた。爲めに疊をば五ヶ年間修繕すべからずとの頓馬な儉約令まで發せざるを得なかつた。十一代家齋に松平定信が居なかつたら、幕府は俄然轉覆の爭亂に捲き倒されたかもしれない。時しも神道家の間に勤王の熱誠が燃えさかつて居た頃である。山崎闇齋の熱烈勇猛幢の如き感化をうけた竹内式部が八丈島に配流となり、山縣大貳が獄に投ぜられたのはこの頃である。光格天皇が、皇學の復興を圖らせたまひ「神樣の國に生れて神樣の道がいやなら外國に行け」と仰せられた時代である。高山彦九

郎が皇室の御衰微を悲憤して自殺した頃である。林子平が海外を展望して憂國の精神に燃えながら禁錮された頃である。頼山陽の日本外史が現れて、尊皇愛國の熱情が武士に燃え出した頃である。間宮林藏が、鎖國主義を打破つて、黑龍江地方を探險して歸つた頃である。杉田玄白が蘭學事始を著はした頃である。英船が再び浦賀に來り、大鹽中齋が大坂に亂を爲した時代である。山縣大貳の書柳子新論に「皇室の衰ふるや、龍、水を失して制を魚に受く。その富小國の君にだも如かず……今や國その君を二つにす……仁何によりてか施さん。忠何によりてか致さん」とあるは、この時代に於ける忠烈な人々の叫びであつた。しかも日本は今や、鎖國の夢から醒めて、歐米との貿易を開始しなければ如何ともすべからざる機運に迫られてゐた。

此の時に際して、大志欝勃として忠臣山縣大貳は上州小幡城主の顧問となり、相州箱根山攻守の作戰計畫を立てゝゐた。大貳の精神に共鳴する者は京都にも居たが、事成らずして死罪に終つた。

松平定信が居たばかりに、危機一髮の幕府は、年剩餘金三十三萬八千兩を拾ヶ年間積むことが出來た。然るに定信去つて後、家齋は奢侈秕政の爲め、大坂の商人から借金したり、惡貨鑄造によつて誤魔化したりしなければならなくなつた。家齋が使用してゐた女中だけでも合計一千人を超えてゐたとは驚かざるを得ない。天下の機構斯の如く弛緩し、賄賂は公然として行はるゝに至つた。

十三代家慶の代に、佐久間象山は、當時の武士が精神的に丹誠するよりも、內職でもして少々でも金を取つた方がましだといつてゐることを上書して警戒する所があつた。それ程天下の經濟は苦しい狀態に陷つてゐた。天保年間に出た「破れ家のつゞり話」の中には「武家は大名小名に限らず世上一般の不如意より政事にまでも破れ、殊に陪臣などは、三割減、或は半減、甚しきは其の上にも減削せられ誠に憐れなるありさまなり」と記されてゐる。

大名小名武士ばかりでなく、農家の貧窮に至つては、實に慘たるものであつた。然しいかに苦しくても、惱みを訴ふれば、直ちに酷い鞭刑に處せられ、手足に桎梏をはめられて、聲を呑んで涕泣する有樣だつた。甚しきに至つては、斯る貧窮な農家が、明年明後年の年貢をまで强ひられた。本居宣長は「近來百姓は特に困窮の甚しき者のみ多し」といつて居る。

其の爲め、百姓一揆頻發して、既に檢べ出された者ばかりでも五百七十四件にのぼつてゐる。一ケ所の百姓一揆が全國に波及したのは、農民の反抗精神が時代的に浸潤して居た證據である。彼等は奉行や代官の苛酷な所置を憤るや竹槍蓆旗の出立で城下におしよせた。沿道の農民を誘ひ出し、これに應ぜざれば放火打毀しをやるので、續々と集る暴徒の數は數萬を以て算するに至り、鐘太鼓を鳴らし、法螺を吹いて凄じい勢だつた。

百姓一揆に樣々なる種類があつた。以て惡政が樣々と手を變へ品を變へて行はれてゐたことを知る。苛酷な增稅を憤つた一揆もある。飢饉に際しても免稅しなかつたのを憤つた一揆もある。大鹽中齋の亂、久留米一揆、房州北條の萬石騷動、奧州信夫伊達二郡の一揆、上野下野秩父熊谷に蜂起した二十萬人の一揆、高野山寺領の農民一揆、伊勢三十二ヶ村の一揆、毛利藩の一揆、阿波藩一揆等その大なるものである。百姓一揆の外には、米騷動卽ち打毀しが猛烈にくり返された。これは米價暴騰の爲めに、困窮に惱んだ細民が、浪人や流浪の群と一緒になつて、米屋、質屋、酒屋を襲つたことである。特に享保、天明、慶應の打毀しは猛烈を極めた。

その他、徒黨、强訴、逃散が頻發した。百姓大勢群集して惡事を謀るを徒黨といひ、黨を結んで訴願に及ぶを强訴といひ、相謀つて邑里を出奔するを逃散といつてゐた。是等に就いては、屢々嚴重なる禁止令が下つたが、依然として止まず、これを密告するものには賞を與へ、以て切支丹宗門取締同樣の警戒をしてゐた。

是等の騷動相絕えず、ために耕地の荒廢甚しきものが有つた。二宮尊德が櫻町外三ヶ村の荒廢地を復興したのは有名な話で、如何に農民の精神が荒廢してゐたかを物語る。是の如く苛政の爲、耕

作しても採算立たず、所謂散田棄作として顧みなかつた、寛政十一年の上書、高野昌碩の「富强六略」に當時の狀況を記して曰く「豐饒なる上田はその負擔過重の爲め、所有者は辛苦耕作すれども、一向に利得なく、隨つて皆爭つてこれを貧民に讓與し、甚だしきは貰手なく、遂に止むを得ず若干の金子を添へて、强いて貧民に受取つて貰ふの奇觀を呈し、これが爲めに惜しむべし、上田は盡く荒地となり、たゞ百姓の難儀のみならず、國家の歲入も亦隨つて減少した」と。

經濟難と共に天下の道義風習の亂れたことも、平安室町の末葉を凌ぐものが有つた。松平定信の寛政改革は多大の功果を擧げたにもかゝはらず「白河の清き流れに魚も棲みかねて、元のにごりの田沼戀しき」、「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶというて夜もねられず」の狂歌は、墮落し果てた當時の人心を偲ばしめる。

特に幕府が、切支丹禁制以來、佛教を厚く保護した結果は、極端なる惡結果を齎らし、僧侶の性的墮落と財的貪婪は言語同斷の極に達した。社寺の門前、淫蕩の巷と化するもの多く、幕末延命院の如きは極端なる迷信、好色、破戒の魔窟であつた。

加ふるに奈良朝以前より渡來した支那陰陽道は、深く根を張つて民衆を迷信に陷れ、畏れ多くも

山陵を穢土と信ぜしむるの大惡をはびこらせた。

斯の如き天下の弊風、困憊が、當時の官學思想及び一般の信仰に深き根源を有するものなることを吾人は明確に看破しなければならぬ。德川官學の祖林羅山は、朱子學を奉じて斯ういうた。「本朝の神道はこれ王道、王道はこれ儒道也」と。彼は皇道と王道とを同一視したのである。皇道は權利觀念を超絕せる至純至眞の統治道であつて、天壤と共に窮りなきものである。王道は覇權を爭うて勝つた者が一時天下を治める道である。泰時、時宗でさへも王道を天下に布いたのではない。羅山が王道を以て神道なりと觀じた思想は、武家政治の思想よりも惡化したる異邦思想であつて、下剋上權利觀念の毒を皇民に注射した。

加ふるに平安朝以來、祭政一致の祭祀は廢滅し、天下の祭祀は佛式を以て行はれ、或は支那風に行はれて、祖神と神勅に對する皇民の信仰が薄らぎ、異邦信仰がこれに代つた。その結果皇民は唯物的利己主義に墮するに至つた。

德川晩期は、實に奈良朝以來の宿弊總勘定を意味してゐたのである。斯の如き宿弊を一掃して、一千三百年の古、否二千五百年の前に於ける建國當時の皇民意識へ煥然と全國家が還元自覺するに

至つたことは、何とした莊嚴眞劍な偉象であらう。

第十五章　皇道意識と明治維新

一、學習所

光格天皇の思召が、孝仁天皇天保年間に於て漸くに實現され、京都に學習所が創立された。御目的は皇子及び公卿子弟に、國學思想を授けられることであつた。學習所の奥の間には學習院の額が掲げられてゐたのに、入口には學習所との札が掲げられてゐたのは、王道思想の幕府が干渉した結果である。學習所の學則には左の文句があつた。

「皇國の懿風を崇めよ。國典に通ぜずして何を以て正を養はむ」

加茂眞淵が純粹神道を唱へて以來、神佛習合の兩部神道の迷妄が一掃され、靈明にまします光格天皇の美資により、皇族、公卿の方々が國典を研究遊ばされることゝなつたのに、幕府は事々に干

渉の累を重ね、幕吏を學習所に派して傍聽せしめ、國學を削つて漢學を強いた。

二、報本學舍

時已に皇道意識は明瞭に、皇運挽回は日を期して待たれた折である。頃は天保十二年のこと、播州小野藩に國學を講じてゐた大國隆正は、時到れりとなし、藩を辭して京都に出で、報本學舍を創立し、公卿同士の來るを待つた。忽ち參じたる代表的人物に、岩倉具視の嚴父具集卿、無名の英雄もとは大僧都の玉松操、石見國津和野藩士の傑物なる小男福羽美靜があつた。大國は當時此の如く語つた。

「北畠氏(親房卿)は戒事方に殷んなる時に際して、皇統の眞僞を辨じ、以て順逆を明かにし、名分を正す。其の功甚だ偉なり。唯惜しむらくは度量に乏しく、中興の業竟に振ふこと能はず、而して北朝は之れに反し、武略あるものは擧げて之れを用ゐ、功あるものは土地を賞與して咨します。故に天下義を輕んじ利を重んずるの徒、相率ゐて之れに屬す。强弱果して如何ぞや。彼の北畠氏の學